DS 895 H6M38 v.2

Matsuura, Takeshiro
Takeshiro Ezo nisshi shu

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/takeshiroezoniss02mats

顧問
井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂
校訂

日本古典全集

松浦竹四郎著

多氣志樓蝦夷日誌集 第二

夕張日誌　後方羊蹄日誌
十勝日誌　久摺日誌
納紗布日誌　知床日誌

DS
895
H6M38
v. 2

LIBRARY
MAR 28 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

東西蝦夷山川
地理取調紀行

夕張日誌

多氣志樓藏板

藏書之章

多氣志樓蝦夷日誌集第二目次

夕張日誌……三
後方羊蹄日誌……四三
十勝日誌……八三
久摺日誌……一二七
納紗布日誌……一七一
知床日誌……二〇九

凡例

一ユフバリ（去箱館百余里、従石狩三十余里）は石狩十三ケ場所（トクビタ、上サッポロ、下サッポロ、ハツシヤブ、上ツイシカリ、下ツイシカリ　上カバタ、下カバタ、シユマ、ツプ、上ユフバリ、下ユフバリ、シノロナイホウ）の内にて、上下二ケ所に分れ、其地エベツブトの左の源にして、西南はユフブツ、サルに境し、西北（イヌヰ）より艮（ウシトラ）はポルムイ、ビバイ、ソラチの水源に接し、東は十勝のサツナイ岳に隣る。是蝦夷地第二の大岳也。安政四（丁巳）年七月其川筋よりシコツ川すぢ千歳會所の後へ新道見立の爲其境域を實撿し、ユフバリ誌三巻を著し　夫よりシコツ湖に上り、戻りてヲサクマナイより海濱タルマイ濱江、是また新道見立の爲に垂舞岳の東西を通行し、是を見てシコツ誌一巻を著し、共に其地圖等を画し、函館府に納めつ　今其四巻を合せ、要を摘て一巻とす。此巻には是迄蝦夷人等は已が年齢をも辨へざる者の様に傳へ來れども然らざる事、また天地の開闢人倫の起元等其傳へある事、また　皇國太古の手振此地に遺れるをも審に記して夕張日誌と名づけしなり。されば此一巻にて風土および新道の開き方等惣て大概を見るに足るべし。志士なほ審なる事を閲せんの意あらば、原稿四巻を熟讀すべし。

萬延元（庚申）中冬於下谷新屋敷僑舍　　源弘しるす

丁巳 夕張日誌

伊勢　松浦竹四郎　著

石狩の元小屋に歸れば、多くの土人を集めて支配人（阿部屋林太郎）等懇に世話しつゝ種痘をぞ施しける。抑此地第一の災厄とするは痘瘡にして、人口是が爲に減損する事少からず。鎭將村垣君深く是を憐み玉ひ、多くの醫師を下し給ひて離島の隅々までも永く此方を施さしめ、其災厄を除き玉はんとなり。

今よりはもかさの神も國人に跡はとゞめじ君がいさをに

此中に夕張の土人等居合せけるを（シリカンチウ、アシユイト、ヤエタルコロ、アフンデクル）四人を雇て同行せん事を談ず。

八日纜して出、長谷川氏（儀三郎）酒一樽（二斗入）を賜ふ。夜宿二津石狩一微雨（安政四、丁巳七月）

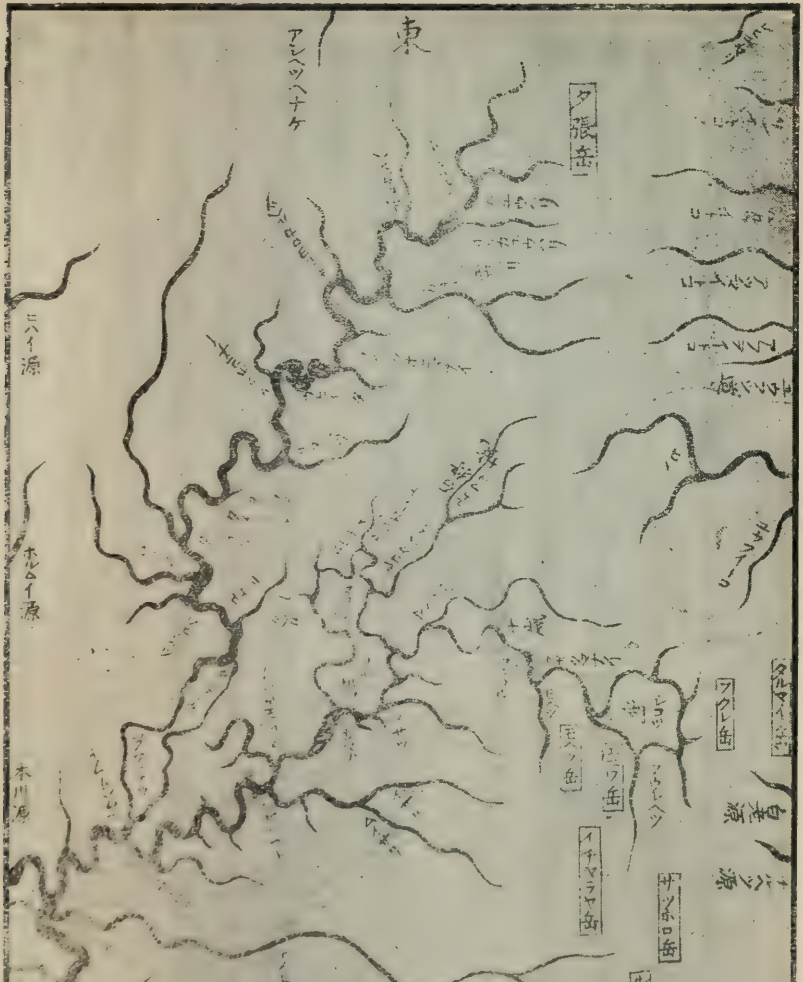
九日重霧四塞發レ舟（一り）エヘツブト（巾卅余間）に至る。エペツは兎屑の如く三ツに分るゝ處也、依てしか号く。此處昔は人家十余軒有しが今はなし。從是入るに兩岸幽蔭薈蔚恰も天日を翳ふが如し。鷲老鵰去て啼鳥惣て鼉時に異なり、椽象も色黒み利觜蚊も倍々觜利くなり、しばし行ばカモイウツカ（瀬）チヤノイペ（右川）チシネノタフ（平地）河流蜿轉とし遲流なり。上に沼有、蘆荻叢鬱たり。樹は柳、桑、赤たもたむき楡赤楊かつら刺桐等に獮猴桃紫葡萄の類纏縛す。カモイウライウシ（急流）ハンケソウバ（左

川）ヘンケソウバ（左川）ホンカヤニカルシ（左川）カヤニカルシ（左川）トフシホヲマナイ（右川）シユブンペツ（右川　マワシノカツトコン（平地）チエトイトシユンナイ（右川）此邊鶴（ツル）多し。ヘタヌ（二股）（右シコツ、左ユウハリ）此處ユフバリの水は白く濁たり。

左り（ユウバリ）に上る（一里余）ラウントウ（周圍七里）周り芦多く芰實（エレ）、蓍菜（トチカヽシ）、莕菜（アサヽ）、蓴菜（ヌナハ）多し。又流木多く積重りあり、濁水の節は所々舟通ひ難し。此所より二里許過てタンネトウ（長沼）（巾六七丁、長一り余）是も芦荻多く萢（ヤチ）沼様成所也。其廣袤知難しとぞ。夫よりクンネトウ（闇沼）（右川）是も上は萢沼也。水濁て落る故にしか号く。ニヘシヤイウシナイ（右川）バンケヌブカ（平地）ヘンケヌフカ（平地）アユノタフ（同）クツタラ（左川）古村（フシココタン）爰も昔は人里にて寛政度迄は五十六軒有しと聞ど、今にては一軒もなし。是よりノヤサロウシ（平地）アチヤンペ（左川）エウンヘツ（左川）

此川第一の支流にて小字多く、源ホルムイと向背して少しの山有。

爰を過てクツタラ（右川）此邊地味高く、雪融の節も水上らざる故に畑跡多し。是迄を上ユフバリと云。從是上を下ユフバリといふ。土人に聞に、最上某此所に來られし時案内の者決言を解し得ざりし故に、上下違ひたりと言傳ふ。（余此所までタツコブより舟を下して見たれは從是タツコブ迄を爰に記す）過てビラケシヨマ（右川）テーネナイ（右川）トイビラ（平）ホンビラ（平）ホロビラ共に山の下周平、過てユフニ（右の方川）

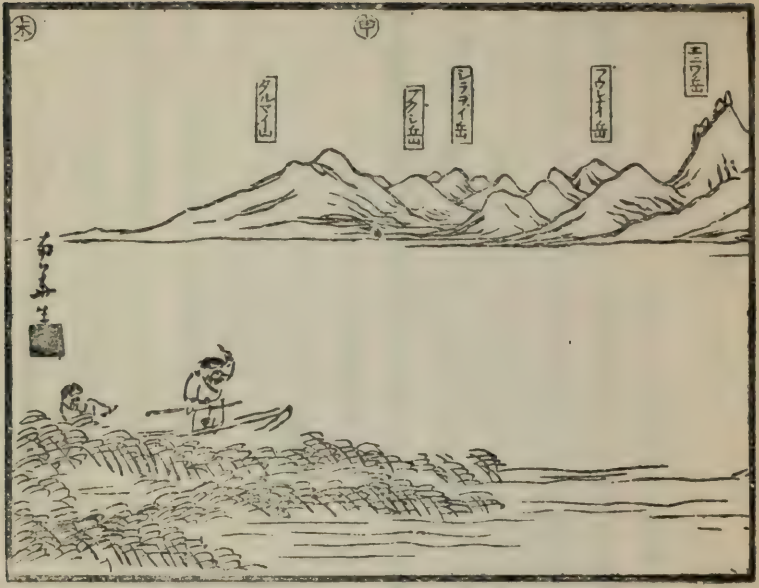

東
夕張岳
ホルロイ源
西

此川第三の支流、小字多く、源にユウニノホリと言山有。ツカベツと向背す。
此邊より脇山有、川も追々急流に成る。越てアノロ（左りの方巾十間ヨ）平地、人家跡あり。
此川第二の支流、小字多く、源はホルムイの源と并てユフバリの北に廻るなり。
過てワリヲマナイ（平）過てタツコプ、此所はマヲイより越來て宿りし所也。（是より上十枚目を爰に讀つくべし）
扨（二枚目ら（〇五頁））ヘタヌ（二股）より右に入り（一丁斗）シユマ、ツフ（川巾五六間）小休所（從津石狩五り）有、傍に土人一軒（イワクケン）有、爰も往古は人家多く有て十三ケ場所の一なりしとぞ
本名シユマヲマフにて岩有と云義なり。源は察縄岳より落る兩岸に小石多し。
境標（石狩、ユフブツ）有、過て兩岸萢地多く木立繁し。キナチヤウシ（右川）ホロヒリ（平地）ウレロヲレウシ（平地）ピンナイ（右川）上に沼有（周一りヨ）爰にロコンと言針有る魚あり、此沼の上ロコモツナイ（小川）と言あり。此同名ユウフツにも有。ロコンは魚の名、モツはヲツの轉語にて、居る義也。是松前にてトケヨコ（刺魚この義也）此國惣ての物にコの字を附る（錢コ、茶コ等言り）漢名黄顙魚（本綱）䱥魚（和名鈔引崔禹錫食經）又ギバチ（和語）水蜂（水戸）と云。煮食すれば水腫及び小兒疳疾を治すと、一頭黄顙八鬚魚。綠豆同煎一合餘。白著作羹成頬服。管覈水腫自消除（醫林集要）。またミコウヲ、近江にてアカサ、筑前ハチフリ、濃州アカサス、播州ミコ女郎と云有。色少し異なる斗也とて（ママ）（鱨絲魚とす）又當

所には種々の物有、土人の話に魚の色は棲る所の土性にて異る物也と、旱歳にて水清時は色赤く、雨多く水濁れば黒しと云り。土人秋比腫には獼猴桃を取食し、春夏の際の腫には是を煮食するに其功著しといへり。過てヲコトイノタフ（平地）河流ますます屈曲す。右の方イサリフト（川巾卅余間）番屋、藏々有。（ユウフツ土人七軒、従シユマ、ツフ五り半）前に梁を銘々に架たり

川筋小字多し。上は二流に分る（右ムイサリ、左イサリ）人家（石狩土人貳軒、ユウフツ土人七軒）有。源は絵縄岳より來る。此兩村共樋平越新道より通る也。稗黍粟畑多し。

二股より左り（シコツ）に至る、ショトンナイ（右川）ソウヘツ（左川）フシコユフハリ（左川巾廿余間）昔は夕張川此所江落來りし由、今は萢沼に



なりて舟通し難しと。ヒトウシ（右川）イヘツパロ（沼口）爰にて夜に入たり。兩岸雜木絶て蓊鬱たる蘆原の中、此方彼方數條に川有。水淺くして舟艇り捗取られず。此邊比目魚多く、瀬に來るを見、櫂を以て是を打殺し、數尾を捕たり。海より廿六七里の水上に、此魚を見る事實に奇とす。又所々に鹿の群居に逢ふ。過てカマカ（洲）と言に到る。一本の合歡（ネ）の木ある下に宿す。（從イサリフト三里）晩雲漸収り月將レ斜、瀰漫浩渺極目無レ際、西を顧れば垂舞（タルマイ）、シコツ、繪庭、サツホロの岳々隱々とし雲間に突出す。清風吹度るが故に今夜は蚊の愁を忘れて一睡したり。

宿もなきこよひはこゝに旅寐せん川邊の合歡
木も睡るころなり

弘、此ころ藥圃擷餘を閲するに　羽州秋田城外有

と河、其源湍注於山谷、故其水則淡、其中産二奇魚、殆如鞋底魚、大都五六寸、較比目大同、唯鰭尾小異、味亦似比目而美、土人呼曰鷹羽比目。恐らくは是なるか。此魚エヘツフトより本川筋にて一魚をも見る事なし。右股此方にのみ産するも亦奇とすべし。

十日待平明發、をちこちの芦荻の間より櫂の聲に驚き水鳥の立に、我等も驚事數度、カリンバブト（川口）出るや、ヲサツトウ（沼有）

沼（周三り位）川有。（人家九軒）。源イチャラの南より來る。此村も樋平通りなり

南シコツ（并て）シュクバイ等皆爰に落入る。過てマヲイ（沼周三りヨ）此間芦間を分行に　向より小舟に棹て鶏首に括槍を提て魚を覗ひ出來る者あり。かの阮家の三兄弟も如此有けんと思はる。南方にアンガリト（周二り位）上にウエノタ（出岬）タンネエンルン（長岬）マヲイトウ（周三りヨ）に入り、（左方）ツカベツ（川口）を過、冷水平（崖平）に至り（清水有）上陸す。

源（ツカヘツ）はユフニ岳より來る。此地晉曆比は畑多く有しが、既多くなりしより荒たる由也。

此地よりヲサツ、マヲイの兩沼を打越てシコツ、紛繞山々を臨めば頗る勝景也。下は芒、青茅、敗醬、蘡薁、腥頭香、香薷、絺綌草、小連翹、蘭香草、龍膽、蔓龍膽多く、殊に釣船草は紅白紫黄共に繁茂し、其中に金鐘兒、紡績娘、老末蛬等鳴かはしたり。爰に歸路の粮を樹に釣上げおき出立に、聊の道形絲柏原の中に有る也。ホロナイ（小川）レフントンネ（小川）ウリロチ（小川）ヘケレコツ（是迄の川マヲイに落る也）此

所緋也。（是より先の川々皆ユウバリに落る）下りてナヨケホツ（小川）ホンナヨケポチ（小川）フルサン（小川）ユウニ（中川）をゆく。途中に蕪錦鼠を多く見たり。又吉事草一面に生たり。是江戸の化姑にて實の生りしをば見ざりしが、此地にては大さ無患子許の白き實なれり。其味甘美にて葡萄の如し。土人等是を干貯て糧とすと云。過てカタムサラ（五六丁、谷地）の芦原を押分〳〵行て、頭を擧れば、艮方より南をかけてハチヤンペツ岳（ユフハリ）ホルムイ岳（石狩）アノロ岳（ユフハリ）ヲヒフイ岳（同）ソラチ岳（同）山勢連亘、猶其を越て遙に亞志別岳、從是聳然とし峙立し、并てシユフハリ（左股）モユフハリ（右股）競レ肩擎レ天（并て）南に樂別岳、板井別岳、沙留岳乘巖駢列す。其地幾多の頭山襟帶の間に連る。其眺望言ん方なし。此邊鹿多く恰も蜘蛛子を散せるが如し。ヤエタルコロ一頭の熊を射たり。過てニタツヘツ（小川）ヘルウヘツ（小川）過てタツコフ（從ヤムワツカヒラ凡六厘）なるコトンラン（人名）の家に宿す、傍に眉豆、粟、稗、餅粟、小豆、蘿蔔、箭竿、白胡瓜、南瓜等多く作り、又傍に香蒲を植たり。是は飯を炊て後湯に入、香を出し吞が爲に植置とぞ、此なき時は五針松、姫石楠花を入る由也。扨此家主は此地第一の博識にして故事をよく辨へ居るとぞ。相貌頗る威有て綠髭蓄髯胸を掩へり。年齢を問ふに八十三歳、妻は六十八才と言に驚き、土人は歳を知ざる者と聞しに能く知たりと言へば、それは濱邊の者の事也、我等とて何ぞ己が歳を知ざるべけん、此國には物の算數もなき樣に内地にては思はるべけれど、其數往古より傳はれり。されど文字なき故に支干と日の吉凶は割出して傳ふる事なけれ共、土用・彼岸、社日、入梅、寒の入、

多至、夏至、八十八夜、節分、月の大小閏等は月の盈虧、草木の榮枯、雪の消方、虫の音、鳥の囀り樣、花の咲き、實り方、獸の穴に出入を以て其前年、前々年に引當斟當るに、一日二日の遲速はあれども、三日四日の違は有る事なし。また月の名も夷言あり。

正月、二月、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、其義イノミチユ（正月）フとは神祈月と言義也。此月は年の始なれば年中の事を神に祈る月なれば也。カモイは神なり。ノミは乞祈る義か。則日本紀神代卷に下枝懸ニ靑和幣白和幣一相與致其祈禱焉。また萬葉集（卷三）天地之神乎祈など見え、又叩頭（乃美ハ祈也、禱謝之義。又云ニ奴加豆久一額衝也。倭名鈔ニ叩頭虫、和名沼加豆木無之。周禮鄭註、頓首如ニ今叩頭之類一、首叩地也通稱）とも見えたり。ハフラフとは、此月より魚も川に上り、鳥も音を立る義なり。大の月をホロ、小の月をホンチユフ、閏月をイカシユマチユフと言。また日の數は、朔日、二日、三日、四日、五日、六日、七日、八日、九日、十日、十一日、廿日、廿一日、晦日は十と二十と合てよび、十一は一と十とを逆に讀合する也。又錢の算も此如く卅一文とは一を先にし、次に卅と讀也。四十は二ッ二十を合する故にトホッと云、トは二ッ、ホッは二十也。五十は十と四十を合せ、六十とは三ッ二十を合せ七十は十と六十と合せ、八十は四ッ二十を合せ、九十は十と四ッ二十を合せ、百をばまた五ッ二十とも言。其上二百、三百等只言葉こそ異れ、少も內地の數に異る事なし。（余が著す「末和留遍志」に委くす。往昔は惣ての事備はりしが、人口の減るに隨て風俗も次第に變りけるとぞ、惜む

東崎畫寫

べく、余試に秋の彼岸を問たりしに、八月二日三日比と言しが、果してその如くなりしかば感服の餘り、其傍に戯れにしるしぬ。

　花鳥に移る月日をしれるこそ神代ながらのためしなるらめ

庭に熊鷲鵰等を飼ふに、其鵰の籠前にヱナホを多く立て祭れり。其由來は往古未だ國土と云物なき時、青海原の中に浮油の如き物有、其氣燃立る如く、炎々と上りて空となり、濁れる物は凝て島根となれり。其島根月日を重ね太く堅まり、又氣凝て一柱の神となり給ふに、炎々たる清く明らけき氣上りて成りし天にても其氣凝て一柱の神と成り、五彩の雲に乘り降り給ふ。其うち青雲を海に投入れて水となれと誓ひ給ひ、黄なるを以ては島根の隅々を埋み、赤きを蒔ては金銀珠玉器財と成れ、白きを蒔ては草木鳥獸魚虫となれと誓ひ玉ひ、其種々の物なり調ひし後、また其二神の御意を繼て國土を經營し給ふべき神なきが故に如何せんと案じ給ふ。時に二神の御前に一羽の鵰飛來りけるを見玉ふに、鵰は眼をハチ／＼としたりければ、いと面白しと思召て、二神其時何事やらん行ひ玉ひしより多くの神達を產玉ひぬとぞ。其中にヘケレチユツフ（日神）クンネチユツフ（月神）とて光うるはしき二神の有けるは、此國(クンシリ)の霧靄(ウララ)深く暗きを照し玉はんとヘケレチユフは雌岳(マチネシリ)より、クシネチユフは雄岳(ピンネシリ)より殘れる黒雲(クンネニシ)に乘りて昇天し玉ひぬ。さて濁れる物の成し島根(モシリ)の始は今の後方羊蹄(シリベシ)の岳なり。其產れ給ふ神達は或は火を生し、或は土を司り給ふ。火を生じ給ふ神は惣て柴樹[illegible]の種を蒔植る事どもを敎へ、土を司る神は草木の事より木の皮を剝て衣服を作る事を敎へ給ひぬ。其餘水を司る

神、金を司る神、蒼生を司る神達ありて鮭を取鱒を突、青魚を網し（江刺姥神等是なるべし）種々の工風を凝らして其末々産れ給ふ神達に教へ給へりと、夜もすがら爐邊にて余（チヤウカイ）に語り聞せける　是を聞くに上古之世未レ有二文字一貴賤老少口々相傳、前言往行存而不レ忘、書契以來不レ好レ談レ古、浮華競興還嗤二舊老一（古語拾遺序）とあるも思ひ出られて、神代の儘の宿りなりけりと一首を吐露す。（此傳へはユカリといへる謠物に委しくぞあり。然れども其場所〳〵にて大同小異あり。是はユフハリにて聞まゝなり）

しるしおく筆てふものもなき里に絶ぬ神代の道ぞあやしき

十一日黎明土人二人を艋舺（サンチユツフ）に乘せて遡る。ビラ（左崖）恰も屛障の如く、水底平磐にして挙确水色白く濁りたり。過てイワナイ（右方）ワレヲマナイ（左方）タイケシ（右方）此所人家三軒（ヲヽカシユ、トナシラン、コトンリヤ）ありて爰にも畑あり。是より舟は行ざる由にて陸行す。ヲヒブイ（右方）此邊穴居の跡多し。（近年迄人家有）ハンゲタラ（左方）ペンゲタラ（左方）フブシ（右岬）神樀（カムイソウカ）（大磐）此邊巾百余間にして淺く、此方より彼方迄庭中の飛石の如く岩出并び連り、昔神の作り給ひしなりと、依て神樀と号す。并てナエ（左方）また川中にカモイチセ（神家）（大穴岩）と云大岩有、上は家棟の如し。フル（右山）ヲイカウシタツコ（岩壁）此所南岸に瀧有て川に落る。チヨマチイ（左川）エカシナンワツカ（左川）是も瀧に成る也。チユクヘツ（右川）イタヘツ（右川）過てウツカ（淺瀬）此所また川廣く、一同に手を曳連て北岸に渡る。底は平岩なれど濁りて見難し。越てリイヒラ（高平）（右崖）高凡十五六丈、上にマツクツナイ（中川）と云瀧にて

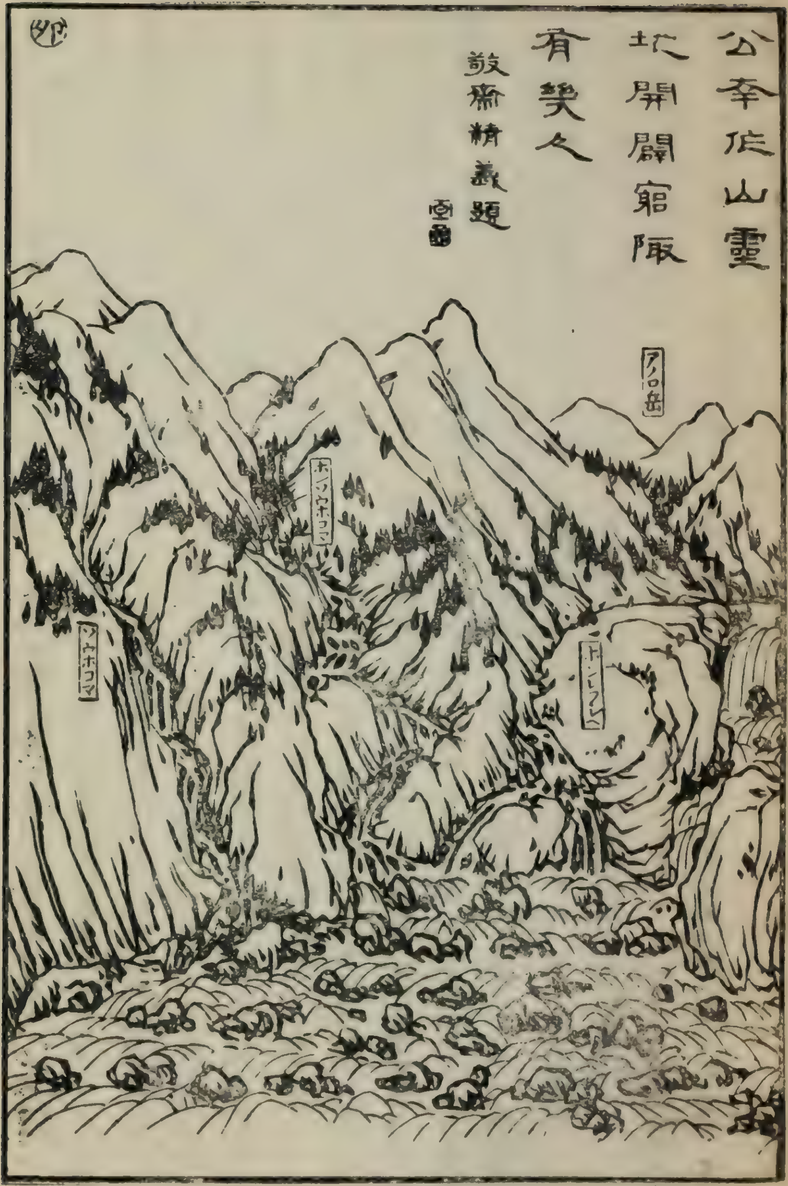
巾一丈許、下は三丈にも廣がり、二十余段に成て落る。實に天下の奇觀也。此所川中に島三ッ有て幾瀨にも成て來る。今宵は爰にて夜を明しければ、蚊なくして快寐たり。

十二日平明微雨一頻り過、北岸小石原を上り、クヲヘッ（右川巾六七間）の川口を見る。

是第四の支流にして、源はサルの山より來る。十余丁上に、一ッの瀧となり落る所有。

ホロシユシユタイ（左川）是より上を神所（カモイコタン）と云、又シユホロとも言、小高き所より眺望するに、奇岩怪石簇々とし目を驚せり。こゝを下れば河岸に百余間の所、平坂曼衍如レ作レ畦恰も千疊敷と云べき所也。此に到り北岸歩窮て南岸に越、藤蘿を攀り岸より北を顧るに、ソウホコマ（北岸瀧）一條の瀑布二段に成て落る、前に大岩有、恰も笋の如し。又少し上（二十ヨ間）ホンソウ（北方）に一條の瀧山峽より數十條に成て恰も白髮を振亂せる如し。其前川中にホロレフシベ（大岩）とて五丈餘の烏帽子の如き岩有、其半程に岩洞（大サ四尺）有。洞中に神靈有とて尊敬し、エナヲを納めて拜す。其上にも又ホンレフシベ（大サ三丈）と云有。此邊の岩惣て菊葉の黃連、雪もゆう　瓦松其余種々の異艸生ず。又（北左）ホンソウホコマ（高三四丈瀧）三段に落る也　平磐の上六七十間を上ればバンゲソウ（大瀧巾五間、高貳丈ヨ）とて本川一口に成て落。其上にホロシユマ（高貳丈、巾三丈）とて屛風の如き平岩有。此北岸にヘンケソウホコマフ（巾貳丈ヨ、高五丈斗）と云瀧、石面を傳ひ落、其眺望も亦奇也。此南岸に平磯岩百間許上ればヘンケソウ（川巾百五六十間、高二丈斗平岩）河水三筋になり落る。右の方シユムンテキソウ（右瀧）（内六七尺、高貳丈）中をシノマンソウ（眞中瀧）（巾

沐雨櫛風多
苦辛奇形怪
状碧巑峋兀
レユウハリ
モユフハリ


公牟佐山靈
坮開闢窟阪
有笑々
敬齋精義題
アノロ岳

貳丈斗）此瀧兩岸より差出たる間に落る故に咆々として梭尾螺(ホラ)を吹如く滿山に響きぬ。左りハルキテキソウ 左瀧（巾三丈）并て三口になり落る、下の平磐には井戸の如き穴多く有。此所迄は鮭鱒も上り、是より上には鯇と桃花魚斗の由也。河巾廣く底深くして水色如藍漾々とし恰も湖かと思はる　此所當節は三口に成て落れ共、雪融の時は百余間一口に成て落るとて、實に奇觀なるべく思はる。此所よりシユフハリ（本居）モユフハリ其外水源の山々を眺望するに宜し。是より兩岸は岩石の上を飛越飛越て廻る所まゝあり（十七八丁）チエツホヲツナイ（右川）過てヲソウシ（右川）此邊の川巾漸々卅間許にて兩岸追々蹙る。此所にて一ツの穹廬(ホンチセ)(マルニシ)を見たり。是はサルムカワ邊の土人等年々熊鷲等を取に來る時の爲に建置とぞ、余等爰にて一宿しぬ。かねてヤエタルコロは獵具を用意して來りしかども是迄何の獲物もなかりければ戯に、猛熊暴熊忽潜伏　時有二鸞鳳來翺翔一と記るし置ぬ。此事を翌年（戊午）六月ムカワ（ユウフツ）のキリカツ村にてトンカウ（小使）が家に寄りしに此程熊にかけられ過ちをしつとて臥たりしが、種々の話しの序に、我がユフハリの事を話したれば、其小屋こそ我が小屋なれ。過し暮獵に行て見しに、柱に文字有しかば、是は神の所業(シワザ)か、かゝる所迄和人は來るまじと思ひしとて大に悅び、種々山中の事ども物語せしも不思議なる事なり。

十三日南岸を上る、雜樹陰森として暗き事甚し。ハンケクリキ（右川）ヘンケクリキ（右川）兩岸巖峨々とし歩行惡けれ共、樹木茂れる故に下草なくして足もとよし。向岸にキヨロカルペツ（左中川）と云有、此山惣て椴にて高き所には樺多し。

當川第五の支流、源はホルムイの方に至る。アシヘツと向背す。

此邊岳の西南の肩にして凡六合目と思はる　木間より眺望し、頭を擧れば兩岳の巓も近く見ゆれども、河ん共其嶮容易ならざれば腰折一首を

　誰もみな雲井のものとゆふばりの山に辛くも我は來にけり

誌し、粥を煮て山靈に供へ、是より山間の雪路をヲソウシ迄歸り宿す。

爰にて山派水脉(ママ)を指て川上の大概を審問するに（從是半日）ケネウシ（小川）ホンホロカヘツ（左川）大磐瀧に成落并てハンケマヤ（右川）ヘンケマヤ（右川）此邊惣て岩山　樺　椴　蝦夷松のみあり。過てハンケホリカユフハリ（左川）ヘンケホリカユフハリ（左方）何れも山峽を屈曲蜿轉し行　源はアシヘツの方に到る　過てヘタス（二股）此所正面に丸く見ゆる大岳有　其二股より右に入るをモユウハリと云。源は沙流の源と向背し、十勝領サヲロの後に入　左りはシユフハリ　其源劔鋒を立並たる如き高山の間に入りてソラチの方に到る。二岳は其兩源の間に突出す。是夷地第一の高山にて　其巓は五株松簇生し、谷々は石楠薬一面に生たりとぞ。四時雪絶る事なく、コトンランは堅雪の時此頂上を窺たりと、其他にはなきよし也。往昔（寛文年間）美濃國の僧圓空此岳に上らんとて此山に分け入しが終に上り得ず、神所に七晝夜藥師の神咒を唱て籠り、一軀の佛像を彫みホロレフシペの岩洞に納めて歸りしに、其夜より大雨三日三夜降繼き、河水漲り、其佛像を押流し、[illegible]シコツに到る間に　[illegible]は今の十[illegible]に辿上りて有

しとぞ。仍て圓空其地（千歳の弁天堂）に小堂を築て是を安置し歸りしとぞ。實に此地は役小角　行基、弘法等の大德だに錫を入れざりし靈山なれば、如此異の有るも宜なる事なり。

飛彈國志　姓氏或ハ何國ノ產何レノ宗派ト云コトヲ知ラズ、疑ラクハ是台宗ノ徒ナルカ、何レノ年本土ニ來テ深山ニ居ケン、凡延寶ノ頃山中ノ民始テ見タリ。鉈一柄ヲ携ヘ常ニ佛像ヲ造リ、則其地ニ收メ捨ヌ。仍テ空ガ來由ヲ尋問フニ敢テ答ヘズ。我山岳ニ居テ多年佛像ヲ作リ、其地神ヲ供養スト、餘事ヲ云ハズ。尤衣食求ルコトナシ。適食物ヲ與フル人アリト云ヘドモ煮テ食フ物ハ請ズ、生ニテ食フ可ヲバ請ル也。（中略）空が書畫有、各花押、是也。貞享ノ末或山寺ノ僧ニ空語ツテ云ク、今世ノ氣運ヲ見ルニ當城（高山）既ニ廢スルノ時近シ、不祥ノ地ニ居ルベカラズト云リ。則此國ヲ去ルト見エテ是ヨリ後見タル人ナシト也。高山ノ城ハ元祿ノ始滅却ニ及ベリ。又東奥南部或ハ蝦夷ノ地ニ僧圓空作ト云モノ多シ

倭漢三才圖會卷六陸奥南部燒山不時有燒故名之開基慈覺大師作千体地藏長五尺許其他小佛前人取去今僅存近頃有僧圓空者修補千体云

此餘空が事近世畸人傳にも出。此他空が作といへる佛像所々にあるなり。

十四日南岸まゝ神所（カモイコタン）に出、マックツナイの瀧の下に宿す。夜寒不レ寐。

十五日タイケシに至るに鹿の足骨を煮、七八本づゝ銘々盆に盛て出す。是を喰を見るに其骨を破り、中より一條の肉を取て食、其味至て甘美也。余も是を乞て喰。其骨は多分干貯て來客の爲に備ふとぞ。夜タツコフ

に宿す。盂蘭盆なれば土人等の墓所まで飯を炊かし供へ聊心斗の供養をしたり。

　草深き墓祭するえみしらを見る我さへに袖ぞ露けき

十六日掉二小舟一アノロ（川下）ユウニ（同）ウエンヘツ（同）三ケ所を一見し、歸りてけふは大齋日の事なれば持越しの樽を開き、山中の勞を慰さめつ。

　天なるやうすめの神の神わざを蝦夷の千鳥にたれつたへけん

十七日發（先達ての山道）ヤムワツカ平（マヲイ沼の上）に戻り宿す。五ツ時過にもあるべし。東山より出る月ヲサツマヲイの沼に照わたりて、其眺望譬ん方なし。曉近くなれば蘆原に露置わたして實に目覺しくぞ覺へける。

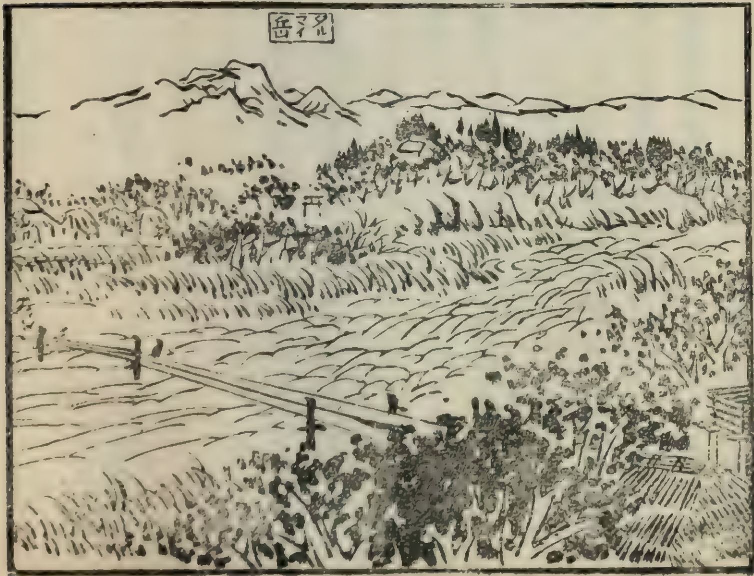
　出るよりやがてかたぶく月影の移り行世のならひをぞ思ふ

十八日舟にて二人をば千歲に遣し、余はまた二人を連て陸通り（沼東）を行に虫多く鳴ければ、

　分侘るしげみが中の虫の聲我身ひとつになくかとぞきく

此邊南向にて暖地にし畑に宜敷見えけるが、堀て見るに眞土一二寸斗にて底は皆燋沙なり。是往昔噴火燒の時に降積しと言傳ふ。（十七八丁）ユーナイ（淸水）近年まで溫泉にて土人等皆浴治せし由言傳ふ。其水甚明かなり。恐らくは金玉の氣にて涌出るか、少し溫也。此邊皆槲柏原也。過てケネブチ（小川谷地）芦原を押分〳〵（二三丁）行。ウリウカ（川巾五六間）越て雜木原キユウシ（小川）過てまた葭沼芦荻鬱叢せり

（五六丁）過てタンネエンルン（岬）沼に差出惣て此邊平地にて地味肥沃（一り半ヨ）過てアンカリト（沼周一り半ヨ）此邊山芍藥、鹿藥（ユキサヽソウ）、黄精（ナルコユリ）、委（エミ）燧（クサ）、御前橋等多し、越て
シユクハイ（川巾六七間）底は小石藻生て水清冷小魚多く兩岸に繝絲花（シンケフ）（シモツケ）多く咲亂れて水に映じたり。此所昔は（寛政比）石狩の土人多く住たりとぞ。今も爰にて產れし者石狩に多し（往昔境目也）。越て赤楊原漸々爰にて道形を見始たり（一里半ヨ）過て支骨の川端に出。（一りヨ）マヽツブト（川巾五六間、シコツ支流、源はタルマイ越にて見る）過て（十七八丁、今日道凡七里程）
千歲會所（シコツと云しを其呼聲不宜とて文化二丑年鎭將羽太君此地に鶴多きをもて千歲川と改めらる。休明光記）に着す。藏々建物多し。前に川



有（市廿間斗、源シコツ湖）板橋を架、其邊り丸木舟を多く繋、是皆石狩通ひの舟也。（下り二日、上り三日）土人小屋（十五軒）兩岸に在。其建方他に異り、麻殼もて五六段に葺り。畑物よく出來たり。（從石狩舟路廿八里、ユウフツより陸路七里）此所文化度迄は纔の漁場なりしが、山田屋某ユウブツへ新道を造り、爰の荷物は馬牛車にてヒホユカリ（陸路二り）迄運び、其より船にて濱に下る樣にし、また今度石狩へも樋平越新道開け、東西の新道出來、漁時には頗る繁華の地となりし也。前に辨天祀有、石階卅余級を上り、左に八大龍王、右に圓空鉈作の像を安置したり。今日は盂蘭盆の御神酒上げなりとて森田や覺造數多の行器（ケマコルシン）に醸（トノ）赤飯等を盛て持來り、寶前にて土人に與ふ。其座に余も班りし故一卷の雜文を作り、羽織の袖

千歳川番屋の圖

に足跨込、是を袴に準（ナゾラヘ）て一刀を帯し何がな腰懸と思ひ當りしは文化度兀老尹（コローイン）亂の時、使節リコルトゝと鎭將高橋（越前守）君應接の座に白鳥（新十郎箱館町年寄役）某が頓智にて冊錄の代りに行器を用ひしかば、魯人其蒔繪の奇羅美やかなるに感じたりと聞ける故、余も傍に在る行器に腰懸、高らかに

獨說蝦夷無量利經　五十瀬　多氣志郎奉狂譯

如ㇾ此我聞一時大君在二瑞穗國茌士城一命二諸有司一曰蝦夷國周回七千五百里皆俱諸島如二𡅏哈嗹、惠吐魯怖、喏鞴嘿哩、遠久悉里、嗚嗚嘿哩、禮文悉里、嘿咕嘽一等　亦皆不ㇾ滅二千數里一今茲欲ㇾ開二拓是等國土一宜遣二大吏一鎭之ㇾ是諸有司等實膺二其選一余亦應ㇾ募往撿二國境一爾時我起二一大願力一振二廣長舌一發二大音聲一代二

諸大官吏等略說无上甚深微妙最勝精通造化之眞理汝等宜諦聽四大洲中百千萬億一切衆生有智有愚有明有闇有柔有剛者於其中曰是斯世界衆生者、直實惇朴自是義皇上世之民凡官吏欲開斯土度斯民者無用忘誕無挾僞詐以眞心至情普施慈悲令得潤皇化爲第一義

復次實撿其地理宜拓荒耘廢授播穀種栄養蠶之法以備兇荒宜令其種民無饑無凍

復次山岳河海其中所有金銀瑠璃瑪瑙琿璖黒珠琅玕禽獸蟲魚蝦介草樹森羅萬象有性無性恒河沙數百千萬億一切諸物皆宜探之令此世界衆生得圓滿善利大富豐饒

復次所住此國土如奸吏奸商番人等非人者宜急放逐還清潔廉直之大吏及諸有司令正賞罰重典刑

復次所在部落宜算計年々生死繁息善男子善女人令之講習武枝警戒不虞今余所付囑无上甚深微妙最勝之眞理自合天地造化生々之道所謂神儒佛三敎亦滋在其中汝等宜信受奉行者即時破天荒講遺利解脫窮乏困厄之苦得即成安樂國土

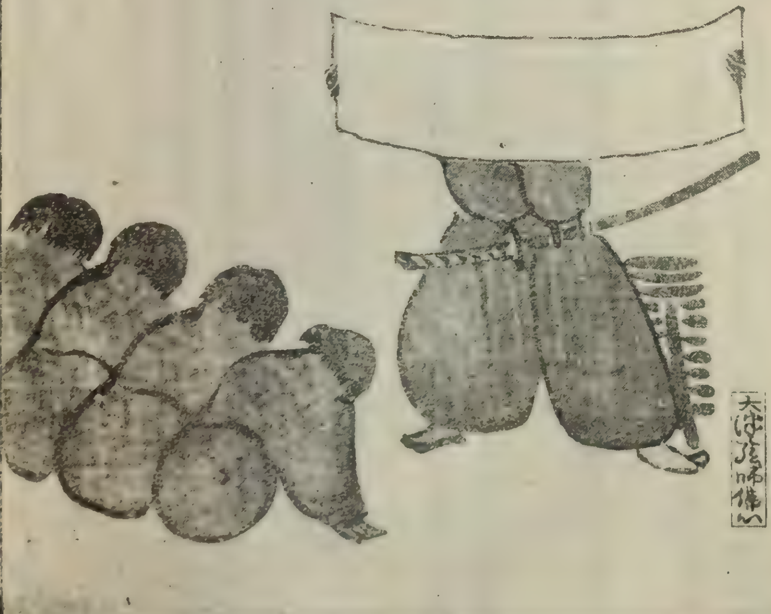
爾時斯國土一切衆生阿-爲-奴-羅-女-能-姑-羅-世-迦-智-羅-迦-奈-智-羅-等皆倶發一大音聲歡喜恭敬禮拜

宜乃出眞寶言其言曰

唵(梵音歸命義)保-魯-儞(引、夷言廣大義)伊-邊-哆-耶(引、夷言喰義)保-魯-儞(引　夷言廣大義)伊-久-吒-耶(引、夷言飲義)宇-噌-無-計-悉(引、夷言函館義)唵-嘛-薬-薩(引、夷言鎮台義)唵-迦-計-諦(引、

[illegible]

二世
柳亭種彦



夷言憐愍義）婆-毗-乃（夷言眞實）耶 阿-羅-爲-計（引、夷言喜悅義）婆-囉-訶（引、梵音成就義）

獨說蝦夷無量利經

南無蝦夷物關中大小神祇愛愍護念と手をもみ摺恭々敬拜し畢て傍の柱に

たはぶれに我よみあぐる染紙も心してみよ心ある人

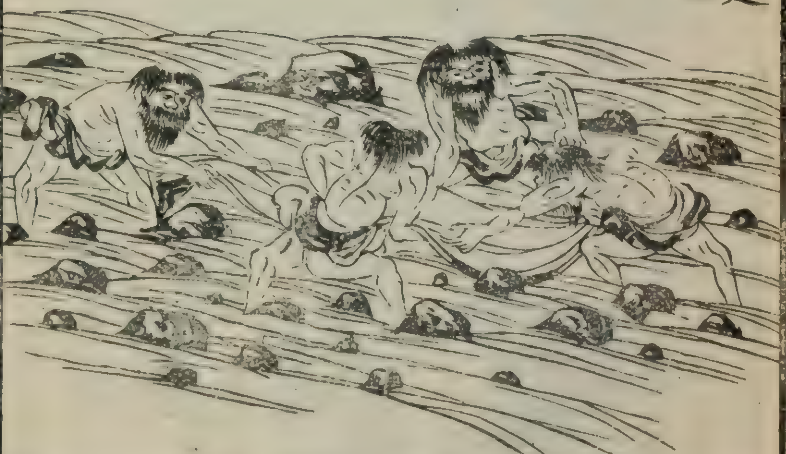
と誌るしをへて明日湖への敎導者をかたらひ（ソネイシテ、ハレタクテ、フタスケ）あらかじめ事ども託し、此邊の風俗を聞に、昔は松前の藩士纔に一村二村と分ちて領したりしを（ムイサリ佐藤周右エ門、アツイシ工藤淸左エ門、ヲサツ小平甚左エ門、ヲセツコ熱屋新下、イサリ今井新左エ門、チイカリ岡口彦兵衞、タルマイ遠藤豐太郎、マス前田藤九郎、トマヽツ松前鐵五郎、ホタンチイ柿崎四郎右エ門、上マヽツ小林嘉門、）其法は藩士の給りし地を藩士又町人に任せ置く、是を請負人と云て一年の運上金何兩鮭（何尺）荒卷鮭（何尺）雪腹（何枚）乾鱈（何把）鹽鱒（何樽）管菰（何枚）鹽鯡（何樽）身欠鯡（何束）炭（何俵）薪（何數）黑大豆（何升）小豆（何升）と惣て其地の產物を年中の入用程收納す。是を指荷物と分て請負人支配しけるが、後には其納物何代何程と云代料積りに成り、是にて仕切、藩士は聊かも關係する事なく請負人に託し置しが、寛政度上地になり、其後復領に成りし時には皆領主にて一手になし置れし也、惣て前の仕法は令の法にして延喜式內膳司大膳職等の法に異なる事なく、頗る古風なる事どもなりし也。

十九日早天馬にて出立。此地の馬は沓を着ずして其馴易き事實に土人の質朴に馴ると見えて、陰森たる木の

間を乘行に自由になる事恰も曲馬の馬の如し。少過てヒルシハツタリ（大淵）トヘロマイ（洲）坂を越てランコウシ（北岸）に至る。人家有（ヌカルユウク、シタクムエサン、イヘニセ）乙名ヌカルユウクは子供十人あるを一同に幷せて余に見せつ。過てカマバ（平地）ベサ（左川）人家五軒（モンコラシ、イタクトキ、コヌカ、カンナウク、キテサン）爰にて余が爲斑枝根、天南星を取來り燒、是は土人の芋なりと云て出すに頗る美味也。たゞし是を和人は毒なりとて喰ざる由を語るに、心の堅き所だに喰ねば少しも毒はなしと敎へし故余七八ツを晝食にせしに何の障りもなかりし也。有毒草木圖説中に收あるは恐らくは心に毒有る事と迄は未だ撿窮せざりし也。毒は心のみとだにしらば頗る救荒にも成べき物なり。此邊また車百合多し。又此上にチヤシコツ（城跡）と云もの有　是支骨の惣大將の舘なりしとて、慶安元年（戊子）免那師與之吉津久留大戰と見えしものか下りてフルケシ（左川）ナイフツ（右川）マス（右川）ウリルメム（右川）ヌツタ（右）ユツコツブト（右川）等教導に任せ行。谷間追々狹まりて樹木も頗る陰森たり。ルウエン（陵坂）人家三軒（イトエウク、エハシテヌ、シルイ）路傍に蓬蘽、懸鉤子の熟したるあり、時しも鹿一疋、麕を連來りておのが角にて木を搖落し、その麕に實を拾はしむ。まのあたり溪を隔て是を見るに頗興あり。過てマツクシリ（右川）ヲロツコチ（右川）人家四軒（イムツイレ、ヲヤハンショ、モコロミナ、ウヒシラル）過てシネシヤ（平地）シトクンネベ（左川）惣て此邊穴居跡多し。又この邊の山は皆畑の畔の形に成たり。土人に問ふに昔神の作り給ひし畑なりといふ。今も此所を堀るに土器の欠たる物多く出るとぞ。過てヲフイチヤシ

土人の吐伐(イツガハ)魚を捕るは楡皮衣(アツシ)を川の瀬
に張り肩にかけて數襟の衣を
張上在て筆水に逆て流れ来る節
あは両袖にかけ魚を背より覆ふにて獲(ツカム)
ありまたこうの怪も小石を縁(ヒレ)に魚は
を捕方埼ツカ咸川の鰍(ゴリ)押(ヲシ)と同様にて
瀬を逆登を夜分にも上より追て捕る事ある
若しも鶏を投じ出るものを捕る事
轉化して又奇なり

栗山古人圖



一（急瀨）ヌンナイ（右方）人家（ケムヲキ、サムシユマ）有。ウツカヽ（急流）此所巾三十余間に成て土鰡《ウツカコル》魚多しといふ。ウツカは瀨、コルは居る也。此魚夷語にてはコタンコルと言、其義人家有る所に必ず居る義也。又シリヘツにてはイソカバと云、岩石に潜居るとの義、トシヘツにてはチマカンチ（シユマカンチか）是も同じ義也。石狩にては七八寸より尺位の物を見たり。是則漢名土魰魚また杜父魚（綱目）石伏魚（八閩通志）にて惣躰は大同小異の物か（とんほ筑、哥うたひ江、ヲコセ伏見、クチナハトンコ豫　たんき坊京、イシエテヽ京、イシフシ和名鈔、コル嵯峨、ムコ湖、チヽカフリ和名鈔）土人等アツシを脱ぎ川中に濆ろげ、暫時に數百尾を得たり。其中にチヽラカイとて形ち鰌魚《ドシヤウ》の如き物有、按に是タホトシヨウ（京都右くらひ）と言物なり。魚でんにし喰しに頗る味よき物也。過てヘウケカマ（左川）シヨウキ（右川）坂をこえヲサクマナイ（從チトセ五り半）峨々たる山の腰にて榧樹根を露し枝を垂、人家五軒（サエヌカル、シユアシ、キサフホロ、モンシノツ、シネイシヲ）家居す。具し來るシネイシテが家に宿す。惣て此邊の家々種々のシユトを懸たり（ケフヲイシユト、アカンシユト、ラヽカシユト、シユアーシユト）それが中にもアカンシユトは形ち算粒を并せたる如し。是第一嚴罪の者を打よし也。何れも堅木にて作り有。ことに古きは猫頭刺《トノツヽ》を用ひたり。仍てヒヽラキを夷言シユトニと云由、シユトに作る木なればしか号し也。內地のヒラキの語もヒラヒラキの略か。ヒラヒラと刺す故に号け始めしか。抑此木を以て人を打棒を作る事は大古よりの故事と思はる。古事記に杜谷樹《ヒユラキノ》、八尋鉾《ヤヒロホコ》と云有、又加茂祭の時撿非違使の下部が持も杜谷樹の八尋鉾（文安加茂祭の圖）な

禾眉生寫

り。必シユトの事は古風の遺れるものと思ふ也。

廿日微雨午後霽棹ニ小舟ニ上る、貳百余間にしてモペツプト（此所人家跡有）に至る。是より上は瀧多くして上り難し。兩岸頗る嶮にして惣て巖石鬼面の如く奇を盡せり。

　むさゝびの落來るかたを見わたせば峰に廿日の月ぞのぼれる

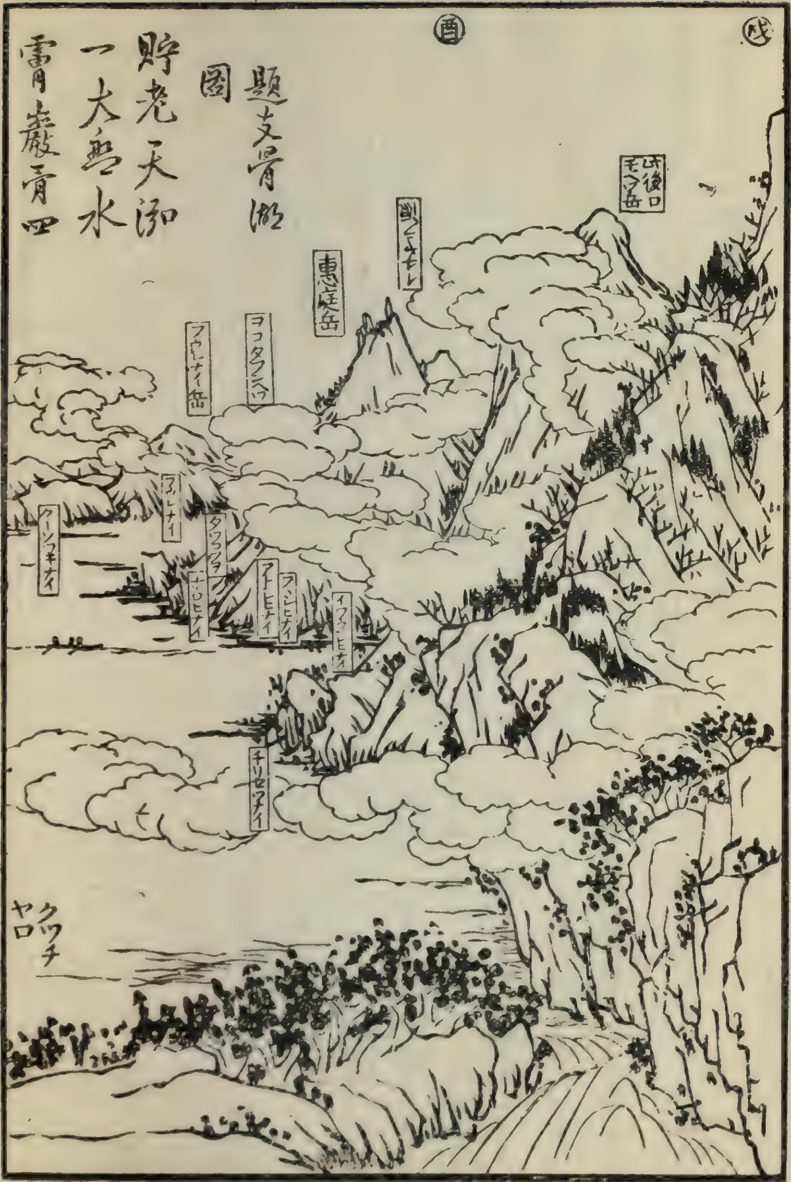
兩岸小字多く山間屈曲して其源エニワ支骨(シコツ)の兩岳の間に入る也。

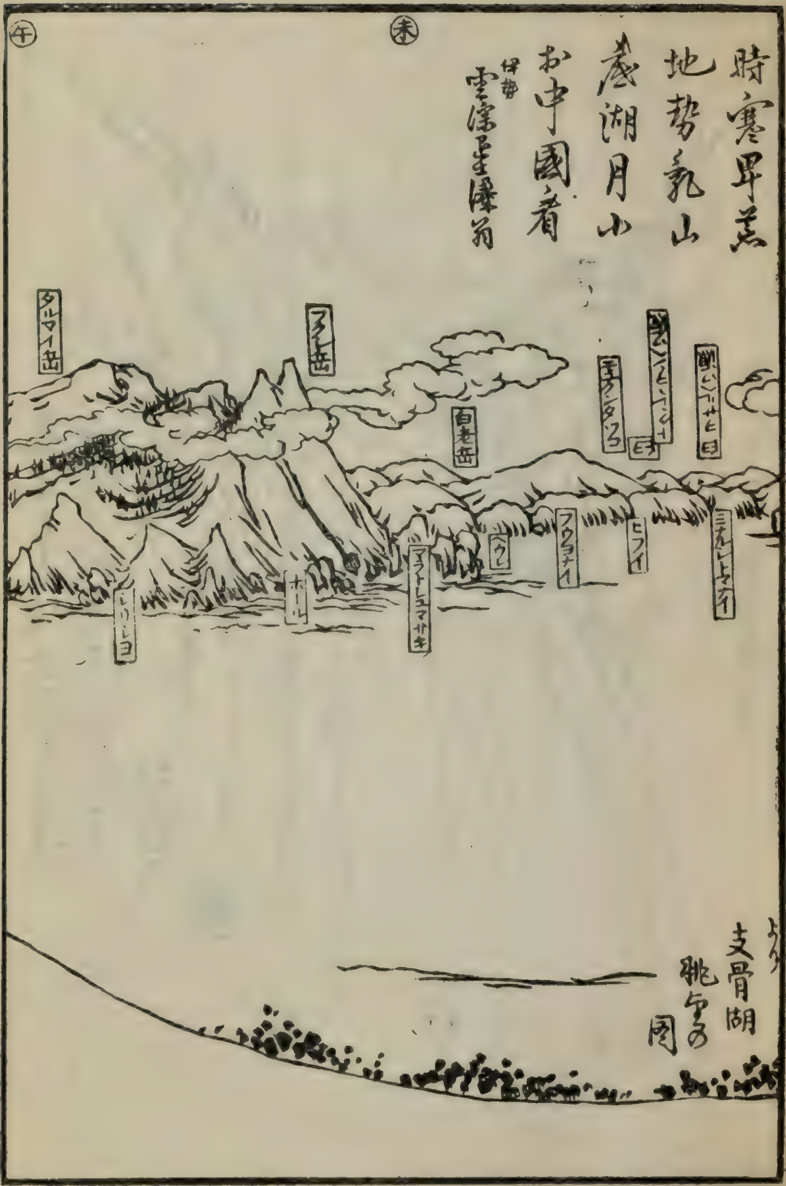
廿一日宿霧封ニ四山ニ唯水聲を聞のみ也。是より岩角樹根を攀て上る（七八丁）雜樹陰森熊鹿の跡を認て行。其崕の下イチヤ（大磐）ニナルブト（右瀧）チエツホムイ（淺瀬）トナシユツカ（右瀧）ヤンノシケペレケ（大岩）コロマシユマ（大岩）クツレケイ（立岩）エカイネウシ（立岩）ニチヲイ（岩）ツウコタン（平）ヲヤヲシナイ（左瀧）等の名あれど、山上を行故に見る事を得ず。漸々爰にて本川を見るに如何にも急流にして川中大轉太石簇々たり。過てヌタペトク（岬）イヒヽタラ（岩）ウコフシネ（怪岩）ユブリボク（大岩）トシリブト（右瀧）フシコニウ（大瀧）チエセシケイ（大岩）ヒラボ（絶壁）ウヘツタアンナイ（右瀧）此所兩岸瀑布有、對ひて落る也。數十仞の崖の上より奥を望むに、綠樹兩岸より垂たる中にカマソウ(龍瀧)（巾十余間、高七八間）と云有。瀧壺は兩方より差出たる間に落る故其音山谷に響き雷の鳴如くにて（甲州の方言ニモ瀧壺ヲ雷ト云。阿州美馬郡幅山ニ土雷鳴瀧等云有）坤(チ)軸も碎け、山岳も搖動するかと怪まる。其岩間よりは白浪怒立し、水烟は邊を暗ます。鮭は是より上に登らざる由也。

しこつ山瀧つ岩ねに蝦夷らが作るゑなほをかくるしら波

かく戯れて、是より断巌の上なる荊棘を分け倒木を潜り、腐木を跨ぎ等してウヌンコイ（小瀧）ルッンケイ（大石）を過てホラキソウ（高二丈斗、巾五六間）に到る。此所も全形を見ずして過、樹根を掘り岻を下り、上の方を仰ぎ見るにホロソウ（高五丈斗、巾二丈余）二口になりて落。是當川第一の瀧也、故に大瀧の名有。鱒鯇は此所迄上る由也、又岻に上り樹根岩角等を足場に二百間餘りの間一歩を過たば数双の谷間に落べき険を過て行。ネッソウ（巾貳間余、高七八丈）其水七八條に成て磊々たる岩角より刎落る。其勢實に奇觀也。爰より下を望めば百余間の所岩立水怒り、逆浪恰も精水を流すが如く、其様比するに物なし。是シコッ沼の銚子口也、上は碧水漾々とし深く魚龍をも潜ましむ。勢二百間斗を過、トウヤに出る、沼（南北六り東西四り）周廻凡十五六里（惣て）峰樹重々とし寄木を組て筏を作らせ、是にてベッハラ（川口）を渡り、北岸まま（七八丁）チリセッナイ（小川）并てイッウシヒナイ（小川）上はモベッ岳（高山）後ろイチヤラ岳（高山）頭を露す。過てフブシヒナイ（小川）アトシヒナイ（小川）ホロヒナイ（小川）タッコフラ（崖下）ヲコタヌシヘッ（小川、湖中第一の川也）此上繪庭（岩山）に當る嶺は百余年前燃出たりとて燋石簇々と立并び遠望すれば佛菩薩の肩を摩したる如く犖确危傾し離飛墜が如し。此下を廻らんとするに西風吹起りしが故に爰に宿す。此邊の魚は平日人を知らざる故人音すれば却て岸に寄り來れり。

里遠きしこつの湖に筏より棹さしゆけば魚のより來る


酉
戌
恵庭岳
アトヒナイ
クワチ
ヤロ


支骨湖
眺望の図
タルマイ岳
白老岳
ヒフイ

勇武滝圖
陸奥 耕山寫
楓江釣人

廿一日西風颯々とし湖邊廻り難き故に爰にて南西の方を眺望して其地形を記す。是より西の方并てクウソキヲナイ（小川）此上は臼のヲサルヘツの源に當る。岬を越（凡一り）ミナルシトマナイ（小川）上にフウレ岳（平山）と云有（十七八丁）ヒフイ（小川）湖の岬に當り并て（十丁）フウヨナイ（小川）此源モユクンタツコフ（高山）白老岳（高山）の間より來る。又（十七八丁）ペウレ（小川）并て（七八丁）マラトシユマサキ（小岬）廻り（十七八丁）ホール（小川）此邊赤兀崖也（十七八丁）シリシヨ（小川）等の上にフクシ岳（兀山、湖の南當る）に當るイチツフナイ（小川）上は垂舞岳に當る。是より東岸ヘンケモラプ（小川）ハンケモラフ（小川）過て東西皆小石原にて小流多けれ共無名也とぞ。惣て筆記して夜をペツチヤラに戻し、直に垂舞に出んと思ひしが、此行はチトセよりヲサクマナイへ出、其より垂舞東通り濱への新道見したゝめん爲なれば先ヲサクマナイへ歸りぬ。

廿三日快霽。又一昨日の九折を上り、猛獸の跡を認、木立に入（廿余丁）マ、ツイトマ（小川）の谷間を（一り余）上り、山を越て根原有、親木は數圍の老木なるか其下に五六尺斗の物隙なく生ひし中を針盤を手にし巽を指行に手の中皆血に染み、衣服はずた／＼に裂たる故に是よりアツシを被り行（一り余）ユウフイトマ（川巾四五間）と云を過、山一ツ越てユウフソウ（巾三間余、高しれず）其銚子口より望むに流は見とめ難し。只陰森たる木立の中に落るかと思はる。又山を越てホンユウブ（川巾貳間位）等皆ユウフツの源也（從ヲサクマナイ、凡四り）爰にて晝飯す。此所よりヲホウと云迄は水なきと聞けば也。此邊二葉の松を見る。

此地に松のあるは爰のみ也。惣て此邊燋砂也。マコマイイトコ（小川）此邊姫石楠花、岩龍膽、萬年杉其餘種々の異草を見る。過てニシタフ源と云沼（周十丁ヨ）爰にて水を呑たく思へども泥深くして入難し。沼の中に水鳥多し、然るに此邊の鳥は人を見ざる故人近づけども恐るゝ事なし。又過て赤楊の三四尺より七八尺斗なる中を分け行に甚歩行惡し。此邊惣て七八丁隔て川原有、雨天には岳より水落來る由也。平日は一滴も水なし。行々岳を見るに其形時々異る也。凡八ツ半過雜木原に出る（岳東）ホンヲボウ（小川）ヲホウ（中川）始て水を見十分に呑て始て水の貴き事を知たり。（此川岳の西より落）夕方濱へ出。明神の拜殿に宿し、先一同の平安を祝し、一首を寶前の柱に記し置。たゞし山中にて破れ裂たる單物をヌサシヤンに結附たり。

　雨に雪に氷に碎く心をもあはれびたまへ垂舞の神

廿四日白老會所に着。福山藩石川某、仙臺藩三好某に逢。かゝる海外にて此舊識に會こともも偏に此地の開けししるしかとぞおぼゆる。

夕張日誌

夕張日誌跋

もろこし北蝦夷之地ほとりは日のいはゆる北國にして
めぐりて志らぬ世界のさまの跡をすべてはかりしるしに
とゞめ此國の中川路行程しるしは委に津分力の鳴く
を為して在職りし志をもしは草を踏み深き谷
なむかはき川の中里武がなあはせしといまなき庵と
やまとらしいふちのならひもいとはるかの國あつら海山を

さと里國なかりをとかめ祈りもやうらかなりひは
かなしくにおくかしひくりありさら〔?〕かれはたちそら
わさしたり是はいちしき相月中なりさあらし那ともへでは
いちしかふ流し柳ハ多く張日様ハもの年ちかし
嶋川ちひり清し游し昔滿らしとも
はしとり

星河　春村

松井西埜書

東西蝦夷山川
地理取調記行

後方羊蹄日誌

多氣志樓蔵板

凡例

知別は西蝦夷礒谷の縣に有て川上は岩內、蛇田、臼三ヶ場所入交の獵場なり。其地を後方羊蹄と稱し、其譯は廣大無邊、高く限り無を言り。土人是を雌岳と云、并て雄岳と云有。然れども川口は礒谷に在が故、余（丁巳）の春礒谷より舟して逆る、終に意を達せず。知別誌一卷を著し、岩內より宗都計に至り、又志を空しくして歸り、宗都計誌一卷を記し、纔其邊のみを審にす。其秋アブタより湖を越、シリヘツの西岸に出其源を窮め、路參に下り、木刳舟を作り、流に順て斷巖絕壁磊々たる急流、千辛万苦して下り、漸然として志を報じ、報志利別志三卷を著、實に其嶮天下無匹と云べし。宜哉、寛政御用地の時近藤、最上、間宮の三壯士も此川筋を窮め得ざりしをや。然るに戊午の春蒙函館府の
命知別川筋より石狩領ユウブツ越新道樋平へ山道開發の得失を實撿のため、積雪堅氷の上蛇田より山に入、後方羊蹄に登り、路參より東岸に越、氣毛別に添て峠に到り、察縨に下り、樋平に出て、石狩に到り、記行三卷を書、併せ開路の可否と一枚の地圖を府庫に納む。今其記八卷を合せ、要を摘て一卷とし、大概を同癖の士に示さんと欲するの微意なり。猶其密を閱玉はんと欲するの人は、原稿八册を讀玉へ。風土人情產物開墾の可否惣て百見も一閱にしかざらん。

安政六己未暮春於江戸牛込杉並の五爪龍窟源の弘しるす。

戊午 後方羊蹄日誌

伊勢　松浦竹四郎　著

安政五（戊午）年正月十一日箱館府に於て東部虻田より石狩領樋平へ山道御切開方の得失實撿を命ぜられ、即日土人遣方旅中一刀其餘の數件を伺ふに、惣て伺の通たる可由命有。三田某（喜六）君も臼場所ヲサルペツ迄同道致し、余が去秋中立置候杜樹材伐出し方等相談致すべきよしとの事に就て支度次第出立と定め、聊一律を賦して同志に示しけるに

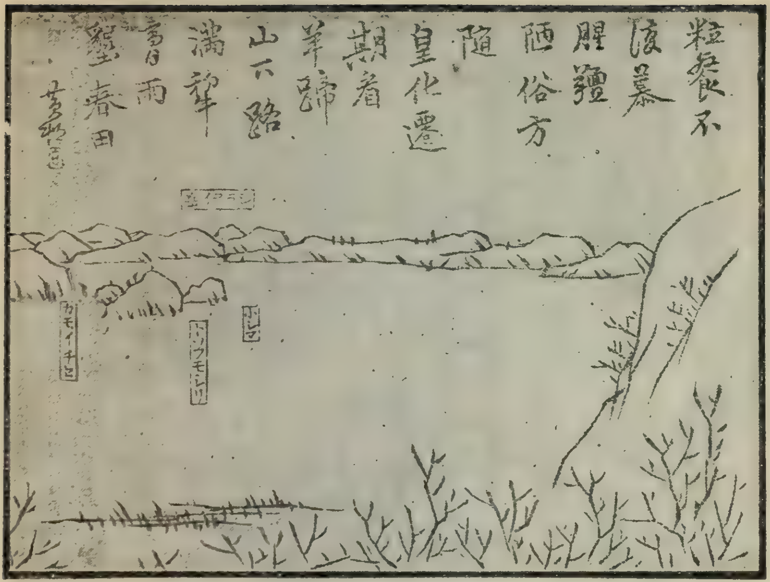
一劔應召募、裹糧出寒關、險河皆泝涉、大岳儘躋攀、筆不洩奇絶、身無論苦艱、我何輕性命、此役更於山、

十八日（正月）早發、積雪埋レ屋溪水すべて凍合し路頭砥の如し。馬蹄未レ通行路の辛酸言の及ぶ所にあらず。大野鶯の木等過廿日の夕山越内に着す。此邊の人家一宿の旅人何れも家に滿ぬ。是皆夷地出稼に入る者也。其旅人半は江指より厚澤部に入、エナヲ峠を越て落部村へ出來る者どもなり。

廿一日鷄鳴より關柵の前旅人群をなせり、何れも此處にて切手を改む。正月中より二月中比迄は一日の人別一万に滿る事有と、其繁榮しるべき也。刀風刺レ面凛然たる寒威偏に風土の異るを覺ふ。ユウラップ川其餘の川々惣て堅氷の上を往來す。又淺磯は壹貳丁ヅヽ氷りたり。友人草堀子の俳句に、半分は氷に減るや寄る浪、と此地の風土を吐れしも宜なる哉。夕方ヲシヤマンへに着す。其海濱を顧れば一條の蟻道の如く黑くし

て人行絶間なし。實に目覺敷ぞおぼゆ。
廿二日發到ニ靜苅ニ各橇を着、山に懸る。九折する處皆樹梢を踏て登る也。然れ共谷埋れ、峽も平に成が故、上り下りも常より少し。曲れる路も直くに成、實に雪に隣の近き山里の詠等思ひ出して行けるに、如何にも着馴れぬ橇に脚を蹴合せ、歩行遲なわり、餘程夜に入て禮文木の會所に着しぬ。濤聲鏜鞳として夜不寐。
廿三日雇レ舟て虻田に到り、翌日湖を一見し、臼會所に着す。
廿五日雇ニ土人十二名ニ三田君と同にヲサルベツに行、街道より入ること凡貳里にして瀧川へ廻る。其瀑布凍合し氷箏を垂る事玉簾を懸るが如し。其裏に一條の飛泉ある事氷箏に透徹し、日光に對映し、其水影上るが如く、恰も龍蛇かと怪まれ、又是を浮屠氏に見する時は、不動影向の瀧とも号べけん。水の凍合して少きも亦平日の觀と異にして奇也。是よりヌフカウシと云野原（一里余）を過夕方タッコブ（ヲサルベツ川岸）に到り、山陰に宿し、土人に酒を與へ、夜中燒火し樂けるが、サメモンなる者蝦夷浄瑠理を謡ふに、一同皷服して離す。其興窮なく、氷雪の上聊か寒威を覺へずして曉に至る。
廿六日氷雪の上（十七八丁）ヌッポコマナイ（三四丁）レリコマナイ邊に到る、惣て杜樹也。大なる物は一丈七八尺より貳丈に及べる物幾千萬本なる事を知らず。夕方臼に歸り宿。
廿七日時々吹雪、三田君諸蘭に到る。余は虻田に來り石狩越案内の者を定め、臼より貳人（コロク、イタシハコロ）虻田より四人（トネンハク、シヤウロク、エナヲテキ、トヘヲク）を雇ふ。各米酒烟草糟鼻渾手拭

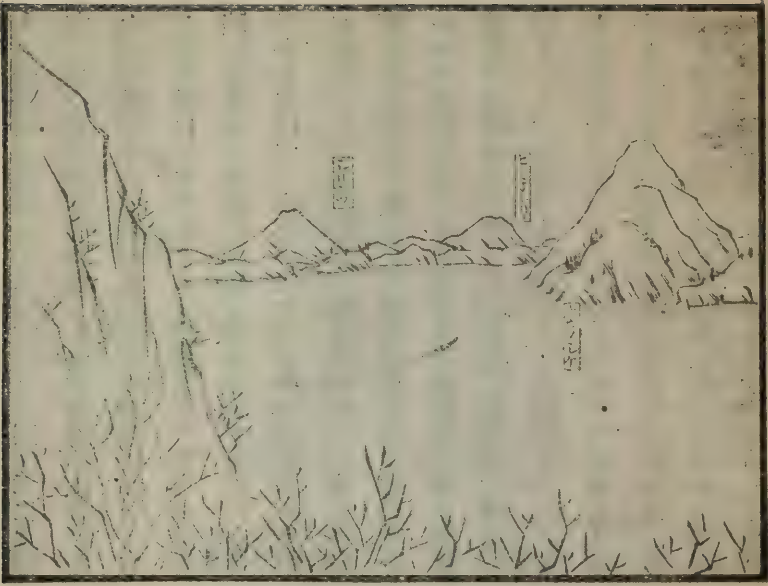
南
天狗岳
湖
磯谷
岩内
北



等を與へ、山中の規定を申渡し、木幣を作り山海の神を祭るに、一同の者如何にも其行先の事を案じける樣なりければ、一首を口吟ける。

何もかも皆開けゆく御代なるになどわけなやむ事ぞ有べき

二月朔日快晴、氷雪砥のごとし。（廿五六町）トウフルカ(湖坂)に到り歸後此峠に華表(トリイ)を建ん事を土人へ談ず。此所右は臼か岳　左りはヘロキウハシ岳両肩を聳ゆ。臼嶽の烟は雪中には一入多き由、如何にもと思はる。下る事しばし（十余丁）、一同に席を尻に藉、是にて辷り下る也。須臾に湖傍(トウヤ)に到る。其危き事、少し曲れば木立の谷底に轉び落る也。依て余は土人の跡を認て下ぬ。此處をチホヤウシ(舟揚場)（是湖の西岸也）と云り。是向岸に渡る舟を備置所なるよりして号と也。



湖沼《トウ》の周拾三里余にて、水は臼のソウヘツに落てヲサルヘツに達す。湖中四ツの島岐有（トウノシケモシリ、トツフモシリ、カモイチセモシリ、ホンモシリ）。余は巳の秋四島を廻りしが、其湖中《トノシア》島《モシリ》は形ち雷盆《スリバチ》を覆せしが如く、廻り五十余丁、頂上に一ツの清泉《シミツ》有て寒に氷らず、又暑にも渇れざると。土人是を神水《カモイワッカ》と号く。并て（南方）神堂《カモイチ》島《セモシハ》（廻り八丁）是に一ツの堂有て、寛文年間濃州竹か鼻の僧圓空《エンクウ》と云もの諸國の高山を廻り、毎に鉈壹挺を携て佛像を刻めり。後此國に渡り、太田山、シユマコマキ、礒谷《イソヤ》、ユウバリ、惠山《エサン》、垂舞《タレマイ》、山越内（諏訪社）等にて佛像を作り納め、後此島に年久數住居して種々の奇瑞を顯り、觀音の像を二躰作り、一体をレブンゲの窟《シユマチセ》に納め、一体を此島に安置し、老て後濃州に歸り、江州伊吹山に

入、平等岩と云窟にて入定せしと、其比世に今釋迦、また窟の和尙等尊稱したり。其佛像鉈作りなれ共、麁の中にまた非凡の工有て尊信の意をまさしむ。前にトッフモシリ（笹島）（迴り五丁）是へ一條の陸を續けり。又南に小島(ホンモシリ)（迴り三丁）是には蝮蛇(トツコカムイ／マムシ)多き由にて、土人等舟を着る事を禁ず。三田君は沼中島(トウノシケ)へ嚴島(イツクシマ)の神社を建ん事を謀て、多くの私費を以て建立し給ふに、如此勝景の地、ますく一區の名勝と成しも日出度事とぞ覺ゆ。島中雜樹陰森、異艸多く、別ても石龍膽(ハルリントウ)、蔓龍膽(ツルリントウ)、黄連、雪もやう、米蘭、金鷄脚(イワヲモダカ)、細辛、舞鶴艸其餘名もしれぬ物を出す。又小鳥多く其聲耳目に馴ざる物多し。また兎(イセホ)、貂(ホイヌ)、貉(モコク)、華錦鼠(トセクルク／シマネヅミ)多し。往昔鹿を放せし由なるが直に水を游て歸り來るとかや。湖中桃花魚(シュフン／ニコヒ)、牡父魚(イソカハ／カジカ)、泥蝦(ホーカテレケ／コエヒ)、蝲蛄蝦(アクンベクル／ザリガニ)、鮭菜(トノチエフ／シュッコ)多く、又鯇

に似て大さ舟の如き魚有と。昔し鹿を呑て腹を鹿の角にて破られ死して瀧の銚子口に横はりしと云話も有。其未だ小き五六尺の物は時々頭を上て游ぐ事あり、是鯇より一種別の物か。此魚シコツ沼（シコツ）マシウ（クスリ）と、當所の三ヶ所に有也。扨此湖水は何故やらん氷の張る事無、蝦夷の地何れの湖沼にても霜月より二月迄は氷上土人の往來と成れり。古老の話に、此湖が氷る時は土人も凍死し、魚鳥も凍餓し、魚の卵皆凍枯する故、翌年は魚無して饑饉也、と云しが、實にもと思はる。扨舟にて此度は島の北を廻るに、ネーシント（岩岬峨々）タツネシリ（小灣）ホロムイ（大灣）ヲペツカウシ（出岬）此前深き事五六十尋も有と言り。（并て）タンネシレト（岩岬）セタエトシユモイ（灣）レフンエンルン（岬）キウシエンルン

（岬）ヒイシユントウヤ（濱砂）此所迄北岸也。またチホヤウシ（ロトウヤ）と言、茅舍一軒有（去秋宿せし所也）。是より眺望する時は（并て）ホロヘツ（湖中第一川）ホロエンルン（岬）ケナシヒリカヘツ（源フルホクノホリ）トウフシナイ（小川）シンルシウシヘツ（小川）等東岸にあり。併てニセシリウシコツ（絶壁）チヒイカリウシ（小川）ソウヘツチヤロ（瀧の銚子口）等南岸なり。并てホンルカリ（小川）ウエンペツカ（平日は水無、雨日大瀧に成て落る、是臼岳の東面也）此邊臼岳の東岸にして赤壁斷崕樹木無、攀る時は崕崩て其危いわん方なし。頂は常に燃出其響百千の雷を轟が如し。湖水を隔て是を臨む、其風景筆帋の及ぶ所にあらず。後を仰ば後方羊蹄の嶺靑天に直立す。其形ち恰も富士の如し。須臾も其勝景に見とれて佇立たれば、土人彼岳に登る事よと指示せしかば、去秋爰にて宿し、夜雨に逢しが、其雨後方羊蹄の頂上にては雪にて有りし時、徒然に一絶を小屋の柱に、又及新寒八月秋、風餐露宿送悠々、羊蹄山下一宵雨、雌岳雄峰既白頭。如此記し置たるを思ひし其韻を用ひ、其傍に併せ記し置ぬ。

回首昨遊經一秋、雲山天半望悠々、今來擬補前遊缺、勇決明朝攀上頭、

二日曇天　上る事しばし（小屋のうしろより五六丁）ケツプネイ（湖水を眼下に見る所）ホンヌツプ（曠野）此所數里の平野にて雌岳（マチネシリ）、雄岳（ピンネシリ）、混保岳（コンボ）の麓まで見通し　其間より岩内岳、チセネシリ（家形岳）、與市岳等見たり。後を顧れば湖中の島岐銀盤中の盆山の如く、是より眞一文字に野とも山とも澤をも論せず行てホロヌツプ（曠野）ヌツケヘツ（アフタ領、ヘンヘの北の川源也）ユウトエンカ（原）ルソチ（雜樹立）等過て、ソ

リヲイ（雄岳の麓）に到る。此道すじ風嚴して雪を吹卷事飇の如くなりしが、余が工風にて頭巾の眉庇に狐の尾を結附置しかば是にて雪を受し故さして難儀をも見ざりし也。さて爰に日根知里社の地を見立、木幣を立て印とし（去秋來る時チボヤウシより此處迄凡六里と思ひしに、今日は道無處を直に澤とも川とも言はで來りし故、三里半位にて來りしなり）。是より又西北の方雌岳（則後方羊蹄也）の麓に到り宿す（凡三里。）
扨其登岳の事は一章の拙文の有しを爰に記し、閲者の勞を省簡す。

知別岳者、其高、甲蝦夷、形似富嶽、故稱蝦夷富士、以其在知別河上故名、土人喚之雌岳、雄岳在其傍、高不及雌岳之半、此書記所謂後方羊蹄者也、蓋齋明之朝置政所之舊趾、知別即後方羊蹄轉音也、土人嘗告余以山神之靈、故余有意于置其祠于兩嶽下而未果、今茲

> 鷟津宣曰齋明帝之朝阿陪臣率船師一百八十艘航蝦夷道郡領而歸雖不記兵卒之數意亦不下數千百人今子重以劍爲僕從以跟爲輿馬單身深入遂窮阿陪臣未到之地豈所謂一身運膽

二月二日、將赴石狩膝沼傍、出于雄岳下、（地名軋老）乃相置祠之地、表木幣而去、
三日宿樅原、此地登雌岳既二分許、煮雪作粥、殺貂爲炙、立木幣而拜岳、山中巨樹凍裂如地震、終宵不寐（樅和名毛美、漢名鳳尾松）
四日天未白、著鐵楇而攀、登四分日漸出、九折而進、刀風刺面、然汗流浹背愈知險難、天色已晴、惠山、駒岳、臼、繪鞆、白老、皆在襟帶之間、登六分、無樹、登八分、險愈甚步愈艱、午後漸達山巓、巓如富岳巓而凹、周廻一里半許、多日熊蟄凹中、土人待春而獲之云、余時促歸故不能獲一

雌岳

岩内岳
コンホ岳
ヲツケヘツ
ケツフチイより眺望の図

頭、顧從行者如有恨色、四顧則混保、在西、岩內、興市、古平岳、在北、支骨、察縨、垂舞、岳在東南、而松前、江指、函館之諸山、出沒於雲烟之際、寒威透骨不可久留、籍簑帽蹲踞而下日暮達昨宿處、

五日取路於摩渴利別源、又相後方羊蹄之祠地、日暮抵路參、蓋知別西岾也、抵栅多、宿漁舍、蓋去秋所過之地也、

者哉
東闌評多烝志樓於遡・鷄源可謂嚻心焉耳矣而此行也臨峰嶸不測之深纚絫相引劢有如超縣度之險者古跋曰三朝三暮黄牛如故言上峽舟行之難也太白亦日三朝又三暮不覺髣成絲水行之難可以見矣

此邊（岳の東南）岳嵐烈敷屢々身を吹倒さる、又雪の吹留りの處に到れば和かくして橇といへども踏留難く、首限りの所に落入る事數度、辛うじて摩渴利別の源に到る。此所雪中に清泉沸々と涌出たり。土人是を神水と云。傍に小山三ツ併び有、其所にエナヲを建て一首の蜂腰を記し、後方羊蹄社をこゝに建んことを土人に謀り、恭しく一枚の祭文を讀上奉る。

野作國、磯谷縣、志利邊津川乃水源能大山乎、敷坐須神乃前爾曰久、今年安政乃五年止云年、此處爾始弖宮柱太敷立弖後方羊蹄能大神登稱奉留事乃由波弘伊拙久劣加禮止毛假爾家人乃列爾仕禮弖此國爾渡來弖國內乎歷覽流爾神乃御舍波一處多爾未仕奉須在乎悔美惜美箱館乃水門乎守流防人乃頭等爾請氐神祠乎定奉利西東乃海邊爾住留土人等古昔與利此山乎後方羊蹄乃山止言傳問來爾依弖恐加禮止毛神乃御名乎毛山能名以弖稱奉良久止[illegible]如此稱白弖齋奉良波萬代爾易事無久平介久鎭理定理大坐々弖今去前毛此國乃家地波下津綱根昆虫乃災無久大乃

血垂飛鳥乃禍無久他國與利相敵夫弖境乎侵須事無久凌侮利弖物掠留事無久國人乃大海原爾舟漕回弖魚漁爲左婆鰭乃廣物鰭乃狹物乎佐和佐和爾引寄上弖打積置牟事波横山乃如久海幸令得賜比高山短山乃大峽小峽爾繁立留荒草木根苅掃比高田洿田乎墾利弖 五 穀乎取作良波惡 風荒水爾不相賜八束穗乃伊加志穗爾成 幸閇賜比弖饑字流事無久凍由流事無久夜乃守日乃守爾守 惠比 幸 賜閇止壽言壽支 齋奉良久止伊勢國人松浦竹四郎源ノ弘 恐美 恐美毛白須

　　宮柱太しく建ん心より神も在して世をぞ守らん

是より路參（ルーサン）（此間一里、雄岳の東にて去年船を作りし所なり）に下る。また一ッの小山を越楸多（シュシュウシ）に到り獵舍ニ宿。

六日同雲慘淡として風雪咫尺を辨せず、依て滯留す。土人等犬を具て山に入狐（シュマレ）貳疋、貍（モユク）二疋、貂（ホイヌ）一疋を得て歸る。土人の話に、雪中の獵は必ず雄雌を取るによろし。其譯は、惣て朽木大樹の根に住むが故なりと、一疋を得る時は其鳴聲を聞て又一疋出來る也と云り。

七日黎明に發、知別（シリヘツ）の氷上を越る。堅氷既に融（トケ）んとして處々釁破（ヒビワレ）たり。歩行に咯吱々々（ミシミシ）と音有て其危き事如何とも言がたし。東岸江こへてしばし（五六丁）

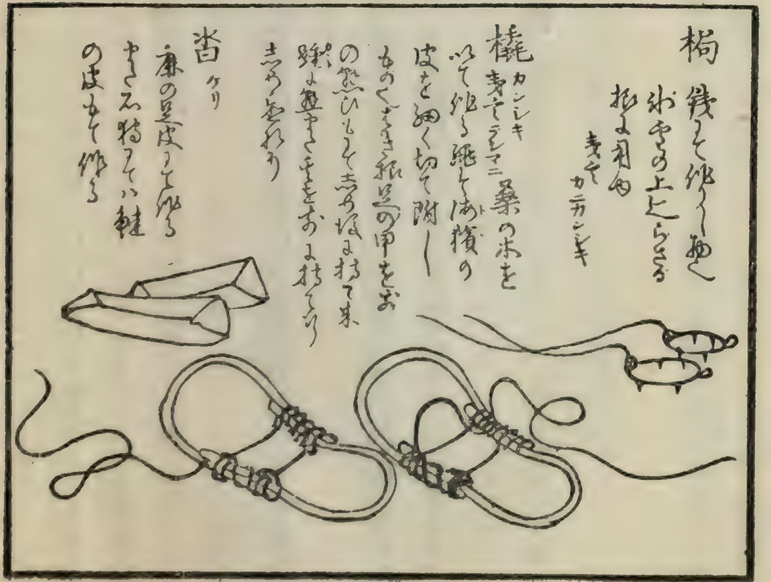
　　山川は氷の底に音すなり春の惠の深さしられて

ウッ（淺瀬）巨岩怪石簇々として河中に有（十余丁）過てヒンニハッタラ（淵也）此邊數里の平原見通し也。實に一ヶ國の廣袤有る也。（廿七八丁）過てキモウヘッ（東岸の支流也）と云に添て山に分け入る。惣て雜木

原、少し高き所には椴も有る也。針位東に向ふ也。

本川は是より南に入、ヲロウエンシリヘツ（西岸）シノマンシリヘツ（東川）の二ツに別れて察縨（サツホロ）岳の西の麓に到る。其邊り兩岸峨々たる高山のみにして往昔より其源を窮めし者なし。余去秋初て其源を窮む。後ろの方はヲサルヘツの源に當る也。

積雪數丈にして喬木纔に梢を出すのみ也。余は一同の跡を認て行に、一歩を過つ時は雪中に倒る。其苦辛言べき無。然れども是より山懷なる故風は大に穩に成たり。午後チライヲ、ベツ（キモウヘツの支流也）過てヘテウコヒ（此所二股也）右の方は察縨岳に到ると。余等は左り股に入る（十余丁）、タツ（樺）、ウシ（多）（平地）是より兩山峨々と聳え此



邊より椴を見る也。此所にて宿さんとて椴皮を剝んとすれ共未だ木凍て剝難し。依て枝を以て風露を凌ぎ、雪を踏堅め、此上に木を併べ上の崖を崩し土を取てそれを敷、火を燒事也。其支度實に容易の事にあらず。依て土人等雪中止宿所を見定むる時、崖根成所にて土の有を見立を第一とす。土無時は如何樣ニ踏堅む共一夜の間火を燒こと成難し。

八日快晴、黎明出立。兩山より吹下す雪踏込て歩行捗取難し。此所はペンゲヘテウコピ（上の二股）と言よし、右の方は天狗岳（サツホロ岳并び）左りワツカタサ岳（輿市岳つゞき）とて高山なるが、其より吹下す雪飜揚して飈の如く咫尺も分たず。今日は中々峠を越るべしとも思はれず。未だ時刻は早けれども一宿せんと（四ツ過）崖の下をトネンハク槍の鐏にて少し雪を崩せしに一ツの穴有。卒と云より二疋の獵犬を入れしに、差て奥深くも思はれざりしが熊の窟穴なり。其洞口を崩し見るに、竅き崖壁に入口へ雪が降積りし也。兼て熊の住居たりし由なるが最早穴出せしやと思はれぬ。扨今夜は爰にて泊らんと用意し、其岩壁に一絕を戲れしかば

迢々行路八雲烟、糧盡山中憶悄然、千島熊蹯耳曾熟、雪蹊認跡口流涎、

一同の者何事を書しやと問ふ故に、熊が喰たゐと言事よと申せしかば、皆々君左程に喰たくば何れ獲て喰すべしと戲れ、又四人の者弓箭を携へて山に行しが、夕方貍四疋を取り歸り來りぬ。

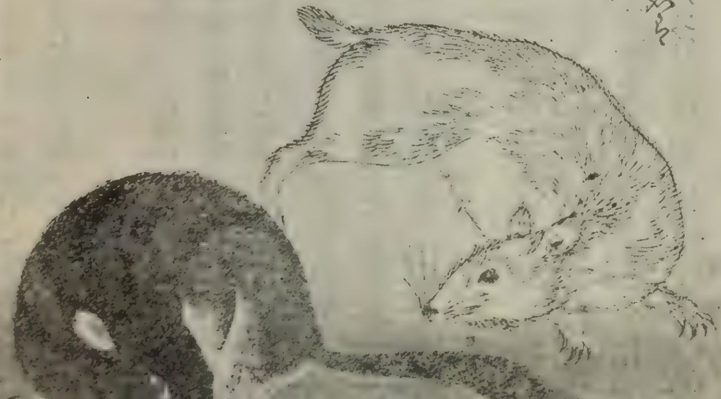
九日如ニ前日ニ風雪甚し。我は窟中に休ふ。土人等山に入又貍二疋、貂三疋とシヤチリ（跳兎）一疋を得て歸り、今日

シヤチリ 方言 アツケシにて アヲタコタンノホンセ ウハヘサロヌフ クスリ 西蝦夷名

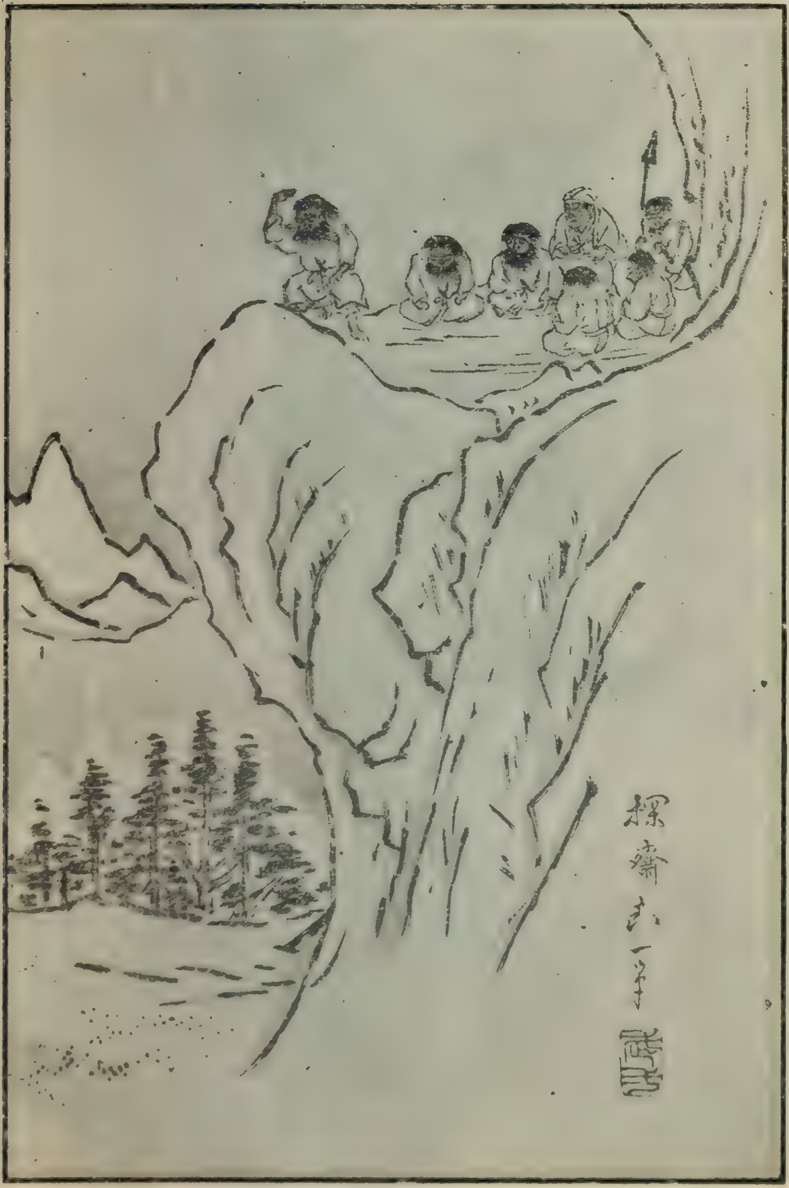
大さ五六寸細く長うして觸れば甚だ腥ること痰くして形うかし樹ること飛て雑し雪降る時は白く其余は灰色なる色是また猥鼠にあらず猥鼠ともいふ鼠の如くにして大なる異にして余もこれを嬲兒ともいふ兒の如くして毛は灰色にて其余の人識者の考をまつなり

志傳祢津み 和名 東部 エヘシルヲチ トカチ 西部 ルウチロヌフ カセクルクル

男漢所ま依て名實とし大さ五六寸尾は文にして爰に其尾可り木の枝梢を傳ふこと鼯鼠よう是以て好て木の実をくらふ是華錦鼠 俗にいふ 鼬鼠 雉尾鼠 紺珠等の類なるべしといふなり



南華逸史


探齋

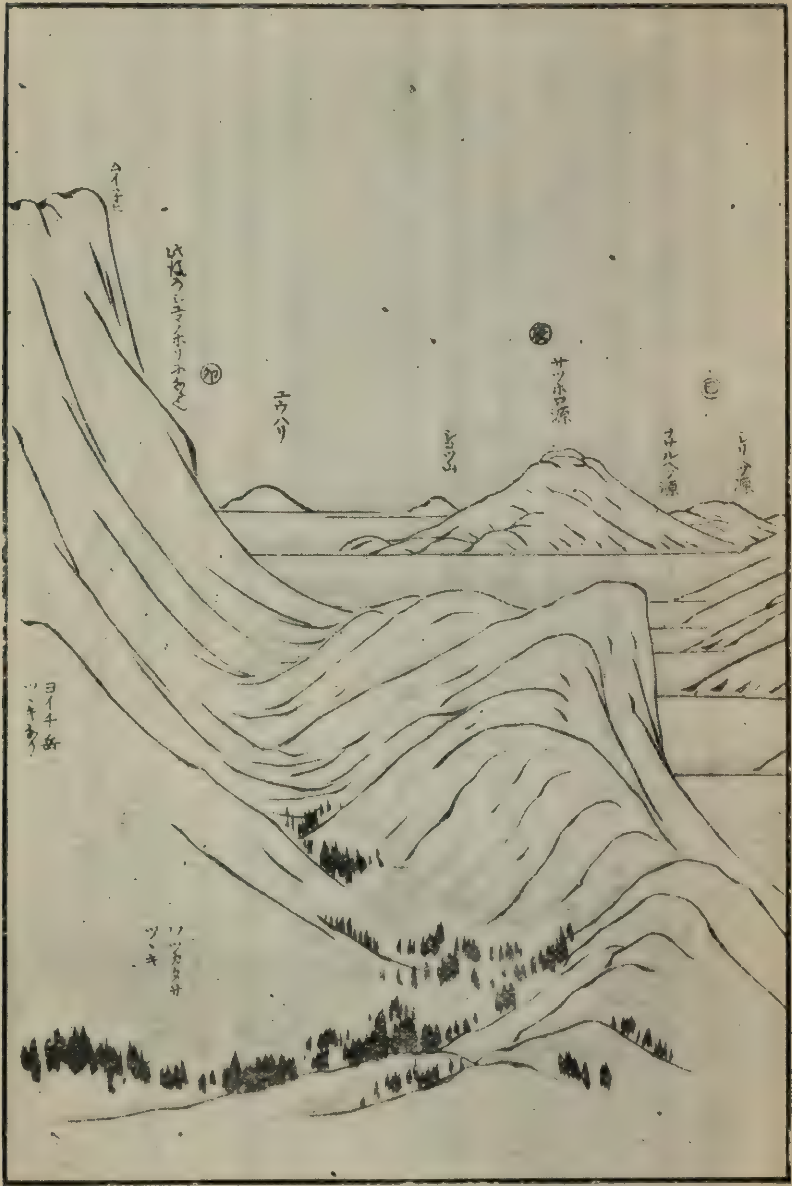
熊の蹤を見たり、何れ近くに居るよしを申ぬ。

十日快晴、五六丁登る。熊の跡を見たり。一同大に悦び其跡を認て暫谷に下るや、大木の根に洞有。左こそと言より余は二三十間も高き所に上り傍觀するに、一同の者穴の口より木を切是を差込しが熊は中にて怒り吼ける。犬は前にて悦び尾を振ひ、二疋にて狂ひ廻り、穴に入らんと欲するを入れじと捕居て、毒箭三四發するや、熊は愈々哮吼て洞窟も崩るかと怪まるを、其口より雪を崩し犬を追込や、熊は毒の瞑眩するに順ひ怒りて飛出し、トネンバクに飛攫付しや、トネンバク聊か驚く氣色なく、何ぞ此ヘウレホめと（兒熊の事ヘウレホと云。土人熊に向ふ時必ずかくの如く言也）其首を㨿と抱き、互に力を競る所え、獵犬は悦びて吠て所々へ嚙付しに、熊は力ますます衰ども戰栗き吼ける哉、トネンハク山鉈を拔て腋下より胸脇を懸て突たりける。其手練實に感ずるに餘有。此トネンハクは毎年七八頭ヅヽの熊羆を獲、頗る獵事に名を得り。此邊の山中の事工者なればと聞より、今度召連來りしが、如何にもと思はる。其時一同の者鯨波の聲を揚て悦び、先第一に肉を切て山海の神に供し、皮と肉半を前夜の窟中に擲ひ置、先鮮肉を或は其まゝ或は炙り物とし、十分に喰し、其勢にて上りける（三丁斗）。各の髯に腥血凍合し、手も血に染み、顏色恰も画る鬼の如し。恐ろ敷樣にぞ成たり。椵原を過るや（四五丁）山愈嶮にして辷りて上り難し、故に鐵橇を着杖を横に突、是にて攀登る。樺や菩提樹と斗也。其樺は風に靡れて皆矮くし。過て（三四丁）樹木も絶しが後を顧れば（西の方）ヲロウエンシリヘツ岳、ヲサルヘツ源、トクシ・ヲンヘツ岳、知別、混保、ヒンネシリ、岩内岳等見

る也。風烈敷雪を吹下す時は咫尺も分らざる様に成しが至極此邊にては雪を吹拂て堅く成、また歩行能き所も有たり。しばし上るや、磨平の所に到るに、大岩が立るかと思ふ黒き物の有を見たりしに、近付て見れば皆五嶺の矮松へ雪の降かゝりし也。故に其邊り踏ぬかりて腰迄も落入る所有、其苦しさ何とも言難し。風は何風とも定まらず飃風の如く雪を簸揚し、面は裂る如く、手足は覺無なり。口は捲通り難く、今迄快晴と思ひし空も忽暗く、忽明く、其變幻定り無、右の方を見たりしかば、余が通る所は烏帽子の頭の如き所にて、下は數百丈の斷崖、一ッ風に吹倒されては谷底に落る事かと、其嶮崖を見てより身心猶戰慄し、今日如此危所を通り行が、未だ此先は何かなる所や有らん、中々氣落等致す所にあらずと、心を取なをし、起つ轉つ五六十間行や、恐らくはこゝぞ

峠にてもあらんと思ふ所に至り、用意の木幣を立、伊勢兩皇太神并に大日本蝦夷惣國中大小の神祇、別て當所の山靈此度の山越無難に成さしめ賜へ、此度見込の新道成就の時は、當所に一社を建て永く當山の鎭守と仰かざらん、と丹精を抽て一心に恐み〳〵白し、頭を擧れば同（ママ）雲暫時に吹拂たり。四方を眺望するに、子の正針にムイネビ（高山）并て興市岳、岩岳、艮の方に石狩の平野果も無、是を越て増毛岳、ハマ・シケ岳、シヨカン別岳、ヲシラリカ（丑寅）等雲霧の間に突出す。巽に當りユウバリ岳、サル、ビボクの山々巳午に、察緜岳、手前に、天狗岳遙に隔て、午未に白老、アソイワ等波濤の如く一々指さし示さるゝ間に、又雪の吹來りければ

白老岳


ユウハリ
サツホロ源

鳥さへも通はぬ山のたむけにはたゞ天雲のゆふぞかゝれる

等戯れ、水派山脉凡の見込を付、貳三百間下り休ふに、一同の者余に向て言けるは、君は山に懸りてより天氣や行先の事を屢々語られしが、夫故に今日如此嵐に逢ひし也。此後山越する時は必ず日和と行先の事は語り給ふな、何も彼も神心儘也、と深く我を戒ぬ。扨此事を按ずるに、大船にて沖乗をするに、行先の日數を問ふ事を船夫は甚忌けるが、それしも是も利は同じ事にぞ覺ける也。扨是より木立原（椴蝦夷松）の險所十余町谷間に下るに、山の懷にて風當りも穩かなれば宿りぬ。今宵は飽まで鮮肉を喰て寒さをしらず寐たりけり。

鳴箭飛鎗勢亘遮、豪羆一怒震天涯、毛人自存傳家毒、鮮肉今宵到齒牙、

十一日聞馴れぬ小禽の囀るに目を開ば最早辰の刻過也。同じき數囲の椴、蝦夷松、五鬚松、樺木立の間を下るに、一面の氷雪に埋れしかば、其上また四ツ過迄來りしに、右の方より一筋の川と落合ぬ（シケレペニウシ）。其川は少し大き故、雪も埋み殘し置ければ、先氷を碎て五日振にて水を呑たり。（シリヘツより此所迄五日、皆雪を融し用たり）余も始て水の貴き事を悟りぬ。扨此山中の雪水には苦味ある樣に覺ゆる故、土人に問しかば、是は椴、蝦夷松等の有る山の水なれば苦味ある也。樺胡桃椴樹等の有る山の水は甘美也と、如何にも左樣に思はる。椴松の山の水何と無煤竹色にて、見てさへも少し異る物也。土人等は能く如此事迄窮理せし者にて、此事のみならず余も種々土人の考にて益を得たる事有る也。

後石狩にて此川の名を聞にイナハヲマヘツと云。右の方の川をシケレヘニウシと云よし、往年近藤（守重）某津石狩より察縄の川まゝシリヘツの川へ。此筋を越されしと、余が此度越来りしと同じ筋なるべき由乙名ルヒヤンケ（ツイシカリ）話したり。其時は石狩土人十二人を連られしが、余は十八九才の時にて有しが、餘の者は皆死て、余一人残るのみ也と、近藤様も石狩より虻田へ新道を切らんと越て見られし也とて、其切方の得失を種々談し呉たり。

扨川まゝ（シケレヘニウシ）下る。両岸は峨々たる絶壁聳へし所氷の上を午後迄下りて幅十餘間の川に出たり。是察縄の本川なり。氷の上を越見るに西岸は赤色黄色或は金碧の畫山水かとも怪まる大岩壁にて、其下通り難き故、東岸まゝ廿余丁下る哉、川の中より烟の立を見認たり。立寄て見る。岩間に温泉沸々と噴上、其邊り氷も融たる故、一宿して浴するに、温氣能く肌膚に適し、數日の草臥一時に消すかと思はる。浴しながら頭を擧ば與市岳の山脈邐迤として來り、岩壁掌を立る如く、實に奇と云べし。扨翌朝起て被りたる溢帋を見るに、温泉の蒸發氣に濕しか、氷て白く霜の如くなり堅まりしかば取敢えず

埋火をはなれぬ人よ思ひしれ雪の上にも旅寐する身を

察縄水源の事はシケレヘニの二股より（二り餘）上にカモイニセイとて、往古神が切開しと言る斷岩絶壁過てアラヲツタとて（西岸）澌水の如き水の流れ來る川有、過て（貳り）ホリカウエンサツホロ（東方）シノマンサツホロ（西方）と二ツに別る。何れも察縄よりす。嶺はシリペツ、ヲサルヘツ（西面）シユマ

マツフ（東面）等の源也。頂上に一株の異樹有と、數圍にて枝葉傘の如く繁茂し、何の代の物たるをしらず。是大古神が日本のニイ木の能き國と云より此地にも植て試んとて持來り給ひし由言傳ふ。文化度サツホロの土人此絶頂に至り、葉を持來り人に見するに楠の由、此地に楠のあるは不思議と云べし。未だ他に一株の有る事を聞ず。

十二日快晴、東岸を下る、川向にヨイチバヲマナイ（瀧に成落る）并てエキシヨマサツホロ（中川）ウハトラシ（小川）此所帶を折て疊重たる如大岩壁なり、東岸にヲツチシ（小山）ラウネナイ（小川）、また西岸ペンゲチライ（中川）バンケチライ（中川）チヤシバロヤンベツ（小川）瀧に成て落る。又東岸にニセイケマフナイ（崖の上小川有）此所川中え差出たる岩壁故に匍匐し越る。イヌイトロマフ（大崖壁也）此所に昨夜土人が宿せし跡有。後此事を聞たるに、シコツの者にて昨巳の秋タルマイ越に召連しフクスケと云し者也。過てヲカハルシ（南岸小川）此所亦絶壁の上を越てタンネハツタラ（深淵）の上に出。惣て此邊平地に成り、雜木立數里の原、西北に山を負ひ和暖にして墾開せば畑地に頗る宜し。又西岸にエンカルシベ（小山）と云山有、椴木立也。往古より山靈著しき由にて、土人等深く信仰せり。余は此所に蝦夷惣鎮守の宮を建んことを建白す。其議未だ可否を聞ず。過てヲコシナイ（東岸）と云に宿る。（今日の道眞經凡六里位なるを辛うじて一日に來る、雪消る時は大笹原にして大難所、六里を二日も懸るべしと思ふ。此溫泉の事是迄人の知らざるを、此度余が石狩にて話しけるに、追々湯治人も行けるよし、是へ道を開かば追々繁昌もし後シリ

（コノ讃ハ後人ノ樂書ナリ）

ヘッ越の宿所ともなるべきをや）今夜は椴の木も無故只原中に寐たりける。

十三日夜半より吹雪、被りし溢昏の上雪三寸斗積寒甚しかりしが、余は雪の降り初の比より犬を抱き寐たる故、漸々の事に凌ぎたり。向岸に越んとするに、此邊は川の氷融たりける故、漸々淺瀬を見立渡らんとするや、五六足も踏込しに、足先恰も切るが如く、十足廿足にして覺無なり、向岸に越せしや、赤く成て腫れ、歩行難きを漸々手を曳れて廿丁斗下るや、原中に土人小屋を見附たり。是又ツホコマナイ（小川）と云、則樋平（トヒヒラ）の北岸也。安心し家ニ入れば、何れも知れる者にして、乙名モニヲマも訪來り、相互に夢の心地し、最早貯えの米にも及ずと粥を炊き、夜前の寒と今朝の冷さを忘れ、彼等もチナ（干鮭）、と、當所の名物也とて菾蓬草（カバ・カウホネ）の干たるを煮て出ぬ。是當所の半糧也と。扨案内を頼出立しけるに、途中狐を見る事數十疋、然れ共人里近き所の狐故目早くし一頭をも捕獲ざりけり。サツリシコトニ（小川）ホロコトニ（小川）此所にて氷の間に獺を見附しが、是は何の子細もなく犬に取らしたり。過てケネウシヘ（小川）チフトラシ（小川）過て、ハッシヤム（土人は）本名ハシヤムと云樓鳥の如き鳥多きより号るとかや。此所昨秋引越しの在住五六軒建て去年ニ似ざる樣に成たり。余は知り合アイクシテの家にて宿するに、前の原に白鷺多く下りければ、是ぞ一羽取らんものをと言しかば、コロク彈輪（ハシキワ）を作り、小川に仕懸て一羽を得たり。是シコツコにて鶴を雪の降り始に取る仕懸なりとかや。

十四日晴、直に石狩に行ん事を談ずれば、此比の晴にて追々野地（ヤチ）の氷も融釋（ユルミ）て危が故、濱通りに下り行と致

カアヽレイ

弾木とて長六尺程なる木を拵へ両方にたるき木を並へおる也竹を渡き輪の中に足を踏込く其時はね木を縄付にして一節を踏は縄放れて木漸く起上りて輪引しめて足をとらゆる也

ニコツとは水辺の所始めに足を留めるなり 此木は縄付にて水際に立てしめ置く

尤右は鴫を捕るための仕掛なり又は大木を或は水際に並へ置鳥の輪の中に足を踏込なり

異ける故、直に眞一文字西北の方を指出るに、栂柏原にて朽木に何か毛物の留りけるを見附、是を取らんと欲し、只木の枝にて一打するや、死して落たり。其命の脆(モロ)き事は蜉蝣(フユ)にも比べし。土人に問ふに、誰も其名を知る者なし。後或人の語けるに、東部アッケシには多き由、夷言アッホウと云よし也。

書前濱(セニハコ)に出たり。(此間本道凡五里、雪道なる故直經凡二り半位也)人家に入、余等山越をして今此所に出たる由を申、酒を無心致し、木幣を作り山海の神を祭り、一同に安穩を賀して後、此代料を問に、一升八百文の由是に大に驚きたり。然るに大なる鮹(アツインネ)(タコ)を一疋無心し煮て貰ひ、其直を問に是は鮹代も味噌代も取らず、其質朴なる事實に感ずるに堪たり。酒代の高きは全く多分入船無が故に諸色振底にして如此高直なる事と思はる。惣て此地の不自由是を以てしらるべし。扨其微弊(ホノモヒ)の勢、濱風を寒しとも思はず石狩に着し、山越しの儀届書差出、惣て土人一同へ厚く手當を願遣しける。

十四日當所土人の知り合迄も皆呼集め、神呑を致し、夫々の切開方圖面并に仕方書相認め其上に

　箱館の浦の防人開きませ開くをもとの政りことなり

と戯れ、彼等の車座に我も班り、臺盃(タノサラチ)左りに持、飲箸(イクハシ)を右に取、土人風流をなし、先始の一滴をルーチンの神へと、次にトカチ越神へと言に、一同の者また君(ニシパ)是からトカチへ越る氣かと余が顏を守りたりける。

後方羊蹄日誌　大尾

鷲津宣曰、蝦夷之俗、古強暴而今柔順、古雖制馭而今易役使、相反如別種、然藩吏曰羅剎人往々雜居蝦夷之地、日本有一神將擊而驅之、盖謂坂上公也、㩀此則當時強暴難制馭者、是羅剎人之種類、非本土之俗可知

東園評識

知別者、在西蝦夷礒谷縣、距海門十餘里、斷崖壁立、水勢濶瀑、今茲五月、泛舟將遡行、三日許、不遂志而歸、再到岩內、衝凍雪、披荊棘、三日漸至知別河上、(地名宗附)雪融泥深、不能攀、蓋岳東也、然而雪水已漲、水源難窮、亦不得志而歸、初聞寓最上近藤二士 雖有窮源之意、不能達焉、寔知此夷地爲無双之險也、

安政丁巳八月念六日、雇土人四名於東郊虻田、到知別西岸、(地名路參)令土人刳木爲舟、余乘其間、挾持二人上河畔、二日遂窮源而歸、

八月二日、又順流而下、水勢疾於矢、多大石激浪如噴、兩岸樹木蓊蔚不見日光、但見羆熊豺狼、又有鳥大如鵰而頸背紅眶白背黑者、土人喚鐵哥、其餘山翠、(日光、トウカラシコマ、又、水乞鳥)、花班鳥、(奥サツサ、キ、薩コムクタイ)川烏之類、余所未見也、夜宿祭敵綿、見鱒鯇、産卵、命土人叉之、忽得數十尾、其易如以手、

三日早發、到緋井茶、此地兩岸縮蹙、水尤狹、流尤急、同行皆上岸、取糧食、及食器、予舟中、各提之、虛舟順流而下數丁、水漸廣、流漸緩、又就舟載所提之器、有鹿以毒箭斃之、質地名于土人、即嚮余所泊之宗附河岸也、日方傾、投宿岩內嗇長(世辨計)之獵舍、去夏有人住、今也則亡、屋大廢、壁上有岡田某(錠次郎)題詩、曰、雪岳氷山銀世界、白雲深處別開天、一椽茅

飽退猿愁苦切
山溪迴石亂水
漩環方知造物
千年秘逢着奇
人淺世間
長戶謹
法眼永壽

方地理所不載者多焉志櫻善述之蝦夷地記之可觀未有過於此書者事開拓者不可不讀此等之書也

松浦生身藏一具仙骨加以大胆健脚、視險危如坦途、人皆心寒股栗、生獨堅忍不撓山必攀其頂巔、川必究其源委、巨細悉筆而無

施牛涯足、疑是夷翁即地仙、件去歲余所和詩亦隱々可讀曰、猿攀蟹步十餘年、霜苦雪辛千島天、健脚自期僧小角、任他人喚做蝦仙、此夜野狐欲貪我糧食來數矣、

四日黎明發舟、水底其深不知幾千仞、水聲虢々驚耳、既而兩岸犬牙參差、土人喚之仁勢計升摩、岩石峭立、又上食器於岸、曳舟而下三丁許、兩岸如前、如此者三次、水愈險、石出如劍矛、於是神悚胆怯、土人製木幣以祈岳神、自此土人乃繫纜舟首、引諸樹杪、舟乃立自艫推之、弛纜則既過險矣、如此者數次、日方暮宿斷穴底、

五日下急流一里許、水聲虢々驚耳、土人喚之武伊羅、日暮宿樹下、夜雨暴至如傾盆、寒風砭肌、手龜、衣濡、欲焚火、薪溼不燃、覆欵多葉代雨衣、立而待曉、擧頭則岳巔皓白、愈知寒威甚、以昨所捕獺（エシツコミ）（カワウソ）肉、不熟而食之、餘肉則備午餐、

六日急流如前、余久在此險、心神殆不安、出針盤檢之、則岳北也、山巒不可辨、知離岳稍遠、日暮見小川於西方、土人悅曰是輕研利別也、明日必到昆保、往年虻田土人造舟於此地、到礒谷、厥後無能至者、經宗附到于此者、開闢已來蓋余一人而已、豈不愉快哉、昏黑宿于此、

七日下急流三處、到昆保河口、水勢稍緩、喚武伊（ノイラ）羅者五而已、宿柳多、

八日抵女（メナ）南、余今春到此、不得志而歸、兩岸有樵夫、目余有驚色、余亦如再生、日夕到渡口、渡子亦知余者、喜余無恙、出濁酒饗從者、余與鹿皮與肉、以餘肉、轉致常見某（榮太郎）於岩

一語涉虛飾者、蓋志有所在而然、固不暇雕琢字句也、松園道人誌

內港、

九日抵壽都(スツ)、訪長谷川(儀三郎)岡田(錠次郎)二氏、二氏遇土人尤厚、余亦與米酒烟艸漆器故服、以酬其勞矣、礒谷即知別之下流也、自古禁張綱設梁、蓋岩內蛇田(イワナイアタウ)宇須三落之民、在上流而漁故也、近歲禁弛放漁、故三落皆愁之、余所雇四名、即上流之民、懇々訴之、余乃告之二氏、二氏申舊令于下流之民、令無敢犯禁、四名感謝而去、

後方羊蹄日誌附錄　畢

奈何悔夷　　應神之朝始設
陸。又曾　　遣宮之館請內附。
國初小心鎖鑰寬。夷酋跋扈漂
叛屢。桓々　　桓武赫斯怒。將
軍田村賜鉞斧。胡公禮武冠之
奴。一戰降夷々惶怖。爾來叛服
無寧歲。上國每事負擾攘。至于
源氏東征時。人傳九郎與源家。

寂後及粗安武具。皇速奉　府鈞
謹案度。考簡捕線眼至背。三百
年來不改惰。近藥小狀覺參學遵
官為。教廣究屏護。夏邀哼之為
之覽。擇求學靈擢久。往南游至
生佛丈夫。生來條情無勝具。情
性前麗何足言。頗更同首通篡
步。一國東情讀書緣。于今海物

同和唐。蔡郡風土記已集。中於
圖畫又詩句。皆邑國家所用書
類之可以實發康。豫從來由踐
此屬。矣里隱讓計兆復文久郵
元治異生回節江都槐山居士
大阪峰摂并書

東西蝦夷山川
地理取調紀行

十勝日誌

多氣志樓藏版

凡例

一トカチ本名トカプなり。此川口二に分れ乳房(チフサ)の並び無盡の乳汁を出に倣て号し也。トカプ、乳の事也。餘說有れ共惣て脞記(サキ)謄說(トウセツ)に距れば記(シル)さず。是東部第一の川にして、此國の母川とし、石狩を父川とす。去箱舘百五十余里（今從ホロイヅミ境ビタヾヌンケ　クスリ境チクベツ迄トカチト云）沿海貳十三里、山ニ入事五十余り、拾一ケ場所に（クスリ、アバシリ、トコロ、石狩、サル、ニイカツプ、シツナイ、ウラカワ、シヤマニ、ホロイヅミ）隣接し、源は石狩に向背し、此度山越せし地をし分水嶺とし、土人も時として越たる者有と雖も、未だ和人是を試し者天開地闢の後壹人有事を聞かず。然るに此度御開拓の命有、忝も此山路を試ん事を余に

函館府より命ぜられ、依て余氷雪の上石狩より入、十勝に出て、日誌五巻を著。今其大意を摘て石狩の分は石狩日誌に譲りて是を麁にし、チクベップトより山中十勝サツナイブト迄を密にし、一巻とし十勝日誌の字を冠らしむ。然れ共當川十ヶの支流此度審にせざれば記さず。只本川筋のみを記し、ヲホツナイに及す、其支流は同七月ヘルフネより上り、サツナイに越、トツタベツ、ビバイロ、メモロ、シカリベツ、ヲトケフ、トシベツ、ウラホロへ下りし報十勝誌四巻を以て他日續編一巻を著すもの也。依て此一巻は只其山越の大概を誌るしたるの書也。閲者其意して熟讀なし玉え。

萬延元庚申の初多於大江戸牛込杉並の燒心草蕣廬の中

源弘しるす

戊午 十勝日誌

伊勢　松浦竹四郎　著

遠山含レ烟草木萠レ芽積雪日薄らぎ檐滴恰も瀧の如し。余は性命の縮る如くに思ひ、虻田（アブタ）土人共江手當弁に歸村の糧米を渡し、早々十勝越の事を支配人江談じ、教導者を出さしむ。河端に出て眺れば、渡船は氷の間を此方彼方往來するに、數十丈の氷り流れ來り、山をも欺く氷雪碎けて濁る雪げに押流され、見るに膽寒く、實に巨鯨も北海にて是の爲に打斃さるるも宜なり、何ぞ一葦の小舟心もと無ければ、愈陸行と決し、飯田某にも同行を勸めぬ。

二月十九日（安政五年戊午）快晴。小使イソラム（イジヤン土人）八人（ノンク、サダ、ヤアラクル、アイコヤン、イナヲエサン、タカラコレ、イコリキナ、サケコヤンゲ）等上川の者のみを連來る。渾（レハヘツンペ）手拭烟草酒等を與へ、途中の規定を申渡し、陸行すべき由談ずるに、是よりトツクの間多分はモウライ（アツタ領）川筋より上り、アソイワの西南を越、トウペツの上を渡り、カバトの南の麓を出て、ウラシナイに出る由なるが、此度は大川近くを行ん事を勸む。

廿日四野催レ烟春色雖二十分一西風忽舞レ雪豈風土の異を覺、東岸に渡り、ワッカウイより山に入らんとするに、惣て積雪何を目的と爲物もなければ

いづくより分やいらまし白妙に見ゆる限りは雪の山端

此邊谷地にて蘆荻原、氷上所々劈痕(ヒヾワレ)けるを此方彼方廻り雜木原に入、暫時にて大川端なるヲヤウ（一り余）に出る。此所乙名サビテアイノ家有、上の方アソイワ迄原（巾三十余丁、長七十余丁）にて眺望よろし。惣て針位辰巳に向て上る（三り余）タカウナイ（小川）越て原（三り余）有、過てトマンベヲマナイ（小川）川中に穹廬(マルコヤ)を作りて宿す。

廿一日寒威凛然月照二氷雪一恰も鏡の如し。平明出立（一り余）ツヘシナイ（小川）過て（半り）トウベツ（川巾七八間）氷の上を越る、源はアソイワとアツタ岳の間より來る、針位寅卯に向ふ（一り余）ユワエサン（平山）過て（一り余）シユノツ（川巾貳三間）越て原有、土地高くして眺望に宜し（子カバト、寅トツク、卯ユウバリ、巳シユマ、ツフ）上にシユノツ岳と云有（山脉カバトに續く）雪融捗取難し（一り半余）シユマウニウスナイ（小川）過て（一り余）シベツ（川巾六七間）源にシベツ岳と云有、夕方より雪降り出す、各假屋を吹倒されぬ樣に木を切、是を鎭石(ニモシ)と成て臥る、寒威甚し、虻田(アブタ)越にても覺ざる程の事也。土人代る代る起て火を燒けるが四五丁と思ふ邊りに狼二三疋頻りに吠たり、其聲熊の吼るより何と無物寂敷、茅吹風も若や雪中餓て我等が食を喰に來りもやせんかと寐られず。月の出比に成や、肌慰寒く耳を淸し聞ば、ヒン／＼と山に響く音有、いよ／＼心寥く、其音を土人に聞ば、椴の木の寒威に凍裂する也と、今比は少けれ共十月比は其音嚴敷して寐られざる也と語りぬ。夜明前雪ます／＼降出しぬ。

清吳兆騫謫戍記曰、第三日進二大鳥稽一夜

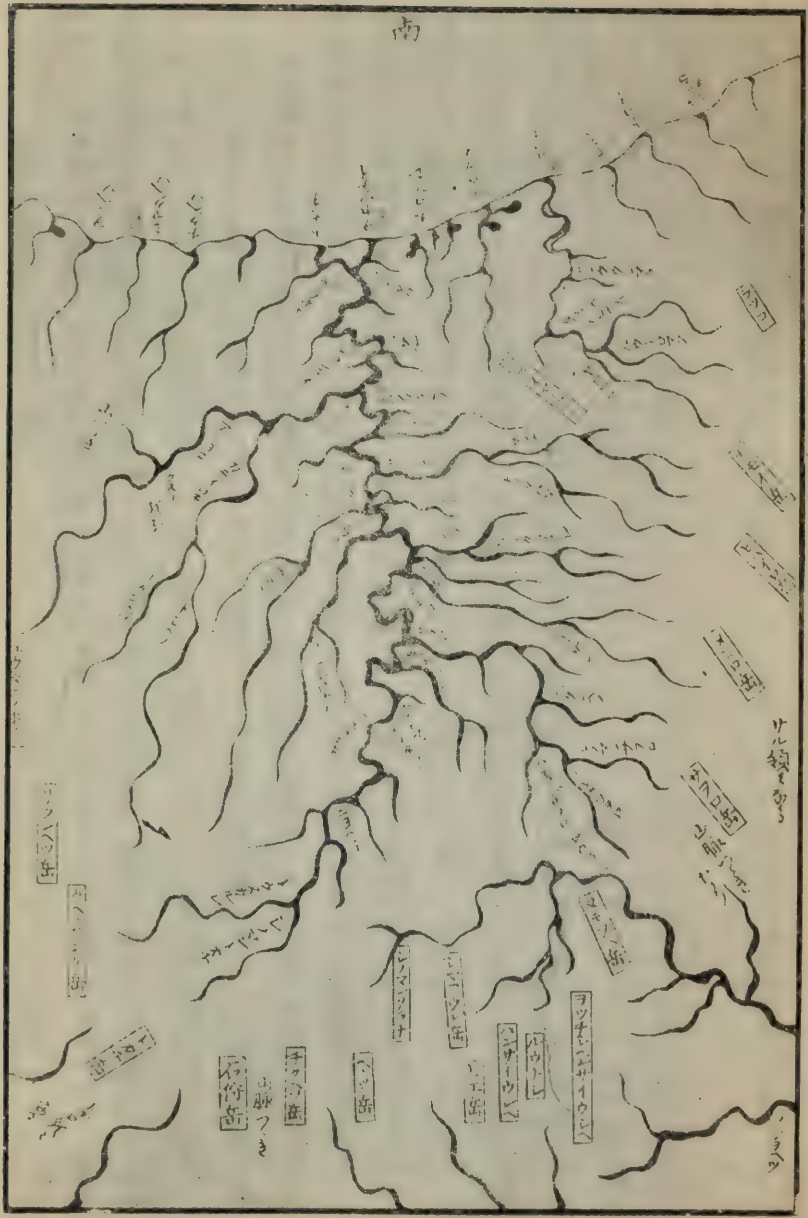
半忽聞ニ怪聲、山崩地裂、ハ則千年枯樹摧折之聲、鳥榴ハ則チ潺潺集、距ニ蝦夷ニ不ニ甚遠一、今讀ニ子重所レ記、知ニ驚言之不一レ誣、教堂識

廿二日犯風雪發（七八丁）タヲマナイ（小川五六丁）ヌツハヲマナイ（小川廿五六丁）アツウシナイ（小川十七八丁）タエノスケ（小川半りヨ）トムシユイ（小川）餘り風雪嚴敷目を開き難きに依て宿す。

廿三日快霽、子丑（十七八丁）に向ふ。サツピナイ（小川十八九丁）ヲソキナイ（川巾三四間）源はカバト山より來るよし（十八九丁）ヒンタウスナイ（小川十丁ヨ）ヲホヒチヤン（巾十間ヨ長一りヨ）鮭多く此所にて卵を置る由也。（一り）過てウラシナイ（小川）此所人家貳軒有。（十七八丁）キナウスナイ（小川十五六丁過）ドエ（巾五六間、長半りヨ）と云沼有（十七八丁）ピラ（赤崩平）過て（四十丁余）カバト（巾五六間）源カバト岳より來る、此傍にて宿す。土地頗る暖氣なり。

廿四日黎明出立、鍼位丑寅に向ふ。（十七八丁）チカフセトシ（一り半ヨ）トレフウシナイ（小川一里余）ウラシペツ（小川）此所にてセツカウシに逢ふ。（一りヨ）同道し行、トツクペツ（巾廿余間）源シヨカンペツ岳より來る、此所破たる氷の上に樹枝を渡し越る（十三四丁）原を過セツカウシ家に一宿し、翌一日風雪にて滯留。

廿六日天陰河水愈漲、雪汁吼々として十疊廿疊の氷を押流し來る、是より向岸江渡り（一り余）原を越ラウネナイ（小川）ホンチボヤウシ（小川廿七八丁）ホロチボヤウシ（小川）此邊樺柏木原に出る（一り余）ウ


南
石狩岳
山脉つき
ハンサイウシヘ
ヲツチシヘニサイウシヘ

リルン（長き沼也）等越（二り）丑の方に向ふ。ユウペヲツ（小川）過て（一り余）シユマウナイ（小川十七八丁）過てリイフル（坂也）下り、ホロノタ（出岬）爰にて船を呼て（向岸）ペツバラに越る。召連し土人イソラムの家に宿するに、其隣なる婆（ヤエケマツ）久敷病氣の由にて、女子共多く見舞に集りたり。其中に一人の婆有り、是をヘシルウタレと云て此地の巫醫なり。病者有ば惣て神に祈り、又藥等を差圖するよし、其祈禱と云は病者の枕元に小席を敷、太刀、短刀、鍔、矢筒等を飾り、エナヲを立て山海の神に祈り、何れの方より何草を摘て用ひよ、又全快の有無等を示者、本邦の巫に異なる事なし。又奥地にては待人の遲速、走り人の方位を指、其餘種々の奇なる事等を行ふ事有。ソウヤ邊にては是をシノチと云也。其藥品の一二を記すに、風邪には石防風を刻み、烟草に接て呑、眼病には紫苅を水に浸して附、產後血の道には沙參また山篇豆、玫瑰、また是を小兒口の中の瘡に用ひ、積には竹節人蔘胸の痛むに山荷藥、腫物の吸出しに舞鶴草を唾にて浸し附てよし。黴毒には佛甲草、胸骨の痛に金鷄脚、石長生、腹痛には邪蒿、寒邪を拂ふに辛夷、また白萱、沼草、鼻血に水楊梅其外牛皮消トウカマフ（不知）升麻キシキント（不知）細辛、黄蘗菜種々の採藥にして却て和風の藥を用ゆる事を好まず。其功驗も却て其風土に適するや治する者多しと語りぬ。

廿七日快霽出立、爰に上川土人の船十余艘曳上有りたり。其故を聞に、去冬濱より漁を仕舞て歸來るや、川筋凍合して擢は氷附て重く成り、時々山鉈にて打拂ども、寒威甚敷故、舷にかゝる滴り凍て舟足重り、漸々

此所迄來れ共是より一掉も上る事得ず、舟を揚ヶ置、荷物は負行しと語る。扨左様に凍らぬ間に上り來らばと問ふや、何年（イツ）にても上川迄舟にて通るべけれども、去年は御組頭の御通行が後れし故、歸村も留られ、如此難澁に逢ひしと聞にも、實に民を使に時を以てすとは是等の事かと獨言し行。此邊野原にて西北ウリウの山々を受頗る暖地にし雪消方も早し。（寅卯向十八九丁）サルコトイ（小川一りヨ）メム（小川五六丁）ニウシヘツ（小川十丁）過て川端に出て呼ぶや、女子共氷の間を小舟に掉て來りぬ。

川半より南淺瀬の所は氷にて浮々（つべく）したる上に越るや、イジヤン（人家四軒）此所に廿三四才にて帳面に洩れ、未だ夫を持たず、老母の介抱をして濱に下らざる者有。其故を聞に頗る至孝の者なりしかば、飯田深く其孝心に愛で、召連しサケコヤンケ（上川土人）こそ未だ獨身なれば是を娶すべし、我歸りて其事好に取扱遣はすべし。また土人風に初めて男に見るや、袋と云物を作りて是を着するが、其木綿をも我が贈るべしと懇に言はれ、平日の行狀を聊か記して出立し（廿余丁）ヲトイノホリ（小川）過て山に上る。雜木立（五六丁）シイベヌカル（小川）斷岸の上通り、下を見れば川筋屈曲蜿轉たり。（此間舟路凡十三四り（〇丁カ））タムニ（十五六丁）ケナシバヲマナイ（小川五六丁）ビラノシケヲマナイ（五六丁）キナチヤウシナイ（五六丁）エクトシユマ（五六丁）タツカシユマ（五六丁）過て平野（廿七八丁）ナイタイベ（川巾六七間）大木を倒して渉り、今宵は爰に大岩窟（ホロシユマチヤ／オホイワヤ）の有に入て宿らんと思ひしに、其山根雪に深く埋もれ知れ難し、依てまた少し行（廿丁）ヲランナイ（小川）と云へる所の川端に宿りぬ。

一夜をと頼みし岩ほ埋もれてはてなき野邊に假寐しにけり

廿八日狂風雞レ雪四野如レ霾恰も三多の心地せり。(針位寅卯)出立(廿丁余)て嶝山に上る、其嶮掌を立る如し。(シキウシバの上なり)一歩を過ば數十仞の谷に落るべきの危所也。(凡十五六丁)過てシキウシバ(シユボロの下なり、カモイコダンといふ)に至り見る。奇岩怪石の積雪其奇を倍し、兩山の樹木に降積る雪は霜刃を立たる如く、彼の劍山も如此かと怪まれ、厓の零糖春氣に折る音は四山に響き、ホロレブシベの間より落る水は合する氷の間に落入、其音梭尾螺を吹が如し。ホンノミンダルマイとて兩岸より差出たる岩に積連りたるは白虹を現せしかと見るに、近よれば又石橋の如し。テッシヲマナイの瀧は珠簾を垂る如く、其眺望惣て改りぬ。(此間凡二十丁)過てハルシナイに至り、是より斷崖たる上を(十余丁)ペンゲアソナイ(小川)に至り、嶝山に上る。其苦辛言べきなし。(廿丁)岸傳ひ(十余丁)ルチシポリ(山上)に至り、樹間より東の方を望むに、石狩岳、チクベツ岳、ヘヽツビエ岳連綿たる、其間曠野恰も銀盤の如く、是より山まゝ小澤を四五ヶ所過(凡一り)ヲンネナイ(五六丁)ヨウコシナイ(五六丁)エヌプト(巾三四間)の傍に出て宿。

廿九日傍レ流雜木立を上る。小山二ッ越(貳十余丁)原野(五六丁)を下り、キンクシベツの後を下り(貳十余丁)チクベツフト(大川)の大番屋に着す。爰に玉川慶吉越年なしたるに出逢ふ。先長途の労を賀し、糀四升、玄米八升を乞て酒を釀らしめ置、上川土人の分手當品等を持たせ不殘家に消しぬ。此邊狐多き由にて

南華主人曰、洋人捕猿ニ壺ニ黐ヲ塗リ置キ獵者黐無キ壺ニ顔ヲ入レ被リ踊リ見ス野猴來リテ黐ノ塗リ有壺ヘ頭ヲ入レテ踊ントスヤ黐ニテ眼閉周章ル處ヲ捕ルト。ネーラント第二十九号其手段彷佛タルモ亦奇トスペシ。

セッカウシは一升入の油樽の古きが有しを持來り、暫時考居りしが、是に三寸釘三本を三方より打、裏の方に投置しや、其夕方狐一疋を獲來り、我等に饗しぬ。其捕方、桶の中の油臭きが故嘗んと首を突込や、釘は首にかゝり抜ざる時隠居て打殺すなりと。夜イワンハカル、クウランケ來る。

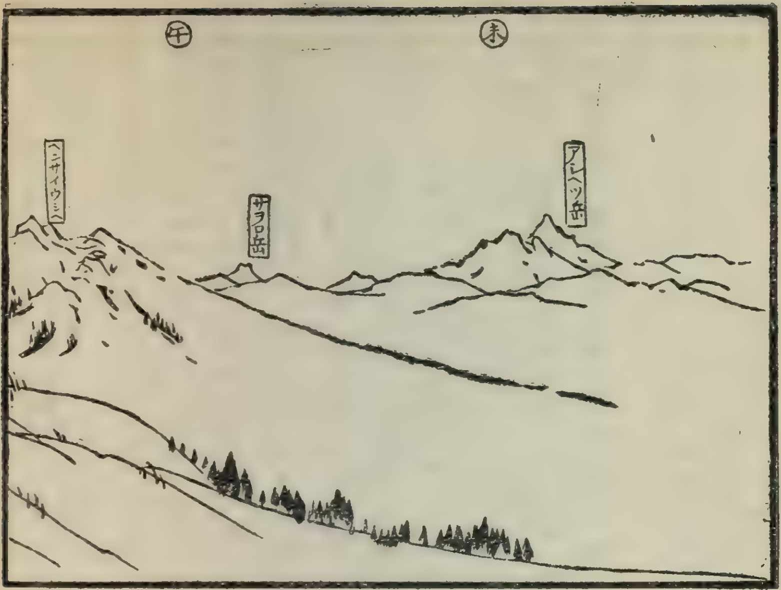
晦日クーチンコロ、タヨトイの兩人熊の鮮肉を以て我が安を祝し來りぬ。

三月朔日和暖雪大に融す。上川村々の人家を廻る、所々にてルイベと云て、鮭の生を雪に漬置しを切てルサ（茅盆）に盛りマキリ（小刀）と柳の枝一本に鹽を一撮添て出す。其譯は生にて喰得ざる人はマキリにて串を削り、是に刺し火に炙（アブ）りて喰べしと言事の由。又一種コサ（荏の一種唐花草）と云草の根を煮て出し、また午皮消（イケマ）を燒て出すも有。夜アサガラにて宿し、翌夕方大番屋に歸る。

三日漉レ釀作ニ木幣ニトカチ越の人足を定む。（クーチンコレ、タヨトイ、アイランケ、シリコツネ、ニホウンテ、ヤーラクル、セツカウシ、タカラコレ、サタ、エナヲエサン、サケコヤンケ、アイコヤン、イワンハカル）シリコツネは兼てトカチ越の事案内なれば、是を先導とす。荷物割をなし、三人を濱えかへし遣す。（ノンリ、イソラム、イコリキナ）

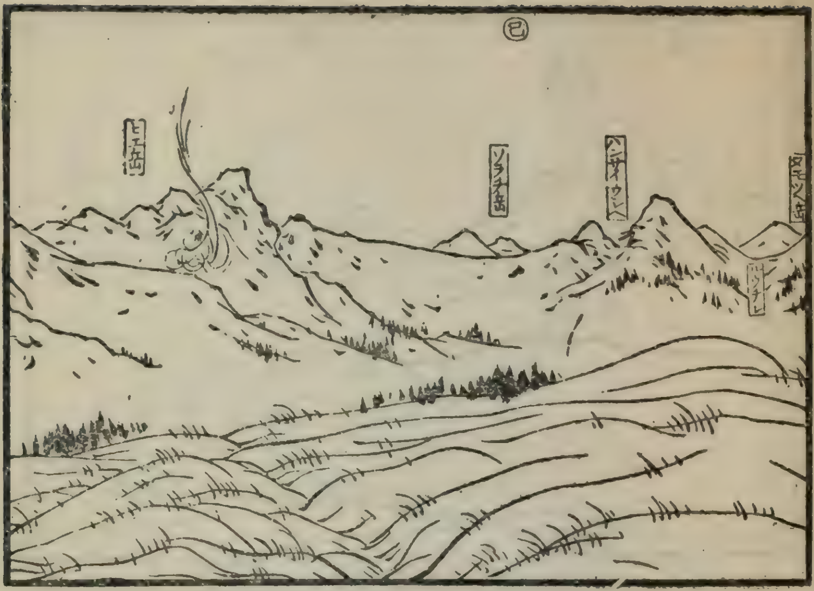
四日暖天、上川土人一同を呼神呑をなし、旅行の安を祈り、余も一幣を奉る。土人の言に河水大に減じた

り、山々冷かへりて寒きなるべきとぞ。
五日早間出立（七八丁）ペヽツ（大川）を越てクーチンコロ家に到るや、イソテクも昨夜山より歸り來りしと、熊一頭を背負爰に余等を待たり。是より原道（五六丁）ニヨペツ（十四六丁）ニケウル・ホンケシ（十貳三丁）トヌシコマナイ等針位巳に向ふ。シタウナイ（小川）メ・トツケシ（小川）シネヒンニウシ（小丘）イワンコンクツシ（小川）ホロヌ（小川）ホロトウブ（小川惣てペ・ツに入る）ウフシノボリ（貳り半ヨ）の麓を崖を樹根に取附下り（七八丁）ペ・ツ（巾十二三間）の岸に出る。雪げ漲て越べき手立無、工夫に煩ひ居しや、遥上の方に大樹一本倒れて川中に横る、然れども其梢細くして中々向まで渡り難きを、タヨトイ躶に成、樹を傳ひ行、枝を切拂、其を渉りて中程迄至り、水中に飛入しに、漲水腰迄にして西岸に到るや、倍す淺し。見るより一同躶に成木を渉り、川中迄行、水に入、西岸に越、茅野に火を附身を温め出立す。（二十余丁）ヲマクシヘツ（是より小川、皆ヒエに落る）トウセシナイ（小川）ホロアツナイ（小川）過て小山に上る。此邊陵地にて雪多く融たり。早糶（フウレイフイ・カタクリ）、欵多花（コロトクニ・フキノトウ）、獻春菜（フクジユソウ）、茖葱（キト・キヤウジヤニンニク）等芽を崩り（一り余）ホロナイ（小川）に到り宿す。夜疑多花を摘て茄（アヘ）（〇茹カ）物とし喰に内地の物と異にし、苦味少しもなし。夜狐一疋を取る。
六日驚風時々催雪しはし（一り）カヲナイ（十五六丁）ヲキケナシ惣て野原針位辰巳に向ふ（一り余）ピエペツ（川巾十余間）小石川急流瀧の如し、嚴冷こと指を墜が如し。（十七八丁）ヒエナエイ（小川）平山に



上る（一り余）茅野（廿丁ヨ）過て嶺に上る。四方山々能く見えたり。此原に火を附しや、其燃行こと早くして獣の驅る如し。（十余丁）下りてホンヒバウシ（七八丁）ホロヒバウシ（是迄の小川皆ヒエに入）過て椴山（一り余）ホンカンベツ（三四丁）ホロカンベツ（是よりソラチに落る）等過（一り余）谷地中蘆荻原（五六丁）越てフウラヌイ（小川）此原ビエの硫黄山より落る故に臭氣鼻を衝き、一掬を試んとなすや、土人等毒有とて製す。往古トカチ土人寒中此所を通り、此川のみ凍合せざる故に呑て直に斃（ライ）しと言傳ふ。如何なる寒氣にも氷らず、また一尾の魚も住事無と也。越て原道（十七八丁）クヲナイ（小川）レリケウシナイ（小川）に宿す。

扨爰より眺るに、東はヒエの麓（三り位）西はソ



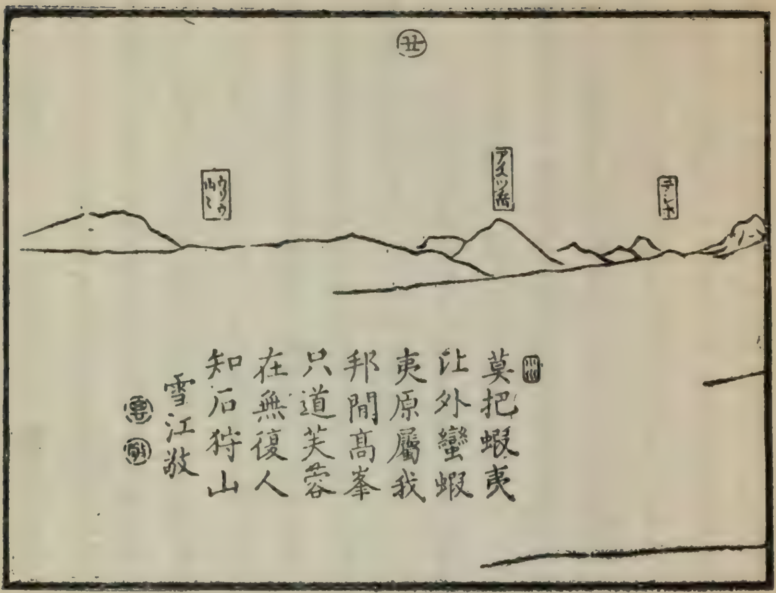
ヲチの西の山々迄凡十二三里、南北は五六里の間目に遮る物無原也〻一封内をなし、地味山に闇る故に暖にして内地に比すれば相應の一ヶ國と思はる。飯田も實に長歎し、如此地有る事誰もしらず、歸て此事を說共誰か信とせんと云。土人に火を放しめ寐るに、火氣立に隨ひ風起り、夜ニ入四面に燃延び天をも燋す勢也。

七日曉風愈募火氣倍盛也。燒原（十余丁）を行フシコヘツ（左川）過て（五六丁）イワヲヘツ（中川）是も礁山より來る水にて酸氣有（十七八丁）レホシナイ（五六丁）コロクニウシコツ（平山）樺原を上る。（凡一り）ニヨトイ（廿ヨ丁）椴山笹原に入る。（五六丁）下り（五六丁）ヘ、ルイ（大石川）過て（十七八丁）サツテクペ、ルイ轉太石磊々とし其上に雪の積りし上を渉り行に、時々

石の間に足を踏込て危き事言ん方なし。（廿丁余）上りて昨日通りし橇（テシマ）（カンジキ）の跡を見たり。又（五六丁）其上に假屋の趾有、是トカチ土人の獵に來りし趾なりと。其故を聞に、假屋の作り方にて知るとかや。此邊椴、蝦夷松陰森とし天色見え難し。（廿ヨ丁）夜雪を融し飯を炊しに、其夜の明方小流の音を雪の底に聞出しぬ、依て傍の木に皮を剝てしるし置。

今朝はやゝ岩間の氷融そめて落くる音に夢（ゆめ）も
くだけぬ

八日黎明出立、山愈峻しく（五六丁）樹疎にして樺木屈曲槎枒たる物のみ也。（七八丁）辛し（〇て脫カ）後ろを顧れば、一昨夜の宿所邊よりソラチ川端まで眼下に見江（十七八丁）追々上るにビエペ・ツチクペツ石狩迄も明らかに見えたり。如此



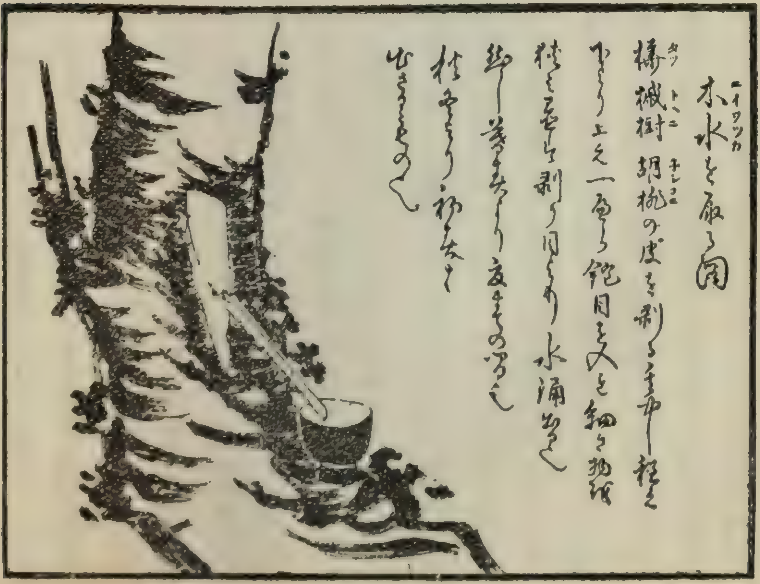
攀惱(ヨヂナヤメル)めるに谷間の雲輕く吹上りければ
　ゑみしらもあゆみなやめる石狩の山路に早き
　　雲の足かな

等戯れ、氷雪を口に入れ、息を繼ぎ〳〵（七八丁）辛うじて上るに（七八丁）四ッ過と思ふ比まで上り、ルウチシ（峠）に至る。此所十五六丁の平地、右をヲツチシペンサイウシへ、左りをヲツチシバンザイウシペと云、其峰續きビエペ、ツチクペツ石狩に連り、其後ろにソラチ（水源）シユマフウシ岳並て遙に遠く（南江）シカリペツ岳トカチ岳また南西に近く、ヌモツヘ岳其陰にユウバリ、アシペツの岳々半を顯す。惣ての風景爰にて一變す。しばし行（十五六丁）五鬣松(シユンク)の盤屈する上に雪降り積り、其雪融かゝりし故に、橇枝葉の間に踏込て歩み捗り難く（七八丁）下りてスモツペ（小

川）の源を越（七八丁）澤目を下る、椴松のみ也。（廿ヨ丁）シユマウシナイ（小川）其水鐵漿(カナケ)水にて呑難し。（十余丁）過てニナウシユ（小川）此三川合て一河と成しを彼方此方と歩行渉りし、七ツ半比にやう／＼（凡貳り半）ソラチ（川巾七八間）の端に出たり。西岸に越宿す。此邊躑躅、石楠花多し。夜に入四尺斗の熊の川向に出しを見附、犬を追懸、幸に崖の下に追詰取獲たり。依て戯に

一すじに己が命を的としておもひ射る矢ぞ何
あやまため　弘

記しければ、飯田氏も其傍に飛雪刀風歩欲窮、已聽一吼響長空、髩問貯得三寸髯、忽見毛人髭猛熊。今夜一同腹痢し大に迷惑す。後此事をトカチにて譚しかば、シユマフウシナイの水には源に毒有る故、一滴にても呑時は痢る也。一椀二椀を呑



ば頓に死する由語りぬ。水色悪時は必ず飲ざること也。

九日於二斯處一山脉水脉も大概に知れしが故、シリコツネ、タヨトイを返す。兩人是よりソラチ山に入猟せんと欲する由也。拟斷涯に上る事（七八丁）しばしルウチシ、此邊樺、椴のみ也。是東西の分水嶺也。（針位辰巳凡一り）是より谷に下りしや、昨夜泊りしソラチの川上也。大に驚き又元の方に返し（針位巳午）しばし峰傳ひ行や、右シノマンサヲロ、左りノシケサヲロなるが、追々樹木も疎に成り、是より見ればサヲロ岳（未申）ユウバリ岳（酉）其後ろにサルの山々見え、左りを見ればトカチ岳、ヲフラテシキ岳雲間に突出す。又しばし過左りに下り（七八丁）ノシケサヲロ（巾二三間）と云を下る（二十ヨ丁）也。山一ッ越（十四五丁）バナクシサヲロに出（二十余丁）また下り、夕方サヲロの本川に出（川巾七八間）南岸に越宿す。此邊大に雪薄し、今日の路一日に來らるべき所にあらず。最早サヲロと一同心勇捗取たりと云り。

消のこる雪の明りに朝出して春の日長くなほもおもほゆ

十日平旦發程、是より南岸を行や、北岸を行や、其意决せざれば戯に

ふみ分て越べきかたは何所ともいさ白雪の山のかけ道

口吟て（七八丁）下る。北岸に廣き原を見たり。是ぞ最早里近からんと越て見るや、鹿道縟羅の如く有り、是を何と無く（一り半ヨ）下り（卯向）ヒタルンナイ（小川）過て（一り）ビバウシ（小川卅丁）サッテキ（小川）此邊鹿多く、其逊るさま恰も蛛蜘の子を散す如く（一り余）過て谷地中を通り（十余丁）過て十勝

半香生

の本川に出たり。（巾卅余間）水鳴鏘然勢矢より疾く、其色泥の如し。向岸を望むや、岩壁數百仞聳立たる半に一ッの巖洞有り、其深測るべからず、恰も鬼斧する如く、鹿廣鬼面に似、山皺折レ帶かと怪しまる。樹嵯峨として牛毛を亂しぬ、是をカモイロキといふ。其洞口往古より到りし者無故此方より木幣を建て是を拜す。昔し一人の土人巓より綱を下げ、此洞に入終に歸らざりしと。依て其子追々又入、また歸る事を得ざりし由、其後嚴數入る事を戒め置る由也。川に傍て（半り）下るや、チヤシコツ（城趾）有。其方百余間、荊棒漫延たり。（五六丁）過て一軒の人家あり。（シユンクラン家内四人）我等を見て驚き、又再びイソテクを見て驚き、慇懃に余を迎ふが故に爰に宿す。我等にムツケ（乳羊根）を煮て出しぬ。扨去冬石狩より十四種の寶（イカシマ）を盗み欠落し來りしイナヲクシの事を問ふに、其者はヒハウシに居る由にて知れければ先一同安心致し、此川上一見の事を家主へ談じぬ。

　ますら雄のこゝぞ十勝と聞よりもまづ名に愛て一夜寐なまし

十一日天陰。シユンクランを教導とし聊の糧米を携へ川西を上るに茅原（廿余丁）パンケニヨロフ（小川）此處淺瀬にて斷崖たる上より瀧に成て落る、是を向岸より望めば頗る宜しかるべしと思はる。惜しくは銚子口より壺を見る故、其十分を盡し得ず。（三四丁）ペンケニヨロフ（小瀧）是も同じく瀑布に成て落る、惣て此邊に當弓（アマクラ）多く仕懸有故に甚危し。又（半り余）上りレーラウシ（川原）アイカツプ（大岩）過て（廿丁）ペンナイ（小川十町）ヲソウシ（向岸小川）等過、此邊惣て雜木立（十五六丁）過て椴山になる。此

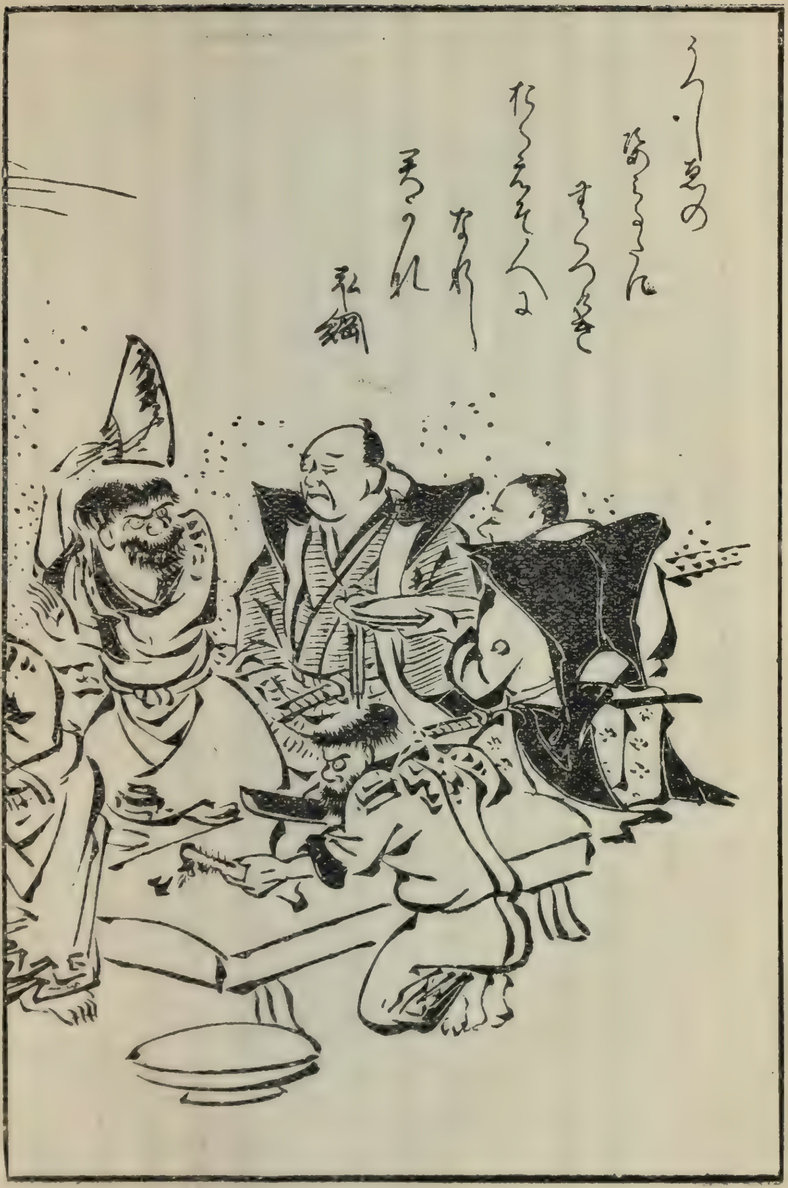
邊迄は道形も有しが是より椴の倒れたるを跨ぎまた潛り等して行なり。（十五六丁）サマツカリ（大指三十丁）イロンネウシリ（小瀧廿丁）向岸に見えたり。バンケキナウシ（十余丁）ペンケキナウシ（十余丁）共に源はソラチ岳より來る。山懸峻數、川中磊々たる奇岩怪石所々瀧に成り落る故、其眺望また妙也。（向岸）ヒシカチンナイ（七八丁）源シカリヘツ岳よりす。（三四丁）ニヘショチ（小川）鮭も此處迄にて是より上には上らざるよし、最早夕方になり、爰にて宿す。扨其上を聞誌るし置ぬ。

バンケペツ（小川）ペンケペツ（小川）東岸に在チカツペキッチ（小川）西岸に在チカシトク（并て）トソラウシ（瀧に成落）此邊兩岸峨々巖壁恰も鬼斧を加ふる如し。樹木惣て樅樺等錐を立る地なし。暫く上りペタヌ（二股）是より右の方トウヌカルシといふ、平盤の川也。源シカリヘツ岳の後トコロ山より來る。左りシノマントカチとて惣て大岩山ヲフラテシキの間を通り、トカチ岳より來る。西は石狩岳、東はウペ、サンケ岳、其後ろトコロの川筋に當る。實に此山蝦夷の母山と云も宜也。其大概如此。翌日タシュンクラン家に歸る。

十三日微雨蕭々、茅原を下る。（廿ヨ丁）シユマーハラコシ（小川）過て（十七八丁）サツテキ（小川）是野道にて越せし川也。（三四丁）過て人家貳軒有（トノトク家内五人、トシトン婆家内四人）各針糸等を遣して行。（七八丁）クツタルシ（五六丁）トミタビラ（平地）往古此所にて土人共合戰を致せしとて碧斧文錢（サノホイシライフセキ）を拾ふ事有、我も三枚を拾ふたり。また大雪の後は霹靂碪（ヘキレキチン）土器類をも拾ふ事有と。（五六丁）人家貳軒（ホキシ

ロマ家内二人、アイニ家内八人）過て（四五丁）マクンベツ（大川二ッに分る、中に洲あり）にて一軒（アリケウトム家内四人）を見（三四丁）アシリピラ（大岸）また向にカブチヤ（小川）此方にニトマフ（小川）此處迄至るや、兼て我が今日到を知て土人貳人を道の傍迄迎に出しぬ。其故は爰に漁道一すじ有それに迷はんかとの意なるよし。其心切實に感ずるに餘有。（五六丁）過て人家三軒有（人別廿三人）何れも乙名の一類のよし、扨アラユク乙名（七十四才）大形の萠黄純子の廣袖に山靼錦の陳羽織を着し、二人の童子（セカチ）に太刀烟草入を持たせ（此地の烟草入刻一斤を入るの大さなり）白髪肩を掩ひ膝を隠す斗の紅髭を撫て枝杖を突て我を迎ふ。其容貌湯々とし如何にも一封内の酋長と見えたり。次にイナウタカアイノ（シカリヘツ土人）其背高六尺に餘り、瞻守有レ餘の顔色、恰も茨木童子、酒呑童子も如レ此有けんと思ふの勢、後ろに子孫十餘人立併び我等坐に着し處、壹人の者余に向ひニシハヤンカラフテ（貴人久敷振）と言に、一同驚き問ふに、酋長の次男（シルンケアイノ）なる者にて、如何と見れば 辰年ヲホッナイよりホロイツミ迄召連し者也。余が前に來り、其時の禮を慇懃に演べ、余も如此山中にて知る者に逢ふ事實に奇と言べしと悦しに、シルンケ一同の者に向ひ、此ニシパはヲロッコ山靼タライカ迄も行し人よと言や、一同の者余を飮敬する事一等まし、彼地の事種種問ふに任せ、審に是を談し聞かすに、大に悦び、熊（カモイチツ）の膰毘（コトロエク）の腸鮭凍（チーセイベ）等盤に堆く盛り、土人ぶりの醴を勸めて鑿々と皷腹し、シノチサケ（歌ひ物）を謡て二念なく余等を饗し吳たるに

今日といふ今日ぞこゝろける一つきの酒にまさりし物の無とは　弘



荒蝦夷が腕で醸せしこの酒は鬼ころしとも言べかりける　宗切

等戯に其柱に記し寐けるが、扨一ッ困りし事は一同に此間より腹痢し、屢々大便に通けるが、土人の厠圊と云は野中に只太き木を二本横たへ、其上にて居る事にて、屋根も闌も何も無に、今霄は雨降りたる故、何所となく外に出て尻を捲るや、濡浸りし犬狗等余が糞を喰はん爲に、尻の下に首さし入、各先を爭て嚙合等するに、濡れたる首の毛、尻に障り、余が尻も股も衣服も泥を振かけて、其醃臢には如何ともなし難く、是此度の旅行中の大難澁なりし事なり。

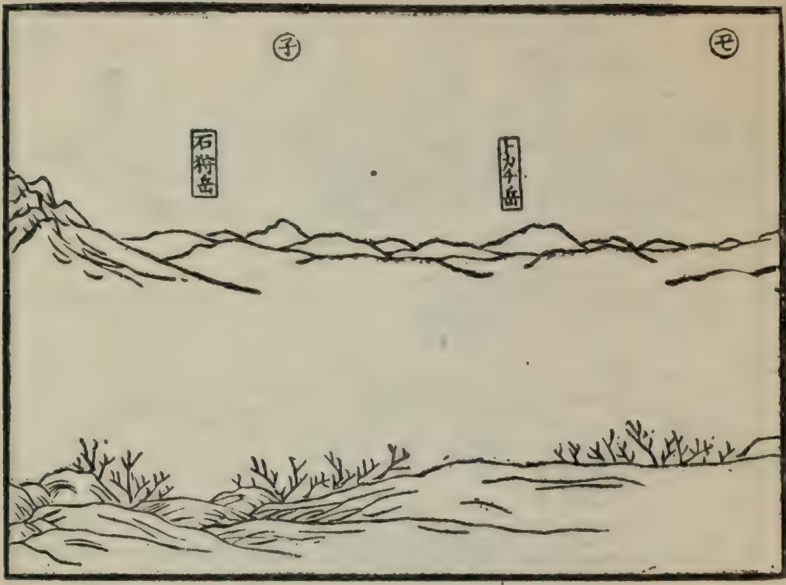
十四日乾風油雲を拂ひ拭如く、出立するにシルンケ、エヲロサンの兩人を教導とし出す。(廿ヨ丁)サヲルコツ(小川)向岸にヲカトマフ(小川)過て人家三軒(エチヤナレクル家内五人、ノタヤン家内七人、テムコロル家内貳人)過て(從ニトマフ二里余)ヒバウシ(小川)に着す。人家二軒乙名(シリコンナ)の家に宿す。此者元來石狩(チクベツ)産にて幼年より此地に來り頗る義勇兼備の者にて、今は僕の十余人を持ち、此邊よりシカリヘツ邊の首長を勸るとかや。扨賊イナヲクシ事を問ふに、乙名速に余等が前に連來りて、彼の十四品の寶物は私共預り置、一品として紛失致させざりしと。其取斗實に感ずべし。さて其より此者の舊惡を我等に謝し、石狩土人等の歸る時引渡し遣り度由申に、其趣意一利にぞ聞ゆる故、惣ての事乙名に任しぬ。扨夜に入イソラムと言て、和語に通ぜし者を外より呼よせ、我教導を致させ吳ける。

十五日快霽、從二當所一シリコンナ(乙名)イソラム(サツナイ乙名弟)ヤエサラマ(サヲロ)等三人先導す。

しばし過（七八丁）ハシユイヒラ（平）また向岸にチフル（小川）過て人家有（ヤエサラマ家内五人）貳三丁坂を下り、サヲロブト（川巾廿余間）急流一同手を曳連て渡る。

當川第五の支流、源はサヲロ岳より落る。其後ろ右はユウバリ岳、左りヒボクサル等の川筋に當る。川口に人家有（ヤエケシユク家内五人）元石狩の者也。

越て人家貳軒（イソラム家内五人、ヲヒツタコロ家内四人）東岸にフシコサヲロ（小川）シイペンペシ（小川）此方にヲペヽナ（岡山）ホネウリ（岡山）等槲柏原也。并てビラウトルナイ（小川）ヲムイタンネフ（小川）向岸にチブタウシペツ（小川）マツクシマリンペツ（小川）等云有。惣て此邊何れの方に向ひても平野にし其中に本川筋一段



低く屈曲惋轉して通す。其地石狩とは大に嶮氣、此邊にては雪殘らず融たり。コイチヤネシユツ(小川) サネコロ (小川) ヌプリルイラン(坂) 此上より四方を眺望する、其方凡そ三十里と思はる。向岸にはケネペツ (小川) 此方にシユブンシユヱ(淸水) マクンビラ等越て(從サヲロフト五り) メモロプト (川巾十七八間) に出る。此邊一輪艸(フクンソキナ)多く生たり。此邊の土人好て是を喰す。

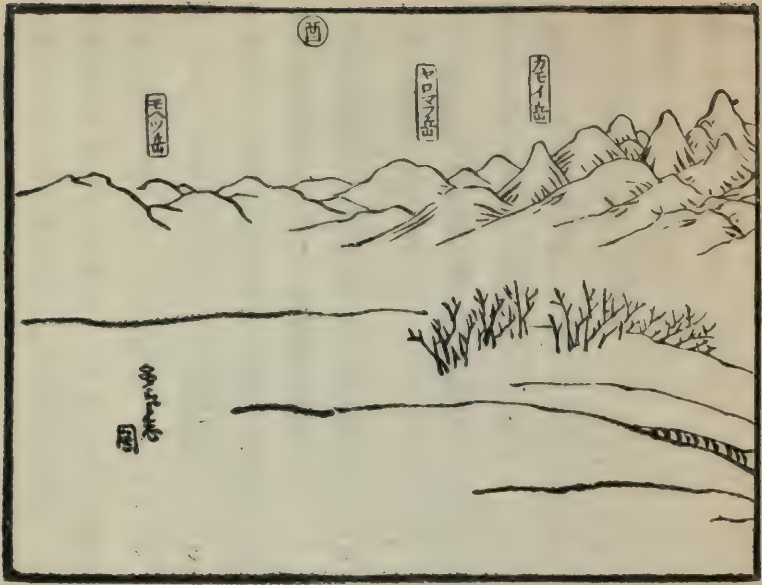
當川第六の支流、源はメモロ岳より來る。其後ろシビチヤリに當る也。

南岸人家二軒 (カモイコバシ家内四人、アバトシマチ家内四人) カモイコバシは當年八十三才の由なり、弱冠の時サル山中ユウバリ山中等江も行、又寬政亂にも出たりと、いと細かに語りぬ。其年を問ふに、審に間宮、最上、近藤等の事を知り、

誰は我より何才斗增たり、誰は同じ位なり等云に、兼て土人は己が歳も知らぬと聞しに、思ひの外夷語もて審に語り聞しぬ。

十六日曉靄濛々咫尺辨へ難し。少し高きに上るや晴たり。案ずるに是本川すじのみなるかと思はる。レウケメム(小川)リウカ(巾三間余)向岸にヲンネビバウシ(小川)ホンビバウシ(小川)ホヌンビット此方にアシリビラ(崖平)越て(從メモロ一り半)ヒバイルプト(川巾十七八間)人家八軒有(ヲツタクス家內七人、チウラクル家內六人、エクレ家內貳人、ハウニホエ家內四人、ノネトエ家內六人、イシチヤリ家內二人、チソンコタフ家內三人、アシチヤコ家內四人) サツナイに行には此處より山道有る也。

當川第七の支流、源ビバイル岳より來る。後ろ



はシビチヤリに當るとや。
向岸にホヌシベツト（小川）ウバラベナイ（小川）イコベツケシメイ（小川）シユブジヤリ（小川）シユブンシマリシトウシ（小川）等有。此方は（西岸）茅野まゝ下り、ライベツ（小川）チエカリトンナイ（小川）惣て此上一面の原也。此向に（従ヒバイロフト凡川すじ二り半）シカリベツ（東岸川巾廿余間）人家十六軒、其源はウベ、サンゲノホリと云より來る。後ろはトコロに當るとかや。是當川第三の支流也。又東岸少し下にフウレメム（メム）サリケシヨ（小川、従シカリヘツフト壹り余）此處にて鴨（カモイチカフ）の鳴ければ

日は暮るゝ越方いそぐ道の邊に鳴ふくろうの
　聲にくげなり

ヲトケフブト（巾拾七八間）川すじ人家廿一軒、

其源クマネシリの後リクンペツトコロ等の山々より來る、當川第二の支流也。扨西崖のみ來るに、茅野はメモロビバイルの岳々まで一目に障る物なし。過てチヨヽマトウ（小川）谷地蘆荻原を越て（從ヒハイル凡四里半）ヲペレペレフ（巾七八間）に着す。此所人家二軒（アルランコエキ家内四人、アイシテ家内四人）有、此處迄惣乙名シラリサ（七十一才）も出迎ける。依て爰にて宿し、明朝是より舟にて下る其手配を頼む。此川は當所第九の支流にして、源サツナイなるトツタヘツの北の山より來る也。其川筋惣て平地にて地味頗る肥沃也。

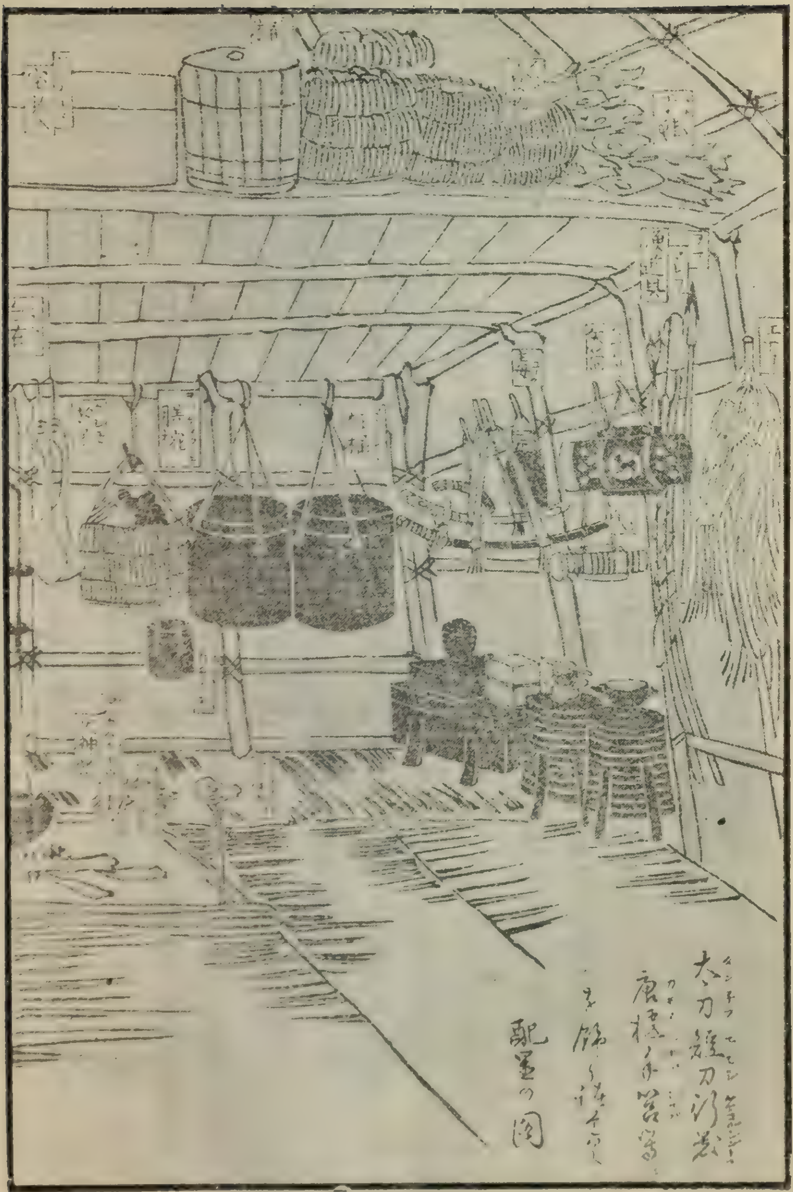
十七日曉霧濛々、刳木船（マルキフネ）二隻を備教導とし、シラリサ悴イルシカコロ、ノネトヱ貳人を頼み下り、戯に一絶を賦し飯田氏に示しける。

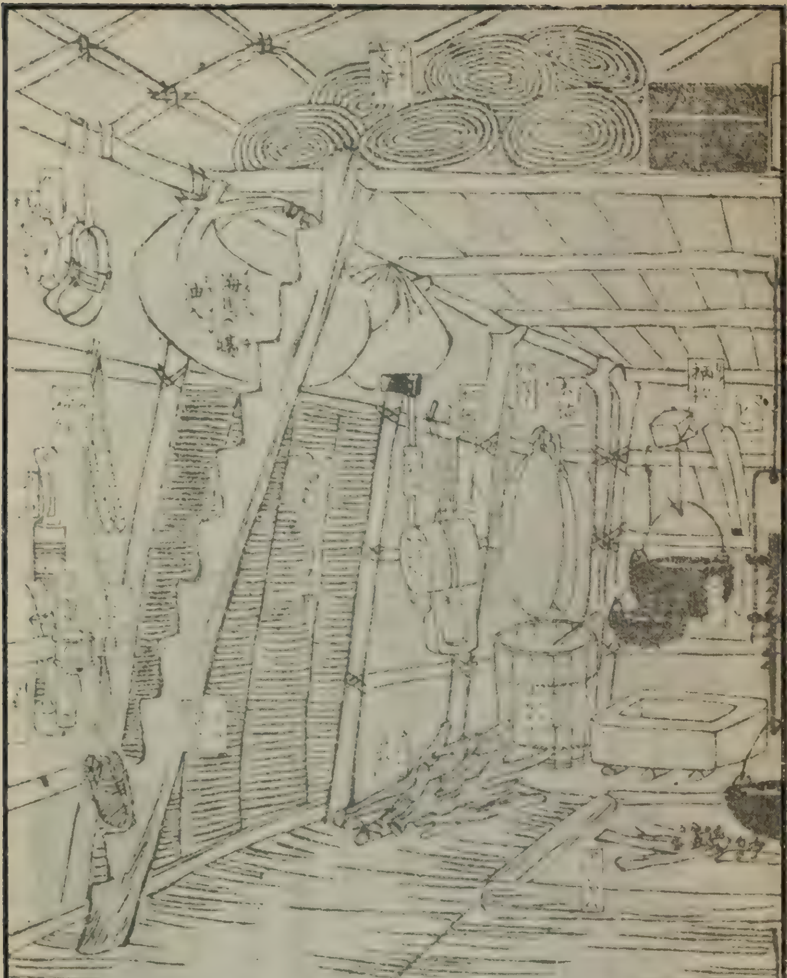
氷水雪山將卅日、曉天雇艇意漸閒、蓬底何須無著睡、送迎兩岸幾多山。

チエツフマクンペツ（東岸）フシコヲペレペレヲ（西岸）ホンペケレ（東岸）急流矢よりも疾し。河流數條に成り、倒木所々に横り、依て雨の度に河瀬變革すと、故に當所の者たり共此邊を乘り下る事を甚だ恐るゝ由なり。此所トカチ石（黒石）の名品有て、中洲に舟を繋て是を探すに、暫時に十余を拾ひたり。中に虎斑（トラフ）、白筋の二種有、尤も愛すべき物也。ヌブカ（西岸）人家四軒あり、過て（東岸）ホンペケレ（同）ヤウシ爰にて秋は鮭漁をする由也。余は舟に坐して舷より打入水を戽斗（ワツカリ）以て汲捨（テカトク）〳〵下る。（從ヲペレペレフ一り半）サツナイブト（川巾廿余間）當川第四の支流、源は神湖（カムイトウ）より來る。此岳四場所に跨り（トカチ、シヤマニ、

ウラカワ、（三石）頂に一ツの湖有て海獱、水豹も住み、裙帯菜産する由にて時々流れ來る由也。東南の風吹時は其水まし、百日の雨にも西北の風には水増事無と云り。然れ共往古より其嶺を窮めし者無く、往昔サッナイ土人一度上り、其後絶て無を、近比同所の乙名（マウカアイノ親父）數日の糧を貯え、川筋を傳ひ上りしに、一ツの大瀧有。其傍を樹の根を攀て上らんとするや、天俄に曇り山鳴地震ひて暴雨車軸を流しけるに、終に意を達せず歸り、其後再三また上りしに、瀧迄至るや、空曇り雷電甚しけるや、身戰きて其足前まざりしと、依て其念を絶しと申傳えぬ。然るに浦河にて聞時は、余等南より上るや、其巓に一ツの石の樓殿有、其後ろに當て湖あれ共見ゆる迄は誰も嶽に上れ共、谷一ッ手前にて其殿堂を拜し歸り、近く事は昔より禁じ置事也と。別て此岳に上る時は、海の物の名をいふを禁じ、若呼時は變名して呼也と。先鰒をフウナ、昆布シトカフ、海トウ、船をキッチ、鱈チライ、酒ワッカ、鯨ヘイセ、水豹シヌイ、和人アチヤホ等惣て如此と。其處にて取る鹿は毛黑くして熊の如しと。實に一奇怪の地と云べし。湖水の事等凡サッナイにて見たる者無れ共、浦川土人は皆初春の氷雪の時上り、谷を隔て是を見て歸る由也。余は當所乙名の上りし事を此七月サッナイなるハウサナリル（九十八才）に審し、後ウラカワの土人等にまた委しく聞しまゝを記し置なり。

扨下るや（兩岸）ヘッチヤラ人家有（西岸）ヘヨイ（東岸）マクンコヘッ（東岸）サッテクマクンヘッ（東岸）サットカチ（東岸）ジロトウ人家五軒有、過てトウベッ（右）此川相應の幅なり。エモエントウ（右の


配置の図



方沼有）ホロノコツチヤ（左）人家二軒、此邊より河水餘程遲流に成り兩岸も大にひらけ、柳赤楊赤らも獼猴桃紫葡萄多し。イナウシヘツ（右）ホロナイ（右）イ、カンヘツ（左り、中川）傍に人家十軒有。源ヲトケフトシヘツの間の原より來る、并てトウロ（左）少し下りサルブツ（川巾七八間、從サツナイ四里半余）

當川第十の支流、源はヘルフネとサツナイ越の山路にて數條に分れたり。

過てカモキナイ（右）人家四軒、并てヤムワツカヒラ（右平）爰にイキリカシ乙名と云有、又舟を備かへ先導人を雇ふ。然れ共遲流なれば是よりはさして危き事なしと。家の西平野にて土地至極肥沃す、少し斗粟畑を作り有也。兼て我が來るを知て、着する直に我等一統江粟團子を作り振舞ふ。其作り方、粟をば搗粉にしてトレフ（蕎麥葉貝母）の粉を合し搗、中に鮭の卵を入丸め、湯上しもの也。我には其儘出せしが、土人等には是を魚油にて揚て出したるに其味至て妙なり。出てトウロ（右沼）マクンペツプト（右）ライペツ（左り）フルケシ（右）此邊人家八軒有。爰をチヨダと云よし、過てセヲロシヤム（右）越て、兩岸共平地（從ヤムワツカ平一りヨ）トシペツプト（巾廿余間）に至る。此邊ます〳〵遲流なり。

當川第一の支流、川筋人家廿七軒、川上（五りヨ）二ッに別る。右をアシヨロ（クスリ領）と云、クスリ土人十三軒有、源は雌アカン、ユウタニの兩岳より來る、左り本川也。源はリクンペツ岳、ウペ、サンゲ岳、クマネシリ等の山々より落ち、後ろはトコロ、アバシリ、クスリのシタカロ等に隣る。

此邊惣て辰巳午の三方に針を取る。流れ屈曲する事恰も龍蛇の盤屈する如し。過てチシネライ（左り）トプ

チ（同）ヲンネナイ人家（二軒）有、ニウシペツ（左り）少しの山有、下にヤシコダン（右）テレケフ（左り小川）バンゲテレケフ（左り小川）向に當りウツナイブト（右に沼有）クーショツキ（左り川）ニヲビウカ（右原）ラショシケ（右川）ヲ、クリキ（右川）リフンライ（左山）此處本名レフングルライの由、其儀は海外の者の死たと云儀也、其上に穴居跡三十余有。土人は小人の跡と云り。是小人ならず、古人が穴居なす事、此地のみならず、内地にも所々にて見たり。また奥州松島邊には岩窟を穿ち住し跡有、また常陸風土記（茨城郡）に、普置二堀土窟一常居レ穴ニ有二人來一則入レ窟而竄レ之、其人去更出レ郊以遊。とも見えたり。また爰より雷斧石、土器の欠等出るよし、余も二枚を得たり、土器も至て稀也と。言傳に、往昔鉄器の無時は此地鍋も土にて作り用ひ、野菜魚獣等の肉を切に此雷斧を用ひ、家財を作るには石錐、石鑿等の物有、人と擊合叮合等する時は、霹靂砧又は石槌等言有。是則神武記の異志都々伊毛智とする物也。鏍槌は令義解軍防察に拋レ石とする物にて、是に繩を附、飛礫に擲の物なりと思はる。其邊是等を作りし砥石と云物も三ッ四ッ拾有けるが、其一ッを船に載て持歸りぬ。土人の言に我等が法として何一ッ人間地より來らざるとて事足らぬ事無也。未だ山中には烟管も、木また岩にて作り用ひしが追々濱近く余等も仕樣に成り、器財も衣服も奢侈に成りて、今は我等木綿を着、眞鍮の烟管を持樣ニ成り、依てそれ丈土人の氣力衰へ、力も弱り、質朴の氣も失行けりと、如何ニもの樣にぞ覺はる。また此地石鏃多く出る也。何れもトカチ石なり。是則尾張風土記天種子命以三角石弓及玉大羽矢一とする物にて、また國語云、肅愼氏楛矢石砮、また文選文鉄碧砮、大明

霹靂碪 カミナリノタイコノハチ

石質様々ありしあり

石鏃 カミナリサマノヤリ

大さ銀の如く両刃あり
刀の如く片刃の物もあるべし

石鏨 カミナリノノミ

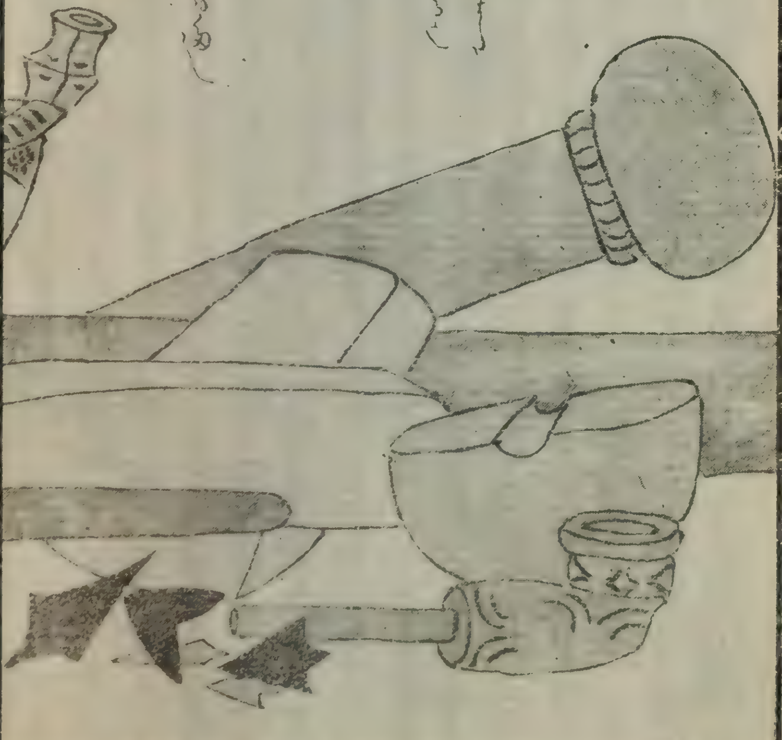
大小様々あり

雷斧 カミナリサマノマサカリ

大小様々異なり内にも有るべし

鐶槌 カミナリノツチ

内地にも多く之を見たり
此れも同じ物有るべし



石炮烙

是はちりちり
岩ニて出ル也
小坂寺の東海
すると胡ノ女も
熟て是を用ゆ

石鍬 カニノヤノネ

核と打きたり

土鍋 トイドロウ

大坂ニて出たり
金まさおとして
梅ほり出して
洪ハ水の時
岸ニ崩て
吐出して[illegible]をほりたり
土鍋也[illegible]なりしく[illegible]

一統志曰黒龍江出水花石堅利入レ鐵可レ挫二矢鏃一此トカチ石も堅利比する物なし。依て土人是を以て多く作りし也。此物敢て皇國支那のみに限らず、異域にも用ひしが、今年（萬延元年）花旗國(アメリカ)行の中に佐藤某（豐後杵築）彼地にて石鏃二三枚を貰ひ歸られしが、是は白石にして頗る堅利、其形種種有共此地の物に異る事なし。米夷の言に、昔し用ひし物也、今時々堀出しける由語りしと、然れば彼地にても用ひしや思はるなり。しばし過てユツクシフト（右川）ノヤウシ（右川）カツケン（左川）トヒヲカ（左小川）人家二軒有（從ヤムワツカヒラ此處まで陸路なし、是より濱え陸路有なり）向てチウヌヘツチヤラ（右原）ノヤウシ（右川）チキシヤニタイホ（右山）ウシ・ヘツ（右川）ワサル（右川）セヨイ（右川）人家四軒あり。

越てニクルウトル（右川）マサロフ（同）上に一ッのチヤシコツ有、此所よりも雷斧石砮多く出るよし、ヌツハ此所川の曲りし角にて廣く成りし處也。過てマクンヘツ（左）タンネヲタ（此邊川巾二百余間）兩岸に人家六軒有（從トシヘツ八り余）此所にて止宿す。河岸に一輪草、茨芥多し、摘て茹〔〇茹〕物として喰す。

十八日川霧濛々とし恰も混沌世界の如し。月の未だ中天の比に支度し出て下る。ホノタ（右）バラウツカ（此邊川巾二百余間）眺望恰も湖水の如し。人家二軒有。過てタフコライ（右川）ペツチヤラ（從タンネヲタ一り半）此所川二ッに分る。（右六七十間、ヲホツナイ、左百余間、トカチ）左りを本川とす。先其方を誌るし置に（左り本川の部は七月の日誌より擧る）

ホーヌイ（左り小川）アシネシユム（右野）此所人家六軒、過てタツタラ（右川）ヌタペト（右川）人家三軒、向にウラホロブト（川巾十余間）源はアショロの南クスリ領ヲンベツ岳より來る、當川第九の支流也。河口に人家二軒有。下りシチネイ（右川）並て（右原）ヲベツコハシ人家九軒有。過てベツモシリ（川中島）と云、蘆荻洲有。左りに人家三軒、此處に船渡し有。是則トカチ村とて本川口也。（巾凡百五六十間）此間一り半斗。

扨余此度は二股（ヘッチャロ）より右りを下るに、暫く入りてカンカン（右川）下る。平（ピラ）有、過てトンナイ（右川）ヲシヤリニ（右原）ヲサウシ、此所網の曳場のよし、上に人家十一軒有。過てヲシリケシヤウシ（蘆原）トシラエイ（右川）ウツナイチヤラ（左川）此流れヲホツナイ向に通るよし也。ヘトアニ（右原）タンネヤウシ（引場）人家三軒有。過て（從ヘッチヤロ一り余）

ヲホツナイ（本名ヲウツナイ）に着し、先早々一樽の酒を命じ、山中の平安を賀さんとするや、橋本某（悌藏）ネモロ江干役の下りにて宿され、又一樽を余等が無異を祝して與られけるに、共に土人等と弁天社の寶前に胡坐し、頭を廻らせば越來りし石狩山も雲井に突出し、ソラチ、サヲロの山々も雲か霞かと斗に見ゆるに、蜂腰一首を吐露し、土人等に木幣作らせて共に其柄に記し、日本蝦夷惣國中大小神祇國家安康靖海攘夷土地開拓百穀豐熟と拜し

鳥だにも通ひぞかたき石狩の山路をかろ〳〵我は越けり　弘

しづが身もしばしは雲の上人となりて越来し石狩の山　宗切

其坐に酔を盡し、欸導土人幷に當所の山土人等え夫々土産物取揃、一同に配分致し、

十九日飯田はヒロウの方ヘ向ひ、土人は是よりまた山に入、余はクスリの方えぞ、忽ちに三方に袖を分ち、

一首を戯れける。

あつぶすま今宵は雲にしきかへてあくまで飯ををしていをねむ

戊午十勝日誌終

搏獸彈禽總壯觀
鷹揚超軼一般般
閑人只愛卧遊好
披得新篇擁案看

辛酉冬日題
蔣潭鰕侶

東西蝦夷山川
地理取調紀行

久摺日誌

多氣志樓藏板

久摺日誌

首言

一東蝦夷クスリの地去二箱館一百六十里沿海繞に貳十三里余、山に入る事凡四十余里、原名はクシル、蓋しクシは越る、ルは路なり。當所より諸方へ路ありと言義哉、領内久摺湖亜寒湖雌岳雄岳ウラエウシ岳（クスリ岳云。）摩周岳、西別岳、硫洞瀑布、溫泉火坑等名所勝景の地算するに暇あらず。然るに古来より盡く探討したる者無、又岳に登りりしものも聞かず。依て余東西蝦夷山川地理取調の爲に安政戊午の三月廿四日笻を此地に曳て山に入、四月二日に北海岸アハシリに出、舎利より又山に入、摩周、西別、テシカ、久摺湖を討し、十六日南海岸クスリ會所元に歸り、亜寒誌、摩周誌、西別誌、久摺誌合八册を著し函館府に納む。今其要を摘み一巻とし、其及び難き處は画を以て示し、登岳觀瀑の二事は其夜営爐中筆記の章に譲り、聊か其大略を編輯す。依て其踈漏言ん方なし。只當所を一覧し廣漠肥沃の良地、不毛ならさる事を同志に知らさんとの微意也。閲者其密を知り玉はんと欲せば、原稿八册を熟讀し給はん事を。萬延紀元暮秋、於大江戸下谷新やしきの蘭竹艸堂

源弘しるす

戊午久摺日誌

伊勢　松浦竹四郎　著

安政戊午三月廿三日久摺會所へ着、巡村の事を支配人に談ず。結合小田井某も同道を乞ふ。余承諾し、敎導土人を命ず。夕方山中巧者にして健強の者八名（ナイボソ、ラマツ、ラマノクル、シュマルキ、ツヽキアイノ、ペタノミ、カチウイ、歸俗宗吉）を連來る。依て犢鼻褌（一筋ヅヽ）手拭（一筋ヅヽ）烟草（一抱ヅツ）濁酒貳斗五升を遣し、木幣を作り鎮守亞寒社の前に山中の無聊を祈り、首長等を呼て旅中の規則を定。

一喧嘩口論皆無用之事。山中鳥獸等の迯ざる樣靜に行べき事。

一食物を見候はゞ先立の者半人數是を追ひ、各の荷物夫々賴み人江渡し置、亂りに路傍に捨置べからざる事

一先導は隔日交替にし、行先村々より役土人召連、人家近き處に至り、陣羽織着し連ざる所はナイボソ役土人に代て案内すべし。

一犬は二疋に限り弓箭は銘々所持、途中空く毒箭を費すべからず。

一他場所に出てアマクウ（置弓）ウラエ（梁）等に獲物有とも是を捕るべからず。

一何處にても孤獨極老病人等有之時は必ず我に申聞かすべし。

一止宿所にて獵漁に出るとも一人は無用たるべし。

一鍋、鉞の外　椀、山鉈は銘々に所持、其外無用の品持べからず。山脈水脈の見立、一同にて相談し、字地名等疎漏無様申聞すべし。

畢て糧米（貳斗）玄米（五斗）烟草（五十抱）味噌鹽等用意しけるに、土人の申けるは、先年（文化六年）大塚（惣内）様白糠よりアバシリへ新道を切、また馬をも遣はされし事有。其跡今も形ち少し残りてシタカロ迄は可也馬も行べしと。依て馬足の立べき所までは遣らんと申故に二疋を申附、また歸程の糧米手當米等を十日の間にテシカ、（クスリ川筋）へ上せ置様に約し置。

廿四日黎明出立、舟を超本道ヲタノシケ憩所より右の方茅野に入か、廿余丁にて槲柏山に上る（此うしろはアカン川也）。峰つたい川を眼下に臨み、大笹を分て行に、所々に鹿多く群をなして遊べり。ルウシユマナイ（砥石澤）、ハナワンコヌニ、ヘナワンコヌニ等過七ツ頃にトクシ、ナイに到り（巾六七間）馬は繋にし游がせ、我我は倒れ木を渡り、椴皮を剝て風露を蔽ひ宿す（從會所凡六里余）。此川より奥へは文化後馬の入たる事無由、土地頗る峻にして廣くし肥沃す。

廿五日發足雜木陰森滿身濡ひたりぬ。ヤムワツカ、ヲイワチシ等過て新道の跡に出逢し、木立原雪班消谷地多く足ぬかりて難義言ん方なし。晝過シタカロプトに出（川巾貳十五六間）アカンの支流也。是に添て行事貳里斗、人家五軒（ノツケウ婆、コエサンゲ、トルケ婆、イペークトン）皆黄蘗の皮にて屋根また壁敷物等

北
クスリ岳
雌岳
雄岳
アシヨロ源
ユウクニ
アホロ
シラヌカ
シヨロ
シタノシケ
クスリ
南

に換るなり。其不自由憐べし。八ッ頃フ、ウシナイ（シタカロ）へ着。人家四軒（ラヌエン、クツトン婆、アルツケ婆）。各手當遣し、乙名トノモウ家に宿す。行器具桶耳盥手宮五十余種を併べ上に太刀廿七振を懸、何れも餝太刀にて白銀黄金を多く鏤め頗る面白き物有。別て短刀には種々の珍物を見る也。扨當所の子供は未だ濱に出たる事無は馬を始て見たりと、依て大に驚き、犬は甚だ怪しみ夜中吠て噪ぐ。草臥し夜も寐られずし、ふと一首を得たり（從トクシ、ナイ六里）。

はる〲と今日も分つゝ暮にけり明日行先も思ひやらるゝ

廿六日馬士ヂヘイ是より暇を乞ふに、一同の者アキベツ迄は行に宜しとて連行。小使ラミウンデ先導す。小山を越、檞柏原に出。ナウケ、ニタツベツ過て（三り余）テシベツ（巾七八間）を渡る、人家三軒。（カラシ、サンシラン、コシンラク）爰をソウシと云ふ。アバシリ土人小使エコレに逢故是より召連（一り斗）同じ野道を行。

アキヘツ此所も南向土地肥沃暖地にて畑地には頗る宜敷、是より馬を戻す。人家三軒有（ハチ、イヘチ、ハ、ウインクタ）。山追々峻敷雑樹原、右の方アカン川筋近き由にて水聲吼々たり。ラウネナイ、チンルシナイ此邊嶮の山に長く柵を曲り〲結ひたり。其故を聞に鹿を追入、結り〲にアマクウ（置弓）を仕懸取る由也。其巧は琵琶湖にて箔を建廻し鮒をとる仕懸に同じ。彼は箔の行結りに箔籠を置、自然是に入る樣になしたるなり。其理同じ事也。山中種々の異艸有、蛇苔、黄花の山慈胡、胡菫、別ても延胡索は竹葉、牡丹葉、丸葉、

ハラテキ
アレヘキナ

ヲヘライベの圖

形ち鯔のごとく
丈三四尺位の物也。
この地產するいとう
（夷言チライ）の種なり。
いとうは八九尺にも及ぶよ
し、肉白くして少毒あり、土
人も稀に喰はざる者有に、此魚
肉少し紅、無毒甘美にし四月頃に
取獲るなり。膽有て其功能熊膽にも
勝れり。

シユリヲホの圖

桃花魚の類なり。毎年四月比に取る。七八寸位肉白くして輕ろし。

ヲツトイ　是も桃花魚(ウグヒ)の一種シユリヲホより色少し赤く、勢強し。八九寸より一尺餘に及ぶ。肉白し。卵は共に鱒の卵より少し小さし。是も四月より五六月に惣てとる由也。

カハルチエツプ

形扁にし鯽魚に似長六七寸味殊に美にし多食すれば瘡を生ず。冬中氷上に火を燒き、穴を明け、其より括槍もて穿て取る也。其獵出羽の八龍湖の獵、またカラフト島シユシユヤの鰈取りと同じ業なりとかや。

此四種クスリ、アカンの兩湖にのみ有て、他所にて一尾も見たる事なし。實に一奇事と爲べし。

細葉、針葉、鳥頭葉、白花、黄花等其品算し難し。七ッ過イキタラウシに着す（貳里半）。人家有（シンナシ）。阿寒河の西崖なり。其岸は奇岩怪石水怒吼々とし、向岸は峨々たる高山雜樹陰森此所よりセチリの川筋へ一日に越るに宜しと。然し其嶮言に盡し難しと。其妻我に黑百合、赤沼蘭、山慈胡等を以て團子を拵へ出す。惣て當所山中は是等の艸根を半食に當る由なり。夜鹿貳疋を獲たり。

廿七日余は土人三人を連て登岳の事を議し、他は先に溫泉に行待べしと申附出立す。曉靄深く同行の者をも見失ふ故に、互に聲をかはし行。兩山は蓊鬱り、雜木山に上る哉路形少しも無、故に只熊鹿の跡を認てゆく。五ッ比シユマタツコフに到る。此所高五六丈の岩の上に五鬚松、土蘇木、櫻等繁茂し苔むしたるさま恰も盆山の如し。暫時にルペシペの麓に到る、此所にて樹木絶たり。只山の峻嶮に依て笻を捨草根に取附て上る。廿余丁にして木幣ウシとて、土人山靈を拜して木幣立る處なるべし。此所にて仰面は雌岳峨々と聳え低首は湖中を隔て雄岳を望むに、山半雪にして九霄を照す。爰にて湖中の四島を審に見る事を得るに、恰も鳧鷗の浮るが如し。南の方を眺むれば久摺灣北は舍利濱手前に久摺岳（ウラエウシ）を見る事を得たり。扨是より登岳しては其〳〵の山の彼方にクナシリ、ネモロ灣を見南西エリモ、ラッコ、サッナイ。西の方、ビバイロ、メモロ、サヲロ。戌の方、クマネシリ、トカチ、リリンペツ、トコロ、サルマ岳等を見、其重疊たる雲霧上に、一ッの大岳を見る。是を土人等は何所とも知らざる由なるが、恐らくは石狩岳かと思はる。如此簇々たる峰巒の間に、アショロ、トコロ、アバシリ、クスリ等の川々蜘蛛の糸を現ける如くにて舟筏を通ぜ

しめ、人家を置し、墾開せば幾若干の良田とならんや。其便り偏に天地造物の然らしむる處か、先其登岳の大意は一章の拙文に筆を讓りぬ。

東蝦夷久摺之地、有二湖、東湖曰久摺、西湖曰阿寒、二湖之水合而爲久摺川、蓋自東湖到此三十五里、西湖四十里云、奔流可一里、而入于海、自此西折行廿餘里、山谿最多、兩岸峨々、急流難通舟檝、地勢崎嶇祈轉、又行廿里、山石峭立、谿流縮蹙、瀑布懸、阿寒湖在其上、周回廿餘里、有四嶋、急汐、白楊、大小、島、雙峰挺東西號爲雄雌岳、到生足牛、土人迎余、慇懃執禮、蓋阿寒河之西涯也、水聲瀧々于時戊午三月念七日也、距發久摺日三日、

眞寫亦自不得不奇也余讀此編始悟作文之法不獨服其妙而已　小橋勳

念七日黎明、倣土人壯佼三生、發旅舍、曉霧不辨咫尺相呼應而進、百餘歩茂樹陰森、鉤衣冒髮、石滑路絶、踐熊鹿跡殘雪未融蓁荊刺蹠、草鞋濺血、露濕衣、寒沁骨、手凍失節、但土人徙歩如奔跑、半時許到岩小山、又行二里、路越之麓也、異艸奇花、芬芬爛熳、最多滴金露土人採而食之、山諸禿、攀援而上、可廿丁、到木幣多、地僅平坦、春艸未萌、寒威可知也、土人立木幣拜岳神望湖淸澄可愛、小憩又攀、滿目樺樹、其大五六尺、晻靄滿地、又行可廿丁、出岳東、雪滑路險、有五鬣松簇岩、皆大二三尺、異艸夥、土人畏山神之祟、不敢採云、日午達山北、寒威袪肌流汗益覺巉險、可廿丁、而自山西到山南、雪堆而過膝、或沒半身、達山巓、則日巳未、山巓闊潤、四顧多羣峯、如兒孫俯伏、皆立脚下、三生頻指點示余、恨鴃語不通、元沛德機有句云、鴃語酬人

和俗謂嶺曰手向タムケ　タウゲ今謂盖到此供幣祭神故也蝦地猶存古風本爲我

雌岳
メノカニト云

ヲアカン
米四郎圖

屬國故蝦菅家ナラ阪コノタビハノ歌「庭中ノアスハノ神ニ小シバサシアレハイハハンカヘリクルマデト云古歌モアリ　老鐵

蝦自苦、好山不敢問何州、余始悟此語之妙又遙有大岳特立於天末者恨土人不識之、想是石狩岳也、其間蚩冢百里、山川相繆、蜿轉呈奇、天暝霧遮、俄頂混沌、心神畏懼、土人云是岳神之所爲也、立木幣祈之、余亦賦國歌、拜岳神、餐飯而憩、雲霧漸晴、而寒風凜冽、履步艱難、乃藉松枝於雪上、蹲踞而下、未半時而達樺原、日已申、過湖滸浴溫泉、旁有石似鼇背者、是其源也、水遶石礴而流其熱鉛銀與小流合而注湖掬之則有硫氣倦疲漸慰壯佼入生、到此而待余、以木皮爲屋、携魚鹿以饗余、風土殊異語言侏離、如在別天地、

七つ過エナヲウシへ下る茅野又廿丁斗にて、左り森々たる椴木立瘴嵐濛々殘雪溪を埋め、實に毒虫猛獸の巣窟と思ふ。是より溪(クー)に傍下る七八丁にて溫(ヌー)泉に着す。先に來る土人木皮を以て屋を作り、鹿を斃し鯎を鉤し余を饗す。右の方赭石(アカイシ)の高十余丈にて形鼇背の如き物有、其より溫泉沸騰し溪水を合して百余歩にして湖畔に到る、此所小き池有、其溫氣肌に適し三歳の疲勞も一浴して消散すかと思はる、豈今日の草臥(クタビレ)をや。其中多くの楡皮(ヲヒヤウノカワ)を浸せり。是皆アハシリ土人の置所と、此地楡皮を以てアッシといへる布を織て衣とするに、此溫泉に浸す、物柔(ヤハラ)にて蝦夷第一の上品とす。岸に小魚多し、是水の溫(ヌク)みに寄物か。夜樺皮を燈し蜂腰を柱に記し置。

地のあつき天の高さをあかぬ山雲より上にのほりてぞしる

言わかぬ荒蝦夷人の住さとにあかぬ妹背の山もありける

偖小使エコレに明日瀑布を一見せんことを謀るに、幸此處に小舟の有る由、是にて岸に傍て瀑布に至り、其より四島を巡り來らんと語りぬ、先其行は一章の拙文に譲り置ぬ。

念八日快晴、將到阿寒瀑布、首長惠古禮、棹小舟待余、南行五十丁、繋舟於赤壁下、亦行卅丁、而巍然巉岩也、俯視石潭、其深不知幾仞、悍怒鬪激、岸勢犬牙差互、巨木掩日、瀑布懸、横互大凡五十尋、高三百尋、狀如白龍下垂、或化珠玉、或起雲烟、千態萬狀、彷彿於那智、而幾倍於華嚴、衣露髮堅膚栗、不能久留、賦國歌書木皮、歌云

余今春遊那智量其瀑布高百四十間比阿寒未知如此　老鐵

いつまでもながめは盡じあかぬ山妹背の中に落る瀧津瀬

山姫のさらせる布もふるければ妹が白髮と我こそはみめ

亦棹舟、遶四島而歸、日已申、余自幼好遊、盡大八洲、終到蝦夷唐太、未見如此瀑布、使之在近畿、則貴游之士續々不絶、今僻在玆土、不有一人識者、何造物者之慳吝耶、抑瀑布之不幸也、世之類此者多可歎哉

水面風收夕照間、小舟撑棹沿崖還、忽落銀峯千仞影、是吾昨日所攀山、

土人ヲヘライペと云ふ長四尺斗の魚を持來りぬ。此魚當所にあるのみのよし、其餘桃花魚、鯇、牡父魚、小海老、鮭等また他に無物にてカハツ、チエツフ、シユリヲポ等言もの有のみなり。

又溫泉より南火坑の岸其深五六尋の底に一種の白岩あり、土人潛り入鉞にて斫り來り凹に作り火鉢になす、敲けは磬の聲有、依て鏗々石と号、先公料の時好事の士、火器に作り愛玩せしとかや。

廿九日未明發レ程湖邊に傍てヲヘウンヘ（小川）カハチセフンナイ（小川）キナチヤウシ（小川）シュルクヲマナイ（從ヌー試り）惣て燒砂濱、此邊湖の北に當る。是より澤傳ひ上るに椴木森々とし、倒れたるを跨ぎ、橫れるを潛り行に、雪深く山險にし辷れり。午頃ニ成るや雪和らかに成、足踏込てはか取難し。エコレ先に立て所々の大木の鉞目を認て上る（凡貳里）。山の嶺に出る茅野有、四顧するに心目瞭然として夜の明たる心地す。西の方雌岳つゞきユウタニ岳とて一大岳を見初む。又五丁許過椴原に入り、雪路なる故雪猶凍れり、谷間に下る　ホリカアハシリ（アハシリ水源）、ユウタニヘツ（小川）、キリキンナイ（小川）等過て止宿す。

假屋の作り樣他所に異なり棟作り也。椴皮を以て葺に土人等是を剝こと速なる也。先大木の根と五六尺上の所に闌りと鉈目を入、下より篦もて剝ぐに、能く放る物也。是を以て蔽ひ、また數物にもす。然れば冬の間は木凍るが故に剝惡きと也。此比は水氣滿るが故よろしきよし、また一首を其皮のうらへしるし置ぬ。

　岩根踏野原しの原分け來にし身も荒熊の心地こそすれ

晦日未明より微雨、川まゝ下る。ワヽウシ（淺瀨）、ユッハヲマナイ（小川）、キヽレ（小川）ケミチヤフ（小川）、下るに順て川も太くなり、雨もます〳〵甚し。午後チヌケフ（四里）なる我が召連のエコレの家ヱ着しぬ。此邊惣て採木もて火を出しぬ、甚不自由なれど古風は愛すべき者也。川々水増せし故、梁にてチライ數十頭を獲ぬ。

四月朔日快霽東岸に越る、チヤシコツと云有。三丁計の土手恰も城郭の如し。是を問ふにトウジンカモイ（唐人神）の城跡と云。又其邊に一丈五六尺位ヅヽの穴多し、コロコタンリル（小人僕）の家跡なりと。惣て此邊土人の言傳えに昔は小人が住しと云事を傳ふ。此穴恐らくは小人ならで古人の穴居跡かと思ふ、如何にも其大さ今北蝦夷なる穴居（トイチセ）の大さに類せり。昔しは按ずるに本蝦夷も穴居ならん、我始に北蝦夷に遊行し時は（弘化丙午）クシユンコタン邊惣て穴居なりしが、今度見るに（安政丙辰）半は止みたり。纔十年の間に如此風俗も氣候も改る事、實に造物者の然らしむると感じツヽ過るや、大なる樺（カバ）の倒れたる根に木幣（イナヲ）を立その側に異形の鍋あり。去年此樹倒れし時根より出たりと、其時は全かりしが日増に底の方より損しけると語りぬ。是堀鎭臺カラフトにて得給ひし土鍋と同じ形也。依て久摺え持行鎭守社ヱ納め置は如何やらんと問ふに　一同尤の由答ふるに、大切に背負しめ下り、後土人是を村垣（ムラカキ）鎭臺に奉しかば、深く愛し玉ひ、土人等へ多くの酒米木綿等を賜ひ、余に歌「いつか世に誰がすみ捨し跡なれや蝦夷の深山に殘るうつわは」と一首を賜わりぬ。偖トレフタウシ（小川）、テレケシナイ（小川）等越て西岸に渡り、タツコフえ着（四り）。

人家四軒（ムンコモツ、ヘケル、ヘノタク、シノシンカ）一々手當遣し、又茅野しばし過（一り余）、カツクミ是處にも四軒（チランケアイノ、コトハク、シラツテレユ、トノツネカラ）偖こゝにてチヤカツケと云老婆に逢しが、行年何程ともしらず。久摺のセンタワケ（乙名）は當年八十三才なるが、未だ渾（レンドシ）をも結ざる時に我は子を産り。モンカミ（最上）、カニカサ（近藤）の殿達も同じ位の年也。間宮樣は我より餘程若し等話せり。推考す

るに最早百余才と思はる。實に珍敷老婆なれば、單物(ヒトヘ)一枚を遣し、猶喜多野殿は能く土人の事を世話しらるる故に、手當等下さる様に願遣はすべしと申聞し、又東岸に越、楡柏原下は小笹のみの所、一條の鹿道を認て行（此間四り）。イリ、フシ（小山）、イクシナコツ（小川）過、シヤリ岳、トヱトクシペノホリ等を見過、ビホロ川端へ下る。人家六軒（シユイヘリキン、シユケテキ、ヤミ〳〵、シユナンコロ、ヨシキ、アヘキツ）有、其シユイヘリキンと云は、餘程の老年なるが、メナシ亂（寛政元酉年）の時にも出たりとて、其話しを致しぬ。惣て山住には八十余才の者は多く有と、手當等遣したるに、我が笠の破たるを見て、自ら作りし笠を吳たり。依て問ふに蝦夷人等は雨降ても笠をも用ひざるが風俗かと思ひしが、笠も有るやと云に、答けるは、いかに我等とて、雨に濡れ、雪にかゝりて快もあらされば、昔より蓑笠も有るなり。されど其を作る暇無故に、雨雪にかゝりて歩行事なり。我は山住なれば、暇有る故に、作りて用ゆとて、又楡皮もて編し蓑を見せけるが、頗る面白き物なり。其心切實に感ずるに堪たり。

二日是よりヤミ〳〵を案内に召連、茅野山を越て（凡貳里）ニマンヘツ（川巾五間斗）クスリ舍利の境なり、又山に上り、ルウサン、トイタコダン等を越て、モコトウ（從ニマンヘツ凡五り）の上に出る、此沼周り凡三里、西岸また下り海岸に出。人家五軒有。アフニといへる老婆の方に宿しけるに、我等山より出し故喰物が無と思ひ、子供等大勢を沼に遣し、蜆(シジミ)(ヘシクロセイ)を取て一同を饗しぬ。夕方大なる鹿を小田井打獲たり。其婆我を世話致し吳る事實ニ感じぬ。

シユト　長貳尺餘り

木にて作り歯を附し物
土人等喧嘩の時に用ゆ

シトケリ

樺皮もて作りしもの也

カニチシユケニ

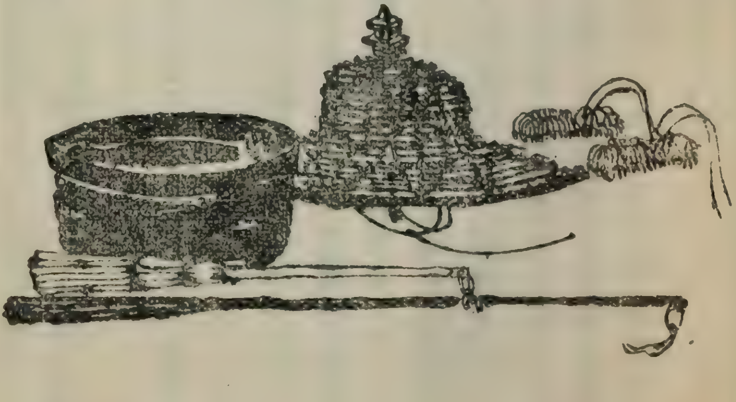
往古蝦夷人合戰の時に用ひし由、鐵にて長三四尺に作り
重廿七八貫目もあるなり

古鍋　深六寸巾九寸圓のごさし

地鐵にて厚かりし由なり今は腐鏽にて
只其形のみを存す

笠

柳を削り是を麻にて
編みし物也。其上へ鯨の
髭を附、力をもたすなり



三日黎明出レ宿汐干にて歩至る輕し。海鰌(ウミドジヤウ／ワンヘトツボ)の干瀉に居るを拾ふ。午比舍利に着（七り）、結合宮崎某に談じ、摩周、西別の兩岳より久摺川筋テシカ、迄の糧米、日數六日と積り、一人一日貳合五勺に當、其餘は獲物を喰さんと、貳斗五升五合に、別用意米貳斗を請取用意す。

四日會所よりワツカウイの普請にとて土人の上りけるをも同道し、夜カモイノミウシヒラに宿す。此所通行屋有ども人無し（六里）。

五日山中追々雪を見る、夜ワツカウイ江宿す（六り）。扨當所は何樣なる快晴にても和人だに通らば雨降る由聞けるを疑ひしに、夜に入、降來りぬ。余は三度通りて三度とも雨に逢しが奇と云べき事也。土人の言に、此所の山靈は和人が嫌(キラヒ)なりと言傳ふよし。通行やの少し上に舍利川の源とて水の湧所有也。

六日未だ暗きに、氷雪の上を上る（一り）。ルウチシを過（貳十丁）、ヲタウニに到る。此處にて土人牛を直に西別に遣し、余は一宿の糧のみを持て、西別岳の北なるホンケネカの水源傳ひ上り、小笹原江拾余丁過て椴原に入（三十丁）行や、山愈峻數成五六丁上り樺原に出る、則是マシウ岳の北の肩也。右の方に舍利の海岸を見、左の方眼下に湖を見る。其より西に廻り、南に向ふや、都て雷盆(スリバチ)の緣を廻(メグル)が如し。周廻江七里余、緣より水際迄凡三百尋、底深くして藍の如し。此湖水水口無して、湖底より水潜りて西別の源に通ずと。實に如此思わるは、百日の旱(ヒデリ)にも減ぜず、また梅雨雪融の時も增さゞりしとかや。

扨南方より神岳(カモイノホリ)の巓に上らんと欲るに、樺木枝を接え五鬣松(ゴヤウマツ)、石楠花(シヤクナギ)岩を粲ひ其間は丹赭青綠を塗抹(トマツ)せし

如き奇岩怪石簇々と重り攀んと爲や、犖确たる礁石磊々として落如何共爲難し、俯匐して登るや、右の方は恰も劍を立る如き所、左の方直立千仞の岩根、碧水溶々目眩して眺み難し。往昔乙名メンカリシの曾祖父（タサニシ）此所にて年經たる豪羆を射けるや、斃れて湖中に落ち、後西別へ流れ行しと。其箭の太きを以て久摺の首長が射る處と知て、ネモロより贈り來りしと。依て湖水は西別の源へ潛通する事疑無と言傳ふ。余案ずる其熊の地底を潛りて西別の源へ出しは扨置、水の潛通する事はいかにもと思はれたり。

扨山八分に及ぶや、岩落石崩れて如何とも頂上までは難しと思しかば、否を土人に問ふ。土人答て言ふは、昔より此頂上へ登りし者一人もなし、然るにニシハ君は先に立て登るが故に、我らも附從へり、と云に驚き、我は土人等が附從來る故に攀るに宜敷と思ひ、登り來りしなり。登り難き所ならば我らも早く余に告べしと一笑し、下らんとする哉、一人余に代りて先に立、俯匐して登る事又三四百歩、馬の背共云て劍鈋の如き所を過、胎內潛りとも云纔の岩の間を潛り、種々目覺しき險を渉り、嶺に至り四顧せんとすれども、如何にも身戰て目留難し。寒風肌を砭すれども汗衣を濡せり。東の方へ下り見るや、手足惣て血染り、股引脚巾皆裂れ見る樣なし。小憩して始て膽掉股慄し手足の疵の痛を覺ゆ。扨是より十余丁にて西別ルチシと云に出る。

左の方湖邊を指さして下る（凡八丁）、是神岳の東の方なり。ヨウロシと云るなり。

此處神岳の山根高數千仞掌を立し如く、土人木幣を作り立て拜す。少の磯は岸皆赭石の礁たるなり。依て其水邊淺き所は血を流せしが如し（三丁）。行てホロ洞とて大岩窟の高一丈に巾貳丈も有、入る事五六間にて又

讀
多氣志樓主
人文摺日誌
七里澄湖
擁縴
崟摩周山
時勢
龍蟠洞熱

欲吼
斜陽際讀
於那
邊膽氣寒
南華稿
敎育書
竹四郎圖

内廣く二ッに分れ其奥に幽邃にして知り難し。是を雌雄の神と云。土人等の納る所のヱナオ簇々と立たり。其岩皆赭石の如く、障れは衣服皆赤に染めり。湖中一ッの立石有、カモイシユマ（神岩）と言り。夕方湖面を眺望せしに、岸を隔つ事十余丁にて、大さ箕（ミノ）の如き黒き頭を上て口を開けるが、頤（イチウ）中恰も丹朱を含る如く、夕陽に映ずるや金烏（ヒ）の東海に泛が如く、其光赫々として水に映ずるに、土人は少しも是に驚かず、神魚（カモイチエツフ）と云り。此湖中此魚斗にて他の魚なしと。是何時より住るやを知らず。時々頭を上る由、其小さき物岸に寄る事有と。依て飯粒を投じたれば、鯇様の小魚多く群来りける。此魚白沼シコツ沼にもあり。また余は南部の十灣山（トワドサン）の湖にても一度見たるがそれと同物と思ふ。扨余は其大魚の巨口に恐れ、夜も寐る事能わざりしかば、ふと一首を得て岩面に誌るし置に

　ゆたかにも岩がね枕まきてしるこれぞゆるがぬ御代のためしと

七日未だ洞中の暗（クラヤ）に出れば早五ツ過也。木立を上り（十丁）峯傳ひ艮（ウシトラ）の方に指て（一り余）西別岳の西に到り、是より上る（十七八丁）、所々五鬣松地を匍匐して百間貳百間青氈を敷たる如く、實に目覺しくぞ有り。谷間〳〵は未だ雪に埋れたり（貳十余丁）。上る哉巨石怪巖突兀たり。辛じて巓に到るや、舍利岳と對峙し、續て東（メナシ）の山々を望み、海を阻てクナシリ、南にネモロ灣、シコタンの諸島一々是を算ふるに宜し。假山の南東凡五十丁斗にて谷間に下り、又半里計にて西別の水源に到る。此所周廻貳百間余の池にて周り皆怪岩池底白砂塵なくして深さ纔に一尋位。底より清水沸々と噴出し、是摩周の水の潜通する處なり。清潔に

て少く溫めり。鮢鱗一面に浮游す。水口纔貳間斗瀧の如くに成落る。兩方より差出したる岩の樣は獅子飛象が鼻とも言べき處也。此邊雜木原笹木賊接り、赤箭天麻斑杖根また赤沼蘭多し。是土人の喰料に宜し内に記す。

喜任常に憾む和蘭船來の藥品に沙列布と言物有、是「ヲルキスモリオ」といふ艸の根なり。糸を以て串穿乾かして來る。烹熟すれば葛粉の如き粘液となり、乳汁の不足なる小兒不食の病客に與て滋養の大効あり。勞瘵　咳嗽　泄瀉　痢病等に欠べからざるの藥なり。這般松浦氏のクスリ領にて此奇藥を採り得たるは、予が輩の大幸のみならず、實に　皇朝の一大國益といふなり。

流に傍て（五六丁）下るシュンクシナイ、ヲショウシナイ等左右に小河有、岸に久摺土人の秋味を取り冬に到りて鷲をとる庵と言物有、惣て此邊熊鷲の多きは鮭魚多きに依てなりと、夜此所に宿す。

八日微雨、是より以下メンブツ、ライクンナイ、シ、ヤモコタン處々の庵を一々見物し、ネモロ領境シカルンナイに到り宿す。此邊十三四間にも成りたり（凡此間七り）。鷲の多きに附てふと

雲つかむ鷲の羽音に朝出せん鳥が音も無里の假寐は

九日シカルンナイ傳ひ上り、チライウンナイ、コエタフケ等過、木原鹿道宜し所々にて其群に逢しかば徒然に一首を口遊む

吹こむる胡沙踏分て奥山に啼ぬもあわれ妻乞の鹿

ウラエウレ岳
シスリ岳
トウモシリ

聞說九磨湖、一一
疑鬼設巧哉造物
者、到此逞詭譎每
向日淪際有火騰
巖穴、始如金蛇掣、
終如燎原烈光燄
長萬丈、可以察毫
髮、松生膽何大、目
擊記顛末、燭陰與
燭龍、奇觀莫或軼
一部山海經倩汝
補遺缺、
毅堂學人鷲津宣題
梧樓原恭書

夕方久摺川の邊テシカヽに出る（凡六里）。此所人家八軒（小使タンコアニ、コロマシクハ、コワヌカル、ユツコトアイノ、テシケレ、シユテリレ婆、トサンラク）粮米の事を問ふに、未だ上らざる由、一同に當惑し用意の米も有れども極老子供の手當いかゞ共成難くと、土人貳人をシベツチヤ迄見せに下げ若道にて逢はば急ぎ持來る樣申付遣しぬ。

十日曇天靄深きにコロコを案内に召連西岸に渡り貳三丁上るや、川岸に溫泉有、其所ヱ鹿多く群り泥を喰ひ居たりけるが、能く其を見ればチエトイ（食土）なり。故に其土の喰方を、土人に教しかば、一人の老人が言に、如何にも往昔は此土を喰たる事有由申ぬ。過て細道を行や、タツタラケ（平）メモロ（小川）ヒハヲロ（小川）等云を過、クツチヤロ（凡六り）に着す。

此處湖の口也。人家貳軒（ハトンルエ、セクワシヌ）東岸に越て七軒（小使エタツホロ、イソリツカラ、カムチシヤニ、エホクアイノ、ヲタサンケ、ヤルシユツ、ウエンサラコメノコ）湖水に枕て家居し、風景言ん方なし。其邊梁柵（ウラエ）を多く掛たり。然るに去年は秋味不獵にし、また當春はヲヘライベ、ヲツトイ、シユリヲボ等言る魚も至て不足なり。實に饑饉（ケカチ）なりとて老人子供等も菜色をなし居けるに、粮米は不レ來、糧穀は最早四五升になるに、惣勢九人に集り來る。當所の土人等三十餘人なる故せん方無、大鍋もて粥を炊かし、是に危用の稗貳合斗を入て、一同に振舞ぬ。召連の者は漁に遣し、小田井は鐵炮もて小使と共に山に到りぬ。實に心細くぞ有ける。

ともしする荒血雄蝦夷は曉の別は宵の床にぞざ（〇ぞ衍カざあカ）りける

十一日未明に土人等歸り來れども其獲物一日の食にも足らず、如何と按ずる間に、又一同を今日も漁に遣し、我等は小使エタツホロを召連、小舟を命じて岸に沿て東江行ことしばし、ふと思ひ當りければ

　汐ならぬ久壽里の湖に舟うけて身も若がへるこゝちこそすれ

等口遊み、コムネサンケ、フッタイ等言を過、東に到り（三十丁）て溫泉に到る、巾貳十余間の池湖傍に有、底は盤石其間より溫泉噴出せり。爰にも楡皮を多く浸しぬ。其所に水乞鳥一羽居れり。名を問ふに當所にてもヲユ、ケといへりと、此邊には多き由なり。

　久壽里のいで湯やあつからん水乞鳥の水乞てなく

同じく東より北に向ひトサムシへ（小川）チカフントウ（小沼）過て、思ふに此湖水を惣て廻らば凡二日（二十里）も懸るべし、依て直にトウモシリ（沼島）に遣らんと掉出る、凡貳里斗にて着。此島凡周り壹り、岸皆壁立、椴木陰森、北面少しの淵有。また西に向ひ三十丁斗遣りて西岸ヲヤコツモシリに着す（周貳十丁斗）。是も椴木立周回赤壁、東向に一ッの火坑有、常に燃て黑焰噴出し、其響遠きに聞ゆ。岸に船を寄せよと言へ共土人恐れてよせず。強て其十余間脇江寄せ、深林の中より望むに、心目眩掉須臾も留り難し。歸らんとするや、西風吹起り、波浪逆立、一葦の小舟いかんとも成難きに、其火坑の傍に坐し風の止むを待に、小使の云るは、湖水の波は海と異にして、風起るや直に浪立、止む時は又直

に静れり。海は風雨の後一兩日を過て、洪濤起り來ると語りけるが、如何にも思ひ當りぬ。如此する間に日も暮懸るや、彼の焰はます／＼照り耀き、我等の面に映じ、偖六つ過と思ふや、光り湖面に距り、左ながら晝の如し。此のごとく酸苦の中に、また此樂有るかと眺る間に、何時か風波は靜り、水上砥の如くに成りけるが、今は小使の言に不違を感じ、掉出朧氣に上る月影にてクッチヤロ江着しぬ。

夏の夜は胡沙吹こめし朧夜のおほろのまゝにしらみ初けり

十二日小使の言に、此處にて取らずんば是より下は梁も無ればと勸むるに、一同今日も漁に遣わせしが、如何にも其獲る所は皆喰盡す故、只工風にせん方なく、粮米のみを待詫たり。

十三日今日にて三日獸魚の肉と草根にて凌ぎけるが、工風も盡果ければ、何れ手當品は下より上せ遣はすべしと、先單物を一枚解き、是を一尺斗ヅヽに切、それと糸針を土人江配分して出立せんとすれども、食粮無故に如何はと、小田井懷中より一歩銀一ッを出し、若干魚の貯が有らば買度由乞けるに、村の者一向に取敢ず。金銀にて買るが有様の事ならば何で差上ざるやと言ける故、余又一ッの工風を凝し、頁鈕服輪の古錢一枚を渡し、是にて何程なり共干魚は有まじやと竊に小使に賴みしかば、一背負の魚を持來り、我に與えけるに、倍々彼等か通用の金銀をも寶と思はず、一枚の古錢を愛玩する其質朴に深く感じぬ。扨是を歸途の粮食と定め、我々は舟にて下らんと小舟にて出る。屈曲たる河水今鵡首南に向しと思ふに、直に東に向ひ北に轉じ、西に向ひぬ。

一頻り／＼に降來る雨は暮かけて雪となり、舟中には早三寸も積りぬ也。夜テシカ、に宿したるに、更るまま爐の火も消しかば、いかにも寒く寐難きに、起出し見たりしかば、十三夜の月雲間に洩出る影に能く見れば、庭に一本の櫻の有けるが、今を盛りと咲けるに、雪時々降來るさま、實に異郷の趣をぞなしぬまゝ、又一首を戯たり。

さえわたる月に起出て眺れば花吹まぜて淡雪ぞふる

十四日是より川は流木にて舟通じ難きが故一同陸行し、四ツ過クマウシに着（四り）、此處人家有（ハケノカラ）。また西岸へ渡り山の腰を下るに穴居跡多し。是皆小人の家跡と云り。七ツ頃にシヘツチヤに着（四里）。

此所半破れたる漁小屋と板くらの有けるが、見れば傍に此間粮米を見下げし土人と　濱より糧米を持來りし土人と四人、其品を藏へ入鎖を卸て番をなし居たるに一同仰天し、一度は何故に川上に持來らざる哉と怒り、一度は悦び嘗笑ひ、且歎し、其鎖を明んとせしかば、其戸破れて板の間より潜り入るに宜敷、依て其際より引出し見るに、烟草味噌米共に十分なりしかば、先今宵は五日振の事なればとて、三升を炊かし、飽まで喰ひ、予は小屋に入寐しに、土人等は焦附の飯の湯を酒に撫え汲かわし、古樽の底打敲き、此國風流のユウカリを謡ひ、夜更る迄樂ける故、ふと目を覺し戸を細目に明て見れば、我もよと手持て引出し、一座に連ね、何なりとも和人風流を一ツと乞ふに、此一首を思ひ得

えみし等が久壽里の水を汲かはし心よげにも腹皷うつ

と謡ふて一同の責をふせぎしも後の笑草とも成けるなり。

十五日我等は舟にて下り、半は陸行させけるに、急流矢よりも疾し、西岸雑木立エムシヲマナイ、ホントウ、モウセウシナイ此邊に出るや、左右に鹿多し。小田井鉄炮の支度して下るに、石狩にて見たるキサラウシチカプと云て冑毛の有る白き鳥多く啼て居たり。土人に問ふに當所にてはウリルイと言とかや。小田井見るや覘ふ間も無放つに、不過胴中を打たり。拾て見るに白きと思ひしが左は無、羽毛皆斑文有。余深く是を愛玩し下るや、又先に鹿一群に切て放つ、鹿は打れながら驅去る。上陸して見るに其邊り腥血滴りける。此方彼方叢を分て探し求むれども終に見當らず。空く舟に歸れば、今のウリルイは多くの烏寄り來り啖散して跡に羽毛のみ殘りけり。其殘念如何とも爲べき樣なく、又下るや、フシコケウニ、チヤシコツ此處また一ッの城跡有て穴屋跡多しと、過て八つ比にシラリウトルトウに到る。此沼廻り凡七里位とかや。過て五六丁にして（凡七里）、トウロに着す。此所人家十六軒（ケンルカウス、サンシロウ、タンカマレ、シケビタ、トミクサ、シタヒカン、コトロミナ、シヤレヌシ、イカシテカ、ムシンラク、チヤロニシバ、モロク、ニセサン、トヒヤリカ、イクタラ、シリカントク）沼口を入りて四五丁蘆荻原の上なる岡に家し、湖中を眺望して風景よろし家々に、巾五六尺位の蒲にて織りし席を敷しが、至極愛すべき物なり。此村の名物となす由、湖は廻り凡十三四里にして、アツケシ領ヘカンベウシの後ろ迄到り、フウレンの川と背向すとかや。今夜は十

分に村の者にも手當して寐たり。
十六日掉下るや、ウインヌタフ、マリンヘツ、ヲロルイウイ等を過、九ツ頃に右の方セチリプト(巾凡廿間)江下る。此邊惣て平地にして茅原なる故、雌岳雄岳能く見へ、また一里も下るや、右アカンフト(巾凡五十間)、左りにホロチヤシコツ、是は當所の乙名メンカリシの先祖ヲニシトムシの城跡なりと。其邊り種々の土器を堀得る事有と。過て(十七八丁)ヌサウシに着し、會所元へ到る。
然るに喜多野氏も幸に滯留有し故、山中極老(チヤカツケ婆シコイヘリキン)の手當幷に召連土人江手當物、別てもナイホソは役土人代りの事故、土産取役をと乞けるに、其等の事皆取計與られ、其褒美は順等を附、能く働しは鍋古着鉈（タシロ）等、蕩子（ノラモノ）は山鉈（タシロ）に渾（レハ）烟草等と其賞を輕くし、先一柄の幣を作り是を鎭守社の前に建、一同の者に越釀（エチコザケ）一樽を與え、貳十餘日の無恙を祝さしめ、余も一盞を喫し、一絕を神前の柱に誌るし置ぬも後の笑の種と、此山踏（ヤマフミ）せんと思ふ人の柴筰（ツエ）とぞ思ひける也。

風餐雨臥了吾願、偏喜蠻荒齎命還、木幣削來祝蘇胞、雲間遙拜亞寒山、

久摺日誌　終

以毛止三年都之婆以止不
左武遊羅乃千鳥乃奴止之可
流之幾能波乃弖芦乃毛之波
之止毛時乃河禮八要川流邊
散藤濃乃花乃毛計流鶯乃
数毛乃久尓吾乃毛比志乃比世

まふて里比大悪念便宜乃も
者りそ文勘らしいあれ誤の今杉に
河ら乃きもとおりおもし鞘たまる
う歓觀を除く在世当來一切
砂すいてまへおとあ法浮ゆう
わらもぬ誤り帯使杉濟民子

くも難き世をはなれ夢許せ行う
さきえて山川海陸乃くらとての
こ法め一明をくおぼしあめ風もの
ひうあくし言覚物乃大九ら眼め
けきうい乃古ま山にはま乃礼
よそを礼理を乃ら現いとうの也

古乃に遷まつゝ八ち於ゝめ人の俗
味能斯る字詞ハすゑて多くもゝ爾ゐ
躬にゝ以ゝ思ひ乃手くゝ又此せゝ
謂ゝ俗那の世新雅ハたゝ以
まゝ此節回卯ゝなつゝにる涼ま
詞乃拙まとよもにゝ汚しろく是此

有れ文乃以郎しゆきにきしを
おとろむは学きをと讀みなむ
よのむかしをとろうき外れいろ、
いでむも事須詩此じゃ見め
は月夕にい文辞みしへま用ひ
あをしむて附ずよりはとなり

うつろふゆけるかゝ出木れ
もとゝとゝよ文久元年二
月十五日　穂積重胤

東西蝦夷山川
地理取調記行

納紗布日誌

多氣志樓藏板

凡例

一納紗布（従ネモロ會所五里廿五丁）とはノツは崎、シヤムとは側また蔭にも通じて則ち岬の側と云儀也。往昔は厚消（去箱館百五十七り、持場三十里三丁）より根諸（去箱館百七十八里、持場沿海六十里十三丁）まで惣て海岸通りにて陸路なかりしが、今の路（文化五辰年）切開てよりは、南海岸通行の者なければ、自然風土の大意を知る人も絶え、地名も訛り、其譯も知ず成行ん事を鎭將深く惜み玉ひ、余をして其地を踏編なさしめ給ふに依て、安政五年（戊午）四月廿日厚消にて舟を雇ひ、キイタツプ（地名）に廻り、是より陸路まゝハナサキ、納紗布等を巡りて廿五日根室に着し、ノツシヤフ誌三巻を著し函館府に納む今其要を摘し一巻とし、此名を冠らしむる者也。

一此巻の書振地名を審し其譯を委にするを主とす、依て文體別冗雜に及ぶも有、また同名の所も多し。是は譯を略せり。閲者熟考なし給はん事を、別ても

大(ホロ)　小(ポン)　川(ペツ)　澤(トイ)　灣(ムイ)　岬(ノツ)（またエンルン）岳(ノホリ)　所(コタン)　平(ヒラ)　有(ウシ)　無(シヤム)　岩(シユマ)　石(シラヽ)　沼(トウ)

等の字多し、惣て其譯字を省け共、敢て余が疎漏となし給ふべからん事を。

一譯のうち草木鳥魚等は未だ考を盡さゞる者多し。他日蝦夷山海名產圖會（近刻）蝦夷救荒誌（近刻）蝦夷訓蒙圖彙（近刻）等ニ諸名家の審考を以て誌るし置ぬ。それらの事は只此書に其二三を記るし、近刻の三部

に譲り置ものなり、志士此地の事を審に成給はんとの意有らば、原稿三巻を熟讀なし玉はん事を希ふのみ。

萬延元庚申冬於下谷二長町金毘羅の門前靈驗著明處　　源　弘誌

戊午納紗布日誌

伊勢　松浦竹四郎　著

東邊扼喉之要險、北門鎖鑰之樞港、厚岸爲第一泊津矣（下略鎭守社額裏文）と其港南面して（東西二り、南北三り）センポウシ（クスリ領）と對し、港口二島有て船舶を容るに宜し。

海山のけしきすゞしき此浦を誰があつけしと名づけ始けん

厚岸は今場所の惣名と成ども、本地の所は澗の北岸に在也。其譯土人が衣服になす木皮を剝に多しとの儀にて、本名アツニケウシ（アツニは楡、ケは皮剝、ウシ多し也）其樹は楡（菩提樹一種）の類にて（信州うはねれ、松前おひやう）是恐らくは勾芒木皮可ㇾ績爲ㇾ布出二陸川縣一（大明一統誌）草木可ㇾ衣者曰二卉服一績二其皮一者有二勾芒布紅蕉布弱錫一（明廠湛若水雅）勾芒木其皮可ㇾ績爲ㇾ布（粤西偶記）に當るや何ん今會所（通行屋、勤番所、制札、備米藏、合藥藏、船藏、鍛冶屋、大工小屋、廐、板藏九棟、茅藏三棟）の有る地は（西向）本名ヌサウシ（トマリとも云、船舶の義也）と云て、土人山海の神に奉る。イナヲ（エナホともいふ）とて御掛を多く立し所也。ヌサは幣ウシは多し、ヌサ和語なるに、此地に殘る事奇とすべし。諏訪終記（第四）にも木を削り幣帛の如くにして犬に向て詛呪の躰有等有て、惣て本邦の幣帛に異る事なし。また蝦夷圖說にイナホと稱し、ヌシヤと稱し、此二ツの言葉未定と雖も、イナホは稻穗の轉語成べし。本邦關東の

農家にて正月十五日質白成木もて稲穂の形作り糞壤に建(俗云こひ塚) 五穀豊饒の祈り、是をイナホと稱す。此事いかにも大古の遺風と見たれ。さらば此事の轉じ傳りてイナホとイナヲと訛り稱るや。またヌシヤと云る事は取もなをさずヌサの轉語にして、大麻の事成べし。此稲穂と大麻の二ツは本邦にしても今の世に及では形も變り、事も同じからぬ樣に思ひなさるれど、何れも天地の神を祭るが爲に設る物にて、其用ゆる意は同じく、今の幣帛也。今は紙麻を用ゆれども、上古の時、紙麻等の流布爲ざりし時は木のみもて製せし事有けんも知らず(下略) 稲穂を神に供ふる事無にしもあらず、今初穂と云も初穂を奉りしこと明らけし。此遺製北越の祝木(お祝棒と云、柄に鍋鍋を縮く) 羽州にほいたけ棒(又祝儀棒) 美濃にて削掛(年中故事要言) 武江に正月十五日の削掛等、皆紙麻無時の遺風と思はる。また夫につけて(萬葉卷十四、三左) 筑波禰尓。由伎可母布良留。伊奈乎可母。加奈思吉兒呂我尓努保佐流可母。又 安比見氏波。千等世夜伊奴流伊奈乎加母安礼也思加毛布伎美末知我氏尓等有に、黒河氏(春村) 曰、此イナヲを蝦夷地に云ふイナヲと同語と云説有は強説なり。按ふに彼地のイナヲは祈麻の義なるべし。蝦夷嶋説に稲穂の轉訛といへるはいまだしき説也。(因に云。緒をヲと呼ぶは緒の義にて實に和名なり。又アサといふは異名にて學に績むとか、叉の義なり) 又幣をシテと呼ぶは麻ヲシタラシたるが名目になれるなり。(木綿は楮にて是も麻の一種なり。木綿を布に織たる即タフ也) といへり。此地所々に同名有。(ヌサウシ、ヌサシヤン、エナヲウシ等惣て同意也) 土産鮭鱒鰯鯡こまゐ昆布きうり鯡鮫布海苔椎茸臨皮鷲羽、また尺餘の牡蠣厚朴等夷地第一の品也。土人昔は多し、近

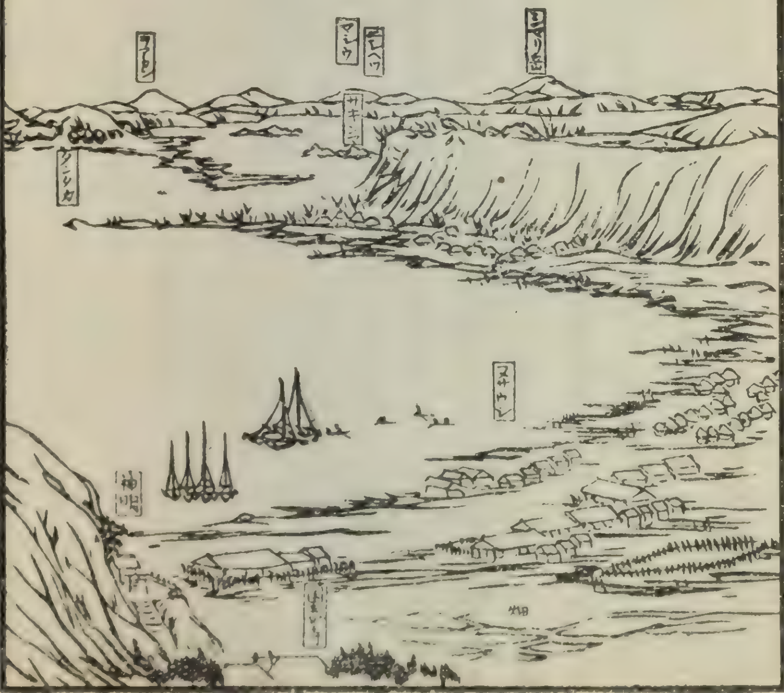
平地

頃大に減たり。（文化六巳年改百七十七軒八百七十四人、文政壬午年改百六十四軒八百〇四人、安政丙辰改五十三軒二百十七人）并て景運山國泰寺（臨濟宗五山末寺、本尊釋加如來箔佛、長サ壹尺九寸、坐像後光九重坐）享和二年有命て建立、文化元子年五月入佛供養開基文翁和尚（萬全、靈雲、僊叟、文通、香圃、眞洲、香山等なり）今は世に及べり（御手當百俵十人扶持金四十八兩）此邊畑多く開き有たり。上に石階數級を上りて

　はるかなる此島かげにいかにして鷲の山風ふきかよひけん

神明社（寛政三戌年最上常矩建立、同十年九月十七日近藤守重修理之）相殿稲荷辨天傍に龍王の祀有、寶前額誠信二大字（文化六年季夏高橋源久平謹書）有、下に礮台を置て馬頭の非常に備ふ。此山をハラサン（丸山）と云、其巓遍平なる故に号とかや。名義魚棚の義也。近比竹潭君（喜多野某）是に道を開き、一箇の木牌を建らる。（綴螺山、夷言取魚棚之義、蓋謂山頂偏平也、其地臨熱消灣、西望阿漢舍利諸山、紫翠如新沐、與波光映帶眞勝也、初喜多野竹潭臨此地也、以私費多募夷民、剪草萊闢榛蕪、造磴道千餘級、以使登覽夷民等樂爲之不日而成（下略））其眺望筆の及ぶ所にあらず。余是より南岸廻りの事を謀に、キイタプ迄の間チロフ（大沼口）モチロフ（小沼口）二ツの沼あり、其口越難きが故に舟にて行玉へとて其支度をなし、庄屋酒六（シヤケロク）年寄金太郎（クマキツ）酉松岩吉（共に歸俗）等皆髮㨾（ハツヤウ）言語も皇國風流に成て有り、此酒六と云は十余年前に父サンケドモなる者山にて熊に取られしを、弟三十郎と兩人にて妻子に生前の離杯取かわ

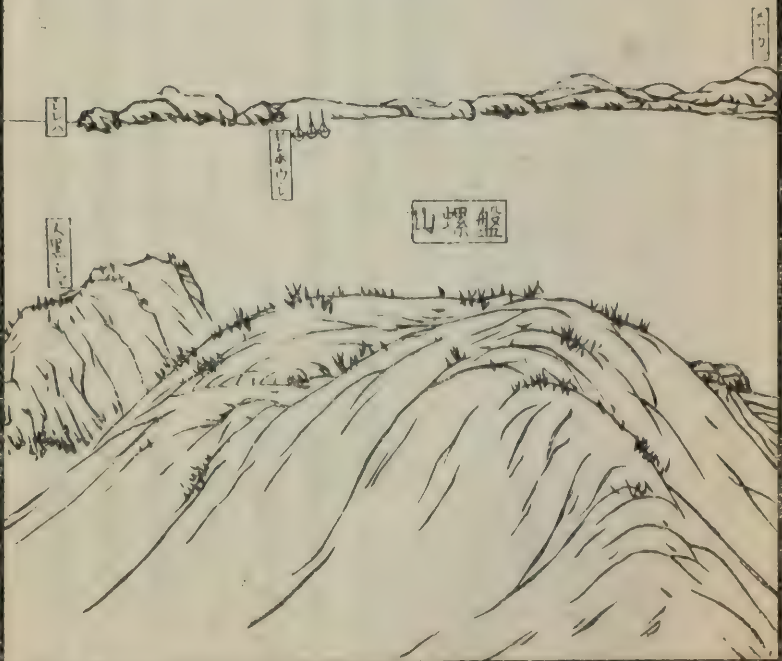
蜻蜓洲盡處、孤島別
乾坤、天度雖稍異、可
以充北藩、環海魚鰕
富、連山草木蕃、竭此
山海利、要地足築歟、
毛人頗强健、茅屋自
成村、裸體棹小艇、不
敢畏寒喧、撫育得其
法、可以補兵屯、惜哉
季世弊、曾無一定論、



貫堅圖其利、空勞志
士魂、惟我有所見、建
策陳迂言、非速改舊
習、全島豈保存、偏恐
千歲後、或為鯨鯢呑、

丙辰初巡視
有感作

内山良隆



し、敵の熊を打取るまで再び山を出まじと誓て山に入、數日其熊を尋、終に讐を報て腹を裂（サキ）、肉を屠りしかば、腸中に未だ親の鬚髭の有しを持歸りて其を埋め、厚く野葬の例を營し聞え有、豪勇なるを平士人になし有を、竹潭君此地に于役し、役土人となし給ふ也。（近世蝦夷人物誌に出ス）又金太郎は寛政元酉年クナシリ土人（マメキリ、ノチウトレ、ホニシアイノ、イヌクマ、シトヌイ、サケニシ）とチウルイ（ホロエメキ、ケウトモヒシテ）土人と徒黨百貳十余人にて和人七十一人を殺害し、其氣に乘じて根諸（ネモロ）に押渡り、追々黨を集め、蝦夷全島をも伐從へ、其威を掌握せんとの勢に及びし時、當所の首長イコトイ祖母（シユチ）ヲツキニ其外十二人の首長多くの土人を說服させ、追討使の下りを待て其徒黨を伐取、一島を安靜ならしめたる勳功に依て、領主より厚く褒賞有、また其像を画き（蠣崎將監号波響様主人）

○アッケシ首長カモイトイ　妻ヲツキニ
　├ クナシリ弟首長ツキノイ
　└ ○同シッホカニ　妻ヒイランケ　墓ヲンネトウ
　　　├ ○同イコトイ　妻　墓ヤマコヘツに有
　　　│　　└ 娘ムリセ
　　　├ 同○マイトンケ　妻アッフヨフ
　　　└ 妹ヲヘレケマツ　夫和人湊屋佐治兵衛
　　　　　└ ○年寄金太郎　妻スイクシ

此ヲツキニと云をアッケシの婆と云て頗る英邁の聞え有者なりしが、其墓ヲヤコツと云に有。印にヲンコ

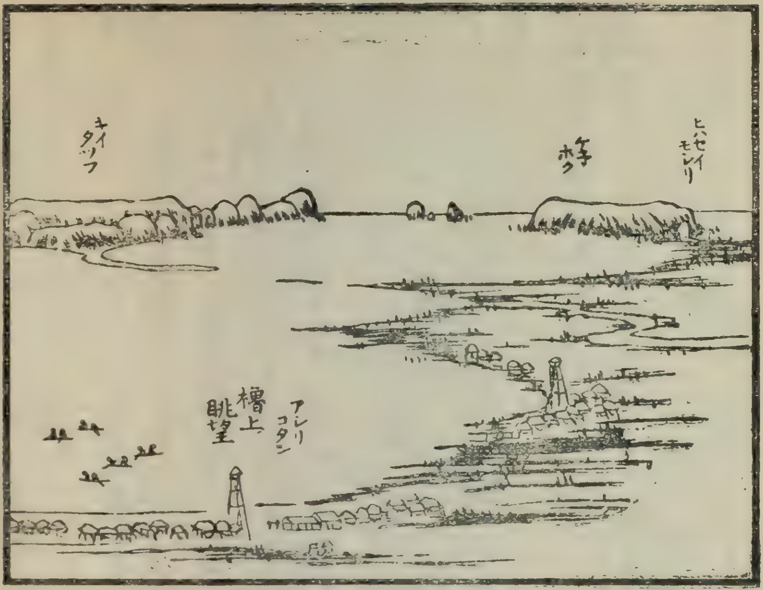
の木の杖を刺置しと云が、今一圍餘の大木と成て生長す。四國遍路をするや、弘法大師の杖杉、右衛門三郎の杖杉等、北越に親鸞聖人の杖竹等云る物生長し有も、是偏に英雄のしからしむる處と思はる。

天覧にも備はりし者の其孫にて、頗る剛直豪強の者なり。（近世蝦夷人物誌に委す）

四月廿日（安政五午）黎明發レ舟（針位午）シユマビラ（岩平）峨々たる岩壁、是バラサンの下なり。廻るやヲチヨツフヲロシヨフ（崖瀧）水滴り落るの義也。アイカツプ（大岩岬）不二出來一の義也。往古合戰の時此岬の上に上りし軍勢を寄手下より弓を射たるに當らざりしと、依て号ると。（此所ゼンホウシと對す）。ツクシコエ（岩壁）、纔所の道と云義、過てエニンカツプ（アイカフの訛り也）是も大なる高岩岬なる也。過て平磯に成たり。トウコダン（小川、上に小沼）沼所と云義、其邊りの眺望實に目ざましく有也。インカルウシ（小岬）見ル事多しとの義也。此所より諸方見ゆる故に号るとかや。廻りてキミセシユマ（岩磯）此處奇岩怪石恰も舞が如く踊るか如し。また怒猊盤龍の形、實に目を驚せり。（過て）ヒリカヲタ（砂濱）美沙との義なり。

小島（ホンモシリ）（從ヒリカヲタ八丁）周（八丁）皆岩礒にして奇岩簇々たり。赤楊樺（ハリカバ）の礒馴しもの一面に生たり。

大島（ホロモシリ）（從ヒリカヲタ十八丁）周（十八丁）皆岩礒今大黒嶋と云、東南にラツコイシヨ（岩岬）、昔し獵虎が上りし由、依て号く。シユヲマイ（北面）鍋（ナベ）有と云義、往古神の鍋が有りしと也。ホヌ・シ（北面平濱）退去る義、ウリルイムイ（西向）此灣毎に鵜（ウリウ）が多きと也。チコシキル（嶮崖）峨々たる岩間身を縮め通る



より号。此所に大岩堀有て近藤氏其洞口に柵を結て人を入ざる樣に致しぬ。其中に石鍾乳有と云傳ふ也。深さしる者なし。并てムカイサカイマフ（岩壁）岩面筋有て界を成故に号く。ヲンネサカイマフ（岩平）同じき大岩故に号く。此所シレハ（センホウシ領の岬）と對して內は波浪穩にて船懸り宜敷、異船も此港を知て明和（三年）安永（七年八年）寛政（八年）の度來り滯錠なしたる也。

過てフクシヤタウシ（平濱）苔蕗取多き地故号く。是土人の喰料也。（松前アイハカマ、和名行者にんにく）夷言またキトといへり。此邊に來るや、往昔金坑の囘堀跡有、此山を遠望するに、日に映じて紫金の濛氣立昇り、山間に爨き草露を照し、實に無盡の寳藏たる山相なり。「西人ハ山蒜夥シ

ク生シタリ、是當ニ其土地金銀鑛有モノトイフ證ナリ」(野作雜記譯說)。と惣て金氣有る地は葱の類能く出來るとかや。昔し佐渡の西三河內より新潟に葱を賣に來りしを新潟にて其根よりふと砂金を見當り、其れより根の土を陶汰して大利を得し故に、追々葱の直段よく成しに、後彼地にて洗て持來りしかば誰も買人が無りしと、流石に金丁の多き地故、早く其意を察して、彼地にて試るに、陶汰したるに砂金が多く有りし故、今砂金山を開きたりと。夫に附ても此海岸金銀氣多き事知らるべしとかや。過てホヌマベツ(小川)髮毛の如き水藻有る故號る也。マヒロ(小灣)澗と云義、ホンマヒロ(小灣)小澗との義、ヲロクンネムイ(岩灣)大暗き灣との義、兩岸壁立して高く暗き故に號し。イショチセンベ(平磯)是より暫くの內礫

斗成る故に号るか。岬を廻りカウシムイ（小灣）是も深き灣なる故夕陽ならで常らざる故に号く。岬を廻りてリルワニ（平岩）高岩平也と云ふ事、此岩平にタンネクッ（岩筋）とて長く帶を引如く筋有。（廻り）ノッケアトイ（大岬）とて頤の如く沖に差出たる故に号く。此邊波浪甚し。前に

ヒンネイショ（海上二丁）周（三丁）岩礒也。ヒンネは腦胸也。此處に多きが故号くなり。

岩岬廻りてレハクロモイ（大岩灣）また岬廻り（平濱）モチロフ（川有、上沼）近比迄番屋有し由。また岬を廻り、シチロフ（沼口）此兩所だに無時は南岸を陸路まゝ來に宜しと。此二川草生踏ぬかりて深しと。前は灣に成て風景宜し。此所往古鷲また鮫取等が小屋架して居たる故事有て号く（平濱）。エオロチロフ（上に沼有）楡皮を浸したる故号く（岩岬）。過てワタラチロフ（川口漁小屋有）前に岩礒（周二丁）是より又岩壁なり。ヒバセイ（川有）此川に蜂多き故号く。此邊より雪中はトウキタイ（アッケシ沼の上なり）え一日に（五り位）、越る由、雪消れば萢沼多くして越難しと。其間を炭山と云て會所遣料の炭を燒所なり。山中椴丼に雜木にして羆、豺狼、兎、狸、狐、跳兎、石虎、黃狛アッホウ（鼯鼠の一種）等多し。扨爰に可笑話有、昔より蝦夷に麝猫が有る由言傳へ、友人騰佐鄉（江刺の人）が蝦夷竹枝（五十首）にも靈猫直萬金、牝牡遊水濤、郎若得準尾、唔歌鼓瑟琴、等有。後方羊蹄巓クナシリの祖父岳に住等云て未だ見たる者なし。然るに此所に麝糞と云物有て大サ筆管の如し。其中多く華錦鼠毛骨にして香氣馥郁として如何にも麝糞と思はる。人皆此獸を捕て大利を得んと欲し探求るに、其糞を得るのみにして未だ一頭をも得ず。然るに

竹潭君金太をして山に入れ探さしむるに、數日にして此糞のみを持歸るのみと。依て其獸を誰もいよ〳〵探しもとめしに、此度此事をば竊に金太余に告ぐ。彼糞は黄狖（ホイス／テン）の糞也。余慥に見當たり。黄狖は好て鼠を喰ふに附ても明也。され共誰も麝香と云物の糞と云に、余一人黄狖の糞也と言ても、大勢の者誰か是とせんと語りしが、酒六も其事如何にもと云に、余は數年の疑を散じたり。此事を南華主人に語りしが、同人一種の確證をまた示されしに（ネーランド第三十一号マルテル　〇之ヲマルタ」「マルテリユス」及ホイナ」と名ク〇此獸形ハ猫ニ似テ足指ハ短ナリ〇茲ニ兩種有也。一ハ恰モ毛ガ黒ク黄ニ光有テ尾ハ白ク。今一ハ野生テ美麗ノ柔毛ニテ頭ハ黄ナリ。此屎ノ香ハ麝ト同ジ下略）いよ〳〵決したり。按にホイナと云は夷言ホイヌの轉ぜしか。此地より山丹に行、滿州に廻り、後西北の方に至りし物か。韃人好て此皮を着る事も次に見たり。是北地（カラフト）産の黄狖と聊其文異る事なし。恐らくは夷地麝香を產するの說、この糞より起りしものか。如此一種の小獸に心を碎くより、無窮の山澤に心を附ざるをや。

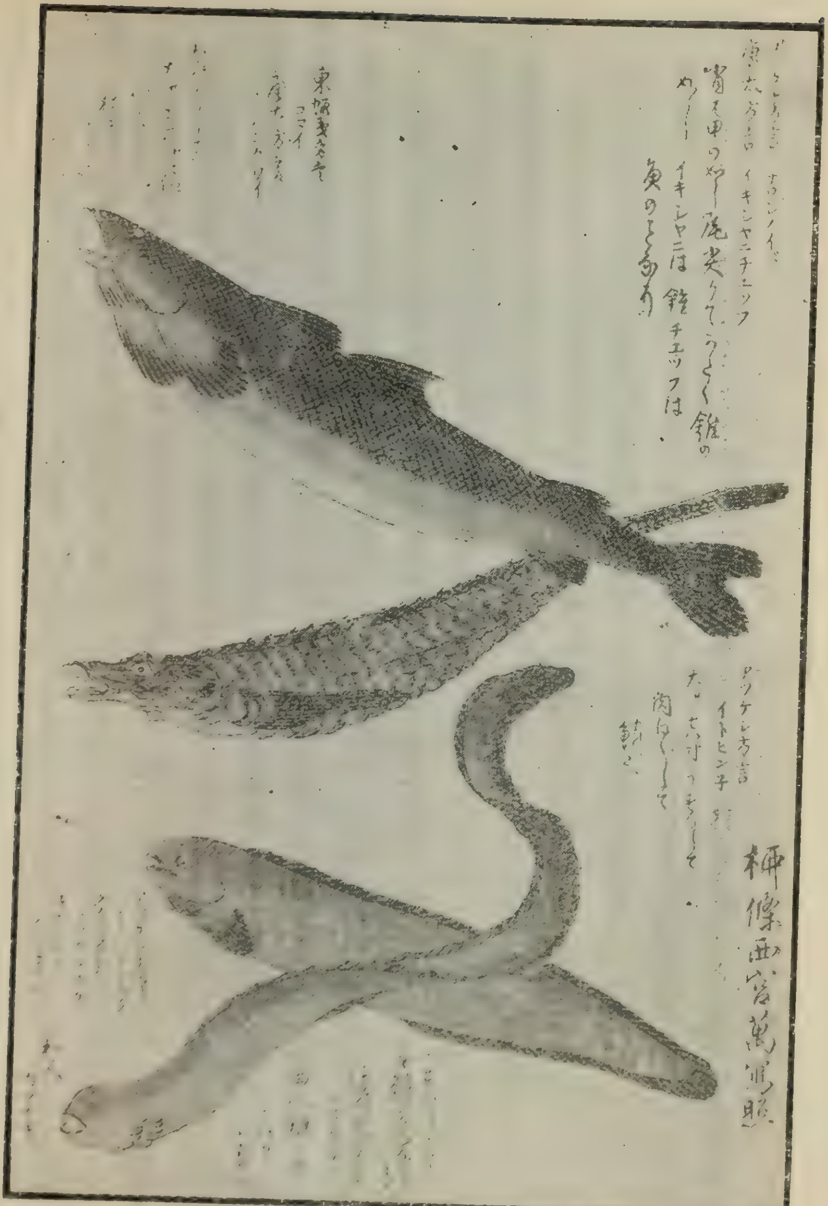
花の香のあだなるものを月にかけておのが妻木はこらんともせず

エモコモイ（周三十ヨ丁）　昔は島なりしが今は陸續きに成たり。（南岸）　メヲクル（大立岩）　テモイ（立岩）

北へ廻りてケネホク（大岩磯）　依て此島をケネホクと言り。赤楊多き故に号し。（并て）

ブシワタラ（周二丁）　此岩とケネホクの間を廻入るや、追々淵内に成たり。（また前に）

キイタツプ（周廻二里、海上五丁、番屋二ケ所、藏有）　名義上遍平にて蘆荻多しと云義也。又狐が踊（ブド）りし

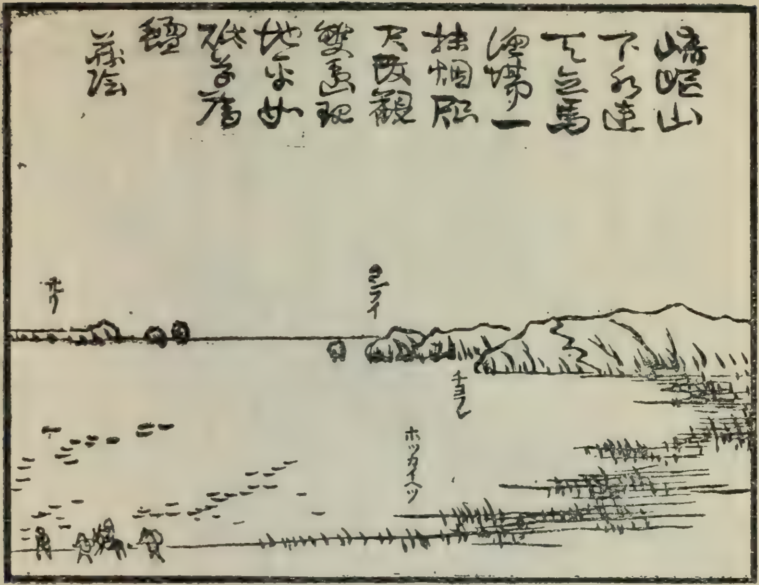

イキシヤニチエツフ

故事有といへり（西岸）。ハエキシヤニ（大岩礒）。是より南へ廻りトウブツ（南方小礁）シレトヱ（東岬）ヲクシ（北方番屋有）此邊沙濱にてアシリコタンと對して船澗に成也。其東北海中にエタシベエシヨ（岩礒）海濱礒の義也。グヤ（岩礒）等云島有。

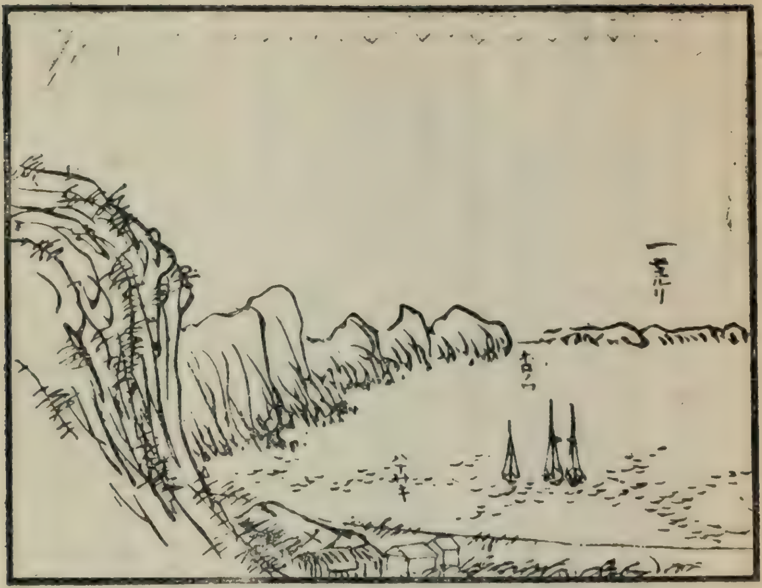
扨其所を內へ入て（左ホキシヤリベツ、右キイタツプ）濱形東向惣て沙濱也。ホキシマリヘツ（川口）蛤に似て大なる貝（ホツキ是甚蛤か）有故に号く。過てヲタノシケ（沙濱）濱中と云義、爰をアシリコダンと云（番屋四棟　板藏八棟、夷藏十三、辨天社一棟）是新場所と云義、惣て美々敷建たり。先公料の前、根諸（ネモロ）に會所の無りし時、彼地の荷物を爰まで持來り船積せし由にて、近頃迄ネモロの積取船をキイタフ下りと沖口へ願書差出したる也。今其古帳面等を貯ふる者多し。此邊鯡鰯鯇鱈コマイ等多し。稼人は皆サル土人を遣ふ也。地形南向素濱、うしろ叢濕地にて水悪し。上平山、椴木立甚深き所也（從會所凡九り半）。

　かねてより荒き汐路ときいたふの島根に高くよする白浪

廿一日此地霧深く咫尺の間に變化す。舟を雇てキイタプに行歸に、今日はコマイ（カラフトにてハンカイ）キウリ（夷言フウラチエツフ山旦にてアラコエ、此魚胡瓜の香有よりして如此号し也）の大漁なりと所々にて網を見たり。其中にアイノクリベカ、イトピンネ、チロシノイベ等云魚多くあり。また海岸に種々の海草有。竹潭君爰にて鷓鴣菜（カイニンサウ　鼻美）を見付られしと。其品舶來の物に勝れり。また異草多し。別ても黒巻丹、赤沼蘭よく咲たり。鳥にはエトピリカ（海鸚歌に當るよし也）、ヤエエトピリカ（大さ鵜の如く色黒く、首長く、背



目ふち白く、蹼紫紅色也）、ヲンネチカプ（大鳥）（信天翁）其餘水鳥には種々有。（キウリ、ヲレタラ、ツリヤ、フーラツトリ、カ・キヨ、フウセチリ、コロカツクシ、ハリケウ、アチユイチカフ、ワウヲ、シラルツ、イツラ、ヒシカ、イトクトキ、アイスヒヲリ、ヲマンルイチリ、ウエシユツフ、ハケクシネ、ウエチリヲキ、ヌツフカチシフ、ホツキウシ、ウツセトイタ、ヲツヒケヒケ、ヲルレアツケウ、ハイトツフ、アヲリ、ヘカチ・リ、ヤウレタラ、ホヌチリレラテキ、ツラ、フレシヤムチリ、ホルチリ、ヲケウラ、コペツチヤ、）また陸にて異は、フウレチカプ（赤鳥）（大さ鵯の如く、背黒く、背藍鼠、胸に丸き輪有。依て和人日の丸といふ）サルマシコ（是和語なり。内地にも有るなり）アツケシイ・トコ（厚消よいとこと唱ふとぞ。姿を



見ず）カネタ・キ（和語也。ホン〳〵鉦を叩く如く唱より号く）シイシヤリタマヤリ（如此唱より号く。大サ鴉の如し）其餘奇鳥多し。中々聞盡すべきこと難し。夕方陸廻り馬三疋廻り來る。

廿二日宿霧濛々如二混沌世界一。是より沙濱（十ヨ丁）シリシユツ（岩岬）九折廻り、此上を越る、依て号る。（下り）ヲツベキシユイ（岬）往古地震にて爰の人家皆潰れし由にて号く。（本道ノコヘリヘツより此所へ五り）。過てアチヤビラ（番や一棟、板くら一、茅くら三棟）往古土人等岩を的にして弓を射たりし故事也。過てチヤシコツ（土壘有）古の城跡と云もの有。ルイラン（坂有）坂下ると云義（下り）ホロトウ（小川）上に沼有、依て号く。（番屋一棟、板くら五棟、茅くら三棟）しばしにてホンホロトウ（小川）越て平山に上る。𣟧、

柏原、赤楊多し。また吉利子樹(エノミクンネ)（救荒本草）一面に生たり。（下り）プユウンチシ（大岩岬）穴有る岩也。依て号く。上に岩蓮華の大さ一尺餘のもの多く生、實に奇とすべし。其邊の岩に櫻草、濱薺(ハマナツナ)の一寸斗のもの紅白を接、氈(モウセン)を敷たる如く生、いと目覺しく覺ゆる。此下をウラヤコタン（近年迄番屋有し也）名義、此川にて簗(ウラエ)を立しが故号く。是よりまた九折を上るに、上は惣て平野にて槲柏多し。此所南向一大岬に成たり。

是より海岸はレッハムイ（岩岬）沖の灣との義、ホンチエップホプ（小灣）ホロチエップホプ（小灣）等共に魚の涌立義也。此所大岩壁第一岬也と。モエレトマリ（小沼）また岬、廻りてエチヤシト（砂地小川）此所にて上道と出逢ふ。是より平地、土人等昔し熊を走らしたる故事有。小川二ツ越て（濱形南向）ウシ、ヘツ（小川）上に蔗(ヤシセナ)多きが故号く。是より入坂に上る。海岸は岩壁、其下にチフラムイ（小澗）上り下りの船澗と云義、（下り）ヲワタラウシ（小澗）兩方岩岬の上を過（下り）アフタウシ（小澗）兩岬共大壁、名義鉤(アフ)作との義也。又坂一ツ越（下り）ヲフネプ（小澗、沙濱）掊漁を遣ふの義也。岩岬越てチシヤシラエッフ（小澗）走りながら魚を取るとの義。又岩岬の上越て沙濱、此所まで十一峠を越たり。是よりは道よく、かた沙にて、土人は跣に成て行り。キナシトウヘウシ（小沼）此所に蒲(シイキナ)多き故号く。プウレシユマ（赤岩）是より陸の方に山道有、コタンコアンヘツえの新道入口也（過て）ホロンタイ（小川）多く取るとの義、（過て）アラヘヲマイ（惣て沙地）野斗にて水無との義也。惣て沙濱（今日の道凡

九り）
ヲツチシ（番屋一棟、板くら一棟、茅くら二棟、土人小屋一棟）地形一ッの大岬にて、此所細く括りたり、周廻二り斗皆岩壁なり。地は西向、後ろに山有。建物惣て廢せし故、傍の大岩縁に古筵を張りて是に宿す。金太暫時濱邊ニ出しが、笠に一ぱゐ小貝を拾ひ歸りぬ。

　かりごもの一重も敷かでさぬれども世の爲おもへば寒けくもなし

扨此岬の西南にアハラムイ（小灣）カエワタラ（大岩）レタロカ（小灣）ノツノシケヲマフ（南岬）イノミ（東南岬）此所土人等木幣を立て海神を祭る所也と、依て号く。エウエニ（東）ウエニ（岩岬）ニノウシ（岩磯）ニノは石陰子《ガゼ》（甲蠃）多きが故号く。（并て）アシユンテウシ（岩磯）靈蠃子（棘甲蠃ウニと云也）多き故号く。此所南はガゼ多く、北はノナ多く産るも奇とすべし。金太爰に來りて取たりといへり。廻りて灣に入（番屋の背濱也）此所東面にて船繋りよろし。

　わたつみの神の宮居は見えねどもたふとかりけりいなをしみれば

廿三日に發し番屋の傍より野に上る（平野）、ホントウ（小沼）直に下り（東西）ホクショ（小灣）白に黒班有水豹《ホキリ・アザラシ》多く寄る故に号く。又是よりホロノツ（大岬）といへる岬の上を過（下り）シユムウシ（番屋、茅藏）此所雜魚の油を多く出したる故号るか、又ホンノツ（大岬）といへる岬の上を越コンブウシムイ（番屋、板藏、茅くら）此灣昆布多き故号く。過て濱またヲタノシケ（小川）砂中と云義、過て坂の下に標柱（従ア

天借巨靈手
槌開一面窓試
望千里外駭浪
驚濤
松園道人

ツケシ二十一里二十六間沿海惣て三十里三丁）チョブシと云。上に沼有、往古其中へ一本の立石が飛來りて立しと云義也。是よりネモロ領になる也。濱形東南向。

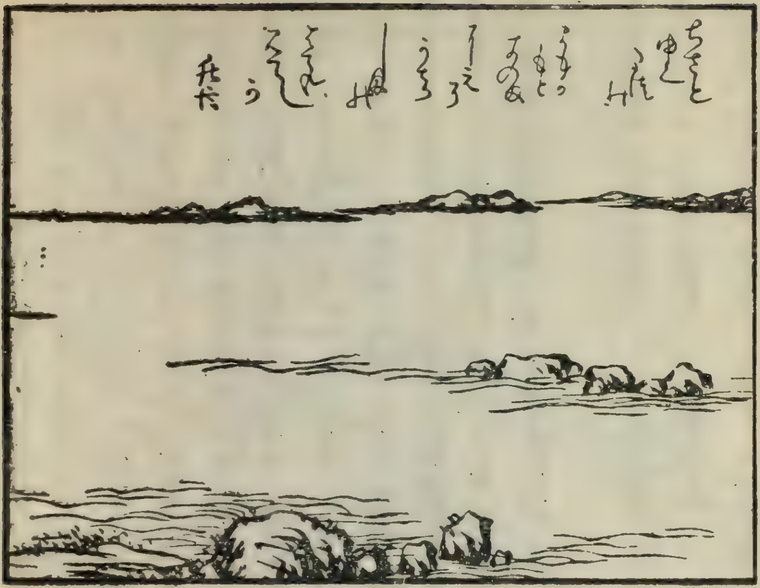
岬を越（砂濱）ヲツカエヘツ（小川）物を背負し故事也。ヲホサッナイ（小川）往古神の脚布が流れ來りしと故事有。此上に喰土有るよし也。其上は椴木立なり。（今日の道五り半余、從是ネモロ會所へ二り）

むかしたれ名づけ始けん荒磯によすれば浪の花さきの浦

ハナサキ（番屋、板藏）是和語鼻岬なるか。地形南向、東に岩岬、西にチョフシ、其間一灣に成前に二島（ユルリ周二り、モユルリ周一り余）を海上二り斗に見たり。周り皆岩壁、船澗至てよろし（并て）キナシユフヲマフ（岩磯）エタシヘイソ（岩磯）并有、何れも土人水獸の漁場あり。

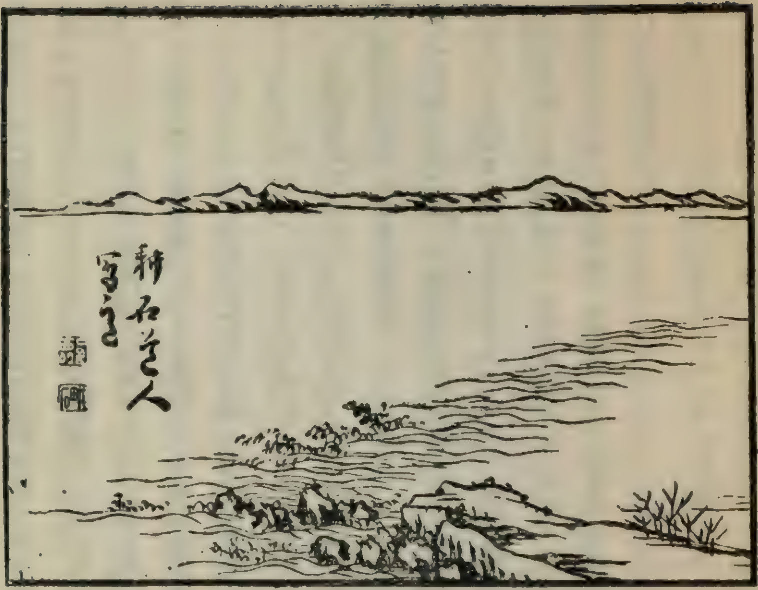
等島有。文化度此所へシコタン土人を引取漁獵をさせ置しが、今それを皆ホニヲイ（會所元）に移し、ハナサキ土人と号け置ども實は皆シコタンより移住の者也。此上の所皆平野、雜木立、ネモロ會所へ陸路貳り有。着してより金太會所へ案内土人を賴に遣せしに、月の出過に乙名トミクワを召連、酒一樽を持歸り來る。

廿四日曉風吹二宿霧一眺望宜し、上より島々分明に見え、ノッ（小岬）ホロノッ（大岬）上を過（凡二十町）ヲワタラウシ（小灣）兩岸峨々たる岩岬依て号く。（并て）カンサラムイ（小灣）大成口の灣と云。傍に高き岩穴有。實に天下の奇勝也。（過て）エヌエシウ（沙濱）誰も此所へ來るや、杖括槍等にて其地へ何か画



く故号ると、繡縫多き意か。（過て）ナンブトウ（小沼）昔し南部人漂流して爰に來り、赤狄の國迄も來し心にて生涯終りしと云故事有。（并て）アンネトウ（小沼）細く尖りし沼の義、ヲンネトウペツ（沼川）上に沼有。トペトマイ（沼川）是迄（一りヨ）砂地也。また岡に上る、其岬をトモシリウシノツ（小岬）と云、前に

トモシリ（大周十五丁、小周十二丁、海上十八丁）名義二ツ島と云義、トツフモシリの結り也。此邊風強數故、赤楊樺等皆磯馴て地を匍匐たり。我等が衣に鉤り髮にかゝりて甚危し。（下り）ポフケセンペ（小灣）此所曖溢の氣立故号くと。ヲケネペツ（小川）赤楊有川也。ヲヒネヘツ（小川）シケウシ（小川）此所昔し人家有、多くの荷物が上りし故に号く。上に土壘跡有て陶器また矢根石



を出す。（并て）フンベケウニ（出岬）鯨の腰骨が有りしと云儀か。フラリムイ（小灣）息氣の有灣と云義、チヤシコツ土壘有、岬に上りヲヤコツ（土壘）是は別の地跡と云義、前に

イソネムシリ（海上九丁、周五丁、ヲヤコツムシリと云）周皆岩磯也。ハボマイムシリ（海上貳丁、周五り）周岩礫也。

海岸轉太石濱、岡は茅原也。マカヨシレト（岩岬）蕗薹多き故号く。コヨマイ（岩平）此所へ打波浪音高き故号と。前に

二島（コヨマイモシリ海上二丁、周七丁、カバフケモシリ海上五丁、周八丁）カバフケは浪が被るとの義なりと。

扨此邊に成るや、風強く度々吹倒さるゝ事有。又靄も彈指の間に晴陰して、一島半を顯し、半をか

くす事有。實に奇觀也。夕立は馬の背を分ると云も實にと思はる。
霧ふかき茅野の原を分け行ば知らぬ神代の事をしぞ思ふ
トリトエウシ（平磯）椽に還ふ物多きと云より号く。今は此邊茅原にて樹木一本もなし。（幷て）コテトエ、イソ（平岩）昔し鵜を取に來りし故岩く。今又一說には、岩の形ち兩腰を延立たる如に依てともいへり。（幷て）ヌサウシ（エナヲを立たり）是則（從ハナサキ八里）
ノツシヤプ（第一岬）此所東海ニ突出し其岩脉海中一里餘も出る故に白波是に激立して其すじ布を亂たる如し。上は茅野にて木なし。是に火をつけ靄の晴間を見て北望する（凡十二三り）クナシリ島雲霧の間に横はり、巽の方には（海上一里余）
ヲヽトキ（周十八丁）岩礒のよし（幷て辰方十八丁）モンモシリ（周四里）また（卯辰二里半）アキロヽ（周四り）過て（卯辰方十八九丁）ユウル（周八里）また（卯辰二り）ハルカルモシリ（周六り）同じく（四り）モシリカ（周四り）また幷びて（二り余）イタシベイソ（周一り）等水獸多し。土人等皆海猿、水豹獵に至る。また從ニ是岬ー（海上二り）此瑞門をクナシリ、エトロフ、ネモロ、行の舟は通るに、暗礁多くして甚恐るゝとや。
スイシヤウ（周八里、本名ニイシコ）至止礒の義、鳥水獸至り留ると云より号く。周廻に小字多し。（また寅卯の方海上二り）シボツ（周八里）シベヲツ也。鮭多しとの義、東方に小沼有。また船繫り宜し。また

（寅卯四里）タラク（周六里）本名マクイなるよし、是淵が滑と云義のよし、島中岩礒滑かなるが故に号く。共に樹木なし。（卯辰七里）

シコタン（周廻三十四里余）至り極る所と云義也。是東の果なれば也。海岸岩壁斷岩の地多く平遍にて艘木立山中苔地多く水悪し。周廻小名多く、また船澗數ヶ所有。（西マ、イ、北アナマト、東カウノト）文化度迄番屋漁場人家等も有りしが今は廢したり。余は嘉永二酉年エトロフへ航せし時、アナマトに船を容れ、三日程滯留したり。魚類、鮭鱒鯇鱖鮮鮃海𩸽其外雜魚多し。また水獸多く、山には一種の狐を産す。鳥も亦見馴ざる物多し。嗚呼此一島の土人を引取りて空島となし置事可惜。今他より此地に移すや、其水土に馴ざる故病を生ずる患有、また此儘空島になし置時は外夷の憂有。此土人をネモロに移せし事悔る共取かへし難し。只願くば此地にて産れし者の老衰へざる間に其親族を移さん事を。左なくして誰か此離島に移住せん。

わたつみの汐氣の中にあらはれてげにも千島の數は見へけり

暫時此所に佇立たるに身凍る斗になり、北岸を西に向ひ來るや、海風面を吹て恰頬を裂如し。岸を撃波浪茅に濁り凍て尾花の招くが如く見へたり。又平崖には數丈の氷柱溜り早五月の節なるに如此よと、風土の異を感じつゝ來るに、コエカペツ（小川）浪打川と云義、（并て）コエカノツ（小岬）浪越る岬と云り。ヘウチヤラセ（小川）崖瀧と云義か。ホンモト（平地）ヲンネモト（同）共に平地也。爰に往古の穴居跡多し。チヤシコツ

(城跡) ホイナヲイ（平濱）小石多きとの義、(并て) カアネフ（岩島）、其形ち尖りし大岩海中に突出す。(過て) ウエンチヤシ（城跡）是は悪き城と云り。此方の大將負て逃去りしより号しと。(并て) チヤシムイ(小灣) 過て樺木原に入、下は小笹の道、日も傾ども、風强き故宿るべき所もなき故に急ぎけるに、コタンケシヘツ（小川）人村端川と云か、ヲンネコダンシレト（小岬）大村岬の義、昔は此邊人家多かりし由。ヒリカヲタ（沙濱）美濱の義、(過て) トウシヤム（沼口）沼落の義也。西岸に越て嶽の下なる聊の風陰に宿る（從ノツシヤフ貳り半）然るに水なし、如何せんと探せしや、岩間に少の淸水有故是を以て飯を炊き喰せしや、潮辛くして咽喉渇きけるに水はなく甚だ困りたり。

沼周凡貳り、其源にサキペンペツ（右方）シペンペツ（左方）とて二ツ有。サキヘンヘツには鰤多く、シペンペツには鮭多し。又沼中蜆蜊其餘小貝多く、水底一面に貝売なり。

　明やすき夏の一夜もねもろの海くるしや千夜のこゝちせられて

　やどるべきねもろの里し遠ければより藻かた敷岩まくらせん

廿四日北風强く、飯を炊んとまた岩間を見るに、潮滿て何處ともしれ難し。依て今朝は飮食せずして出立、チヤシコツ（城跡）下にコンブウシムイ（小灣）ヲペツカネウシ（小澤）此所昔人家有し時犢鼻褌を洗ひし由にて号く。今は水なし。此邊露深き故に衣服身に附て甚步行悪きが故に皆狄冬葉を被り、酸摸葉を腰に纒ひけるに、是にて露を拂ひ、衣服身に附ず宜敷もの也。數日梳も浴もせず、髪は亂れ、破れたる衣服着て此

維辛維苦嘗去嘗來
乃獲異卉味美於回
衆救饑餓其功偉哉
赭鞭上草汝何人斯

甕江川田剛題

敬齋精義書

葉を肩腰に纏ひし樣は恰も變化物の如しと、土人等も嘲り、自らも後の記念とも成れと、手册のはしに自画き置ぬ。過てシネフルニ（岩礒）此所每朝鷲一羽ヅヽ下り居りし故事有と。シヤムコタン（平礒）ホンヲニヨフ（平礒）ヲニヨフ（同）追々腹も空く成、咽喉も渇きけるに、ふと心附しは土佐の國飛石。刎石、ころころ石の邊にては虎杖の蘖を取て皮を剝き喰し、又糠と鹽とに漬て喰を思ひ出し、此邊幸に多く生ければ、是を折て喰けるに、頗る腹に留り、また酸味有て渇をも凌に宜し。土人は此蘖が如此まで喰はるゝ事今始て知りたりといへり。此實はクツタラアマ（虎杖米）、と云。酸模はシユナバアマ、と云て飯に炊き候よし、余も夕張、シコツ邊にて喰し事有なり。土人は如此事驗窮して、雀の喰ふ物成ば何にても糧に用ゆると、依て雀をアマチカブ（飯鳥）といへり。（過て）チヤシコツ（城跡）此所は土鍋にて種々の土器出る也。（過て）ラホキ（小澤）臓腑の下と云義なるが何故に号るやしらず。ノツカマフ（小岬）岬有との義、此所昔人家多く有りしが寛政亂の時より今のネモロの地に移りし也。今のネモロ土人をノツカマフ土人と古帳面等に認め有る也。廻り下るや、濱形亥向、ノツカヲマフノツ（小岬）と云。（過て）イシヤウニ（岩島）岩礒なる故に号く。シキムイ（小灣）漁事宜敷荷物多く上るより号く。爰にて穴を見附し故、飯を炊て喰たり。ビウチヤラセ（小川）瀧川故に号く。コロクニウシムイ（小灣）欵冬多き灣との義か。ホンコダン（村跡）ヲンネコダン（村跡）大村、小村の跡也。前にカサネカシユマ（小岩島）其形ち笠に似たる故に号く。其島沖中（二丁位）に突出し、汐干の時は岩の上を飛越刎越て行に宜し。其飛石をシユマリウカ（岩）といへり。岩橋との義也。此邊に長三

四尺位にて色灰白の蛇の如く、また魚の鬚の如き物有、問ふにカモイハシユイと云。手にて皮を剝に白くして内地にて見る越王餘算（本草綱目）也。須臾の間に堅成て木の如し。土人の話しに、是は岩に生る物也と。沙箸生二于海岸一、春吐レ苗其心若レ骨、白而且勁可レ為二酒籌一、凡欲レ採者輕歩向レ前及手拔レ之、不レ然聞二行者聲一遽入二沙中一、掘尋レ之終レ不レ可レ得也。（嶺表錄異）とするも是なるべけれども、沙中に入物にあらず。是を亡羊山本先生百品考中に、沙箸（嶺表錄異）越王竹（南方草木狀）越王筋竹（竹譜詳錄）沙筋（福建通志）途釵（同）等の名を擧られたり。實に博識と云べし。是此地所々產るに始て岩に生たるを見たり。搖々とし波に漂ひ堅物にあらず、沙筋魚の名有も宜なる也。松前にて此箸を用ゆれば毒解になり、又簪にして刺すや、頭痛を治するともいへり。（過て）ホロシユナハウシ（小灣）シユナハウシムイ（小灣）共に羊蹄根多故に号く。（并て）ペトル（小岬）ピンケウシムイ（小灣）崖灣との義、此岬に炮臺有。廻るやネモロ灣に入る（濱形西向。波浪至て穩に成也。チヤイフンテカヲムイ（大灣）是は極宜敷灣と云義、（過て）ネモロヘツ（小川）此邊より漁屋立並び（從トウシヤム四り）前に

ホロモシリ（海上五丁、周九丁）今大黑島といへり。上に辨天社有。其内大船繫り澗によろし。

ネモロ會所に着し、先安を祝して酒を與へ、酒六、金太等は歸俗の事なれば何哉と考しに、幸當所に伊勢秋が多く下り、土人等へ會所より吳し由聞ける故に、其を乞ひて、是に木綿等添へ遣し、夕方一同にて首長陳平宅に到り、土人ドンドンといへる者を呼。此者は戎舞をよく舞よし聞けば、是を乞しに　一同の者一樽の

酒に興じ、樽底打きて、見サイナ〳〵我舞ヲミサイナと囃子立るや、テンキを烏帽子となし、余が羽織を乞ける故かしたれば、其に跨り袴となし、干鮭を掏へ、釣竿肩にして舞始め、種々の所作事仕舞て後、其釣竿を櫓とし舟漕歸るさま審に是をなす事實に奇とすべし。如此千島の隈までも都の手振の殘る事有難しとも忝とも筆の及ぶ所にあらず。夜に入、橋本（悌藏）近藤（善之丞）の二君を尋ね、知床行の事を頼みけるに、二君懇に其手配を傳藏（秋田屋）に惣て命ぜられ、何の不足なく其用意調ひけるも、此場所の繁榮夷地第一とも云べきか。晝夜の差別もなく船々の出入絶間なければ、取敢す一首の腰折を其席の壁にしるし置ぬ。

眞帆かた帆ひまなく出つ入つしてげに賑はしき里にも有かな

納紗布日誌尾

竹潭喜多野氏志古覃日記

壬戌蘸月余與塾生日課記事一則。一日見喜多野省吾國字志古覃紀行於几上。乃翻譯以示諸子。使其取法焉云。　毅堂學人宣識

志古覃。夷言極處村也。以其在蝦夷極東海中。故名。先是松前侯移土人于根室港之花碕。爲空島數十年。今茲安政丙辰。余祗役在惡消。秋七月得報差巡視焉。蓋　官欲再置漁戸也。初四日抵根室艤舟。過長島啞差比原志古覃人。乃命引導。

初五日平明西南風開帆。用夷禮立木幣于鷁首禱海路安全。巳時歷納紗布岬。東踔四里。抵水晶島。頑霧四塞。咫尺不辯。乃鎖船巖間登岸。撿時規僅過午。

初六日用寅卯針揚帆。雲霧忽駁忽合。變態無極。抵悉勃通島之登根別墨。崖土有赤有白有紺有黑。斑斕作纈紋。差午出大洋。南風大作。船傾側簸盪。衆皆眩暈。嘔嘔狼藉。倚舷而望。四面浩淼。無畏嶼可泊。萍飄蓬轉。一任其所之。忽見一島于艮位。轉柁赴之。巨巖盤薄于頽波怒濤之間。傍多礁石。一誤則船粉碎矣。衆相顧失色。入夜風少定。展帆東馳。初更達多羅久島。繫舟登岸。濕霧如雨。燭火屢滅。乃燒枯枝敗葉取明。

初七日平旦與松岡德松村精。巡視島中。無大樹。岸皆巉岩。往々帶青綠色。光瑩如孔雀石然。

初八日暴雨驟至。避于巖穴。寒甚。御綿衣。舟中水且盡。派人覓泉。不得。乃堀地出水。煤色。

以レ巾漉レ之。有二臭氣一。
初九日微雨銃二海獺長丈餘一未レ及レ收飛濤大至忽盪去可レ惜際レ昏德獲二鷲一隻一而歸
初十日颶風夜半收レ怒纖月在レ空明日天氣可レ知
十一日開霽解レ纜。南風側レ帆東踔。望二洋面一白如レ雪。俄頃潮來。其鳴如レ雷。其疾如レ馬。狂吼奔騰。襄二鷲逢脊一。逢霧如レ湿。船傾欲レ將レ危。舟人惶惑失レ措。德曰潮急如レ此。請一還二于多羅久一候二順風一。余曰何日無レ潮且海路既過レ半今而回レ帆是廢二前功一也。舟人奮激竭二死力一劣能過レ之。日晡始見二志古畢島之佐喜宇遠別界一。樹木可レ辯。既到二港口一。濤高不レ可レ得レ邇。傍レ島南入二阿摩麻比灣一拋レ錨。岸石磊磊皆欲レ動諦視則水豹群聚也其啼如二赤子一。又多レ鯡。手獲二百餘尾一。
十二日出レ灣過二麻宇多。阿比羅烏度流諸岬一。此間平岡漫嶺無二大樹一。抵二佐喜宇遠別一。島形一變。峯巒突起。瀕海怪石攢簇。或蹲如レ虎。或睨如二獅子一。或猝如二豺狼一。或如二人立一。或如二渇牛怒猊一。或如二鶴啄鵠落龜伏蛇蟠一。千狀萬態不レ能二盡述一。轉入二斂寧志豫灣一。一山皆鳳尾松懸泉數條隱二見樹間一白光閃々奪二人目一。鷲鵰海鷲。甞見レ人驚起。回二翔空中一。不レ知二幾千數一。歷二遠羅捌遍一。泊二阿奈麻刀灣一。
十二〔〇三カ〕日弗且傍レ島北。歷二麻多古覃一。夷言多村也。抵二射古覃一。夷言亰村也。舍レ舟登レ陸。有レ草類二燈心艸一。細毳密布。如レ鋪二青氈一。多二古墳一洒レ酒祭レ之。文化中有二太郎者一以二勇力一畏二服土人一自立爲二酋長一更有下并二吞根室一惡之意上。惡酋長伊古登比有二膽略一欲レ除レ之。乘二小舟一來直過二其處一。太郎素相

識。具酒饗之。伊古登比始入室。插匕首于簷端。酒既酣。急起執匕首刺之立斃云。

十四日平明巡視。有聲震地。如大砲連發。衆驚以爲洋船進器。令人見之。山崖崩數十丈矣。大樹皆合抱。撐天蔽日。其下敗葉重疊。行葉上不知窊隆。一失足幾墜深谷。饒狐與他種異。而短身羸其毛或黄赤或黒白。有二色者三色者。純黒者映日爲金色。尤美。夷人與滿洲人交易以此爲上貨。王士禛池北偶談云。玄狐惟王侯以上始得服。則其貴可知矣。

十五日發射古覃。歷度加理宇多。知呂毛志利。惠厤英古通計。久伊保。泊古覃計志器。是爲島南邊。較北邊覺少暖。是夜有火熒々起海中。散作數百星。如近如遠至曉滅。或云大魚目。或云鹽精未知孰是。

十六日歷登伊度古。厤々比。還佐喜宇遠別器。周廻凡三十四里。大小二十四灣。皆可泊可漁。事既竣。約明日回帆。

十七日揚帆向西。回視志姑覃。既沒高濤間。

十八日早船在多羅久島東北五里。便風駕駛價甚。

十九日間鬱觀日出。海水俱紅。未時風恬波平。船膠滯不前。黄昏便風復作。挂帆三分西馳。

廿日船爲漸所流十里許差午風轉東南。舟人忽報曰。距根室僅三里矣。擧舟懽抃。食頃入港。此役海路嶮惡。將葬魚腹者屢矣。而同行十數人無一損失。豈非天幸乎。歷程往還凡百四里。歷日凡十有六。

隨レ境記レ實似レ易而難。架レ空弄レ筆似レ難而易。何也。弄レ筆者可二以逞一レ巧。而記レ實者動輙流二平凡一。況他人所レ記。我從而譯レ之。筆々顧二原文一。一字不レ可二移動一。則其難可レ知。而此篇行文流暢。絕無二拘束態一。可レ謂二能手一矣。五代史四夷傳有下錄二客話一以成二一篇好文章一者上。此篇或庶幾焉。

癸亥人日川田剛妄評

畏佳涼未展芳樽乞
高秋之正庭柯郎俠
試問南飛雁撇水風濤
壬寅年舊作 西亭書

東西蝦夷山川
地理取調紀行

知床日誌

多氣志樓藏版

凡例

一知床（西地シヤリ領、從運上屋廿一り十九丁、從箱舘西海岸三百十七里半）とはシリイトコの轉語なり。シリは島また國の譯也。イトコは終る果、また川の源に當る也。是國の果と譯す。故に北蝦夷島のシンノシレトコを指てタライカ人バツテキと言り。則バツテキは盡るに當る。其利是も同じ。此岬クナシリ、エトロフと鼎足に峙し、潮勢逆怒し、山峻く崖嶮なる故土人も寄せし者少く、和人未だ是を廻りし者なし。カムイエハの巖洞、チヤラセナイの瀑布、アバツテウシの柱石、其奇名を傳ふのみなれば、余安政五戊午の初夏、根諸にて其行を謀り、シベツ、コイトイ、イチヤン、チウルイ、クンネベツ、サキムイ、ウエンベツ（是をメナシ七ケ所と云）七ケ所の川々を一見し、支別志（二卷）女奈之志（二卷）を著し、知床を巡撿して知床志（三卷）を書き、函館府に納め置。今爰に其七卷を摘抄し、知床志の名を冠らしむ。其書振納紗布日誌に續て是又地名の譯を審にし、聊其草木等ニ相當るべき漢名等ニ引用書の本文少しヅヽを抄擧し置もの也。志士其地を審にせんと欲し給ふの意有らば原稿七册を熟閲なし給はん事を。

萬延元庚申の窮臘於下谷二長町臨機應變の小窓下

源の弘誌

戊午 知床日誌

伊勢　松浦竹四郎　著

たづきなき美山に住る荒熊も馴ればなるゝ世にこそ(陸奥紀行)と實にぞ思はる。此邊りの者寛政御上地前は動すれば此國の政に叛き、また赤狄(フウレシム)に信を結びし事等有しが、其後は聊それらの事をも聞かず、別て此ネモロ(去箱舘百九十八里九丁、去厚消三十り三丁、持場沿海六十里十三丁)は東部第一の繁昌地形北は舎利の山々、西はクスリ領より厚消に續き、惣而二十地、東南に海有。會所元(勤番所二棟、通行屋二棟、藏々三十餘棟、制札、井戸三ケ所、遠見番、弁天、金毘羅、いなり、合藥藏、仙台陣や、備米藏)は其一岬の北面にして、前にクナシリノツケを遠望して灣をなし、漁場多し。土産(鮭、鱒、鱈、鰈、昆布、水獣、こまゐ、きうり、海鼠、海草、椎茸、雜魚數多し)數ふるにいとまなし。土人(文化度千貳百余人、當時五百十一人。當所に十一軒三十六人有)所々に散在す。其地名ニムイにして往古は此所樹木多く有りしが故号しと。ニは木、ムイは灣なり。今訛りてネモロと云よし、此灣別て漁業の最中なれば、銀腮金卵砂上に鋪滿ち、出入の船絶えず。左衽の輩も晝夜の隔なく、休明の御世を賢(カシコ)み、其稼業をいとなみけるぞ目出度覺けり。依て一首を傍の壁に記るし置。

終夜からねもろの海にいねもせで網ひく業のいとまなげなる

扨爰にて知床行を謀て、土人四名（イカシチシ、シケハチ、ノヤホン、三蔵）を雇て支度し廿七日出立、コエトイ（小岬）浪が越る義なり。シヲムイ（小灣）死人を爰に埋む由、依て号く。ハツタルイカ（岩礒）海中貳丁斗に淵有、是に傳ひ渡り行が故と。ルイカは橋なり。ハツタラ（淵）ヨウロシ（沼）沼に楡を漫し置をいふ。アツケシエト（小岬）本名キナトエシと云を訛るとかや。并てモヤサン（小岬）ニランケウシ（平礒）木を濱に下る所の義、ヲチヲエヘツ（小川）岬を廻り、ホーヌイ昔しクスリ土人等來り、寳を盗ミ合戰し故事有。ア・ナイ（小川）深き故也。ヘロカルウシ（小灣）鰊多き故号く。ウエンナイ（小川）惡澤と云儀、ホロムシリ（小灣）此所人家（十一軒、番や、藏々有）有、ヲトスケムイ（小灣）崖曲りて灣に成り、其灣浅く船を遣り難しとの義、昔し會所元に土人の無りし時、此所の者移りしと。トフケナイ（小川）水源山に曲り入る故号く。チヤロコロフイナ（岩崖）口の有る石有と云よし、クトウシ（小澤）白芷虎杖の類多しと。ポルセムイ（小灣）海藻が打上り腐しとの儀、ユックマイ（小灣）鹿有る義。クテセムイ（小灣）弓を彈故事也。ヲンネトウプト（川口）大沼（周五り）の口の義、其源はコンフムイの方に入、周に蘆荻欝叢たり。冬は一面の氷に成、皆其上を往來す。トウハエ（沼口）是ヘトカ（中川）の口にしてフウレン（沼）の南口なり。（從ネモロ凡四り半）

ペトカ（川巾廿余間）ヘツトカの結り川有と云義、其源ホロトウの後ろより來る鮭漁多し。

濱形東向に成る、シユンマンタエ（沙濱）過てトウバエ（フウレン沼の口巾六十余間）是より入れば厚ウシ

東
トマリ
西

別（番屋）に至る。余は此所の漁屋ニ入一宿す。（従トウハエ壹り）

廿八日平明發舟、青魚大に群來氷色變じたり。又海岸に石勃卒多く打上たり。砂濱またアシリコタン（漁場）ルエサンサル（漁場）過てニシヘツ（是まで三り）、爰にて休み是より一渡しに右にネモロ、左にトコタン、シユンヘツを望み（海上三り）。

ノツケ（通行屋、辨天社、制札、藏々多し。また諸方の出稼小屋多し。クナシリ渡海場なり）に着。此所ノツの岬にして腮の出たる如きと云義也。ノツケはノツキの訛り也。爰にて支配人（傳藏）に頼み、案内者（ウエンヘツ首長アイヨフキ、シヘツ小使イナンケクル）貳人を増す。夜間宮氏に連られしと云者（チヤシコツ首長チンバ）を呼、諸方山越の話し等承りしが頗る益を得たる事有。

廿九日殺更發レ舟ヲンネニクル（ノツケ淵内）、此所傳藏開墾の畑有、土地沙に貝殼接の所え外より土を持運び入、雜穀野菜類廿七品を植種したり。別ても麥小麥の熟し様風土の異ると思はれず、偏に同人の苦心に出る也。日昳。

メナシ七ケ所第六番の川也。源近し。上に谷地多し。魚類桃花魚のみ也。

コイトイ（従ノツケ淵内五り二十七丁、番や、藏々、人家十三軒）此所内海より外ェ百間斗船曳越也。海岸通（一り）チヤシコツ（城跡）ホニヲイ（番や）追分有、左舍利山道、右（十三丁）の方シベツ（番や、藏廿余棟、制札、井戸、辨天社、クナシリ出稼、土人廿三軒）シベツはシベヲツの訛り、鮭有る義なり。

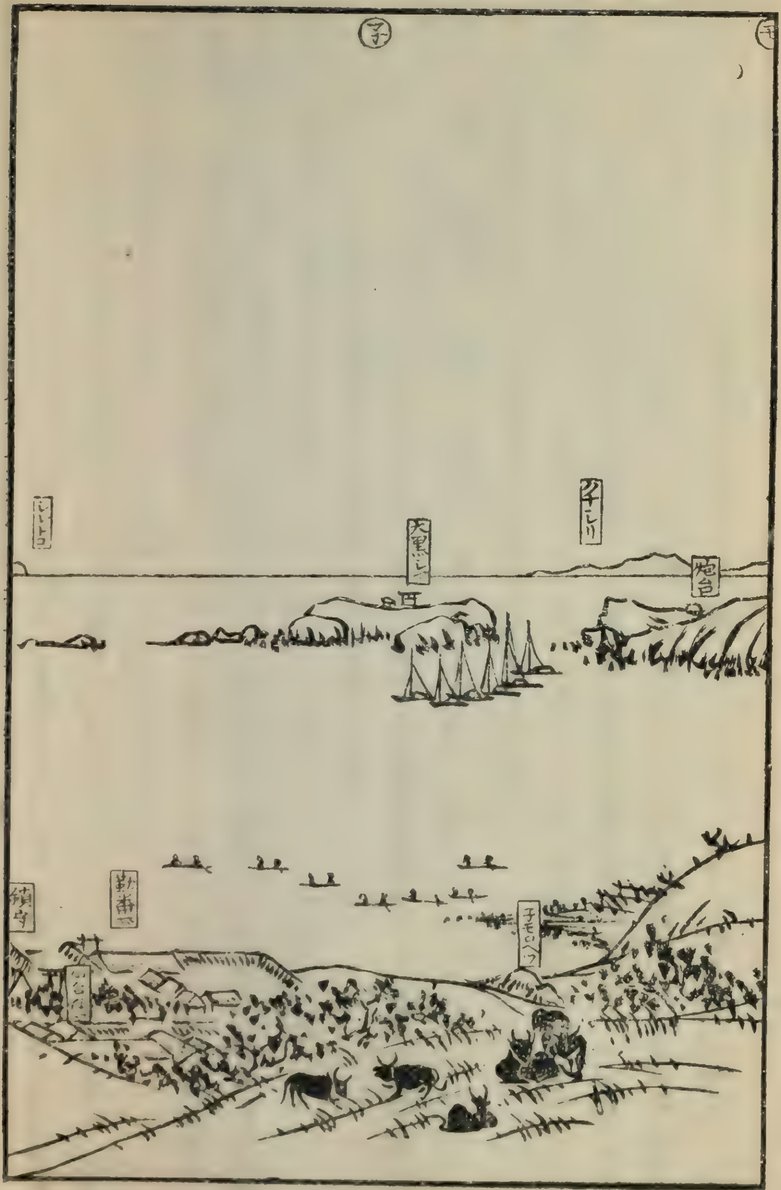
五月朔日酋長カムイサンケ山土人アラブニを連て川上を一見し、翌夕方歸る。

メナシ第一の川也。(一りヨ)分れ右をモサと云、源はチセネ岳といふ。左り本川舍利山道筋上り、又分れ、右テクンヘツ岳の後より來る、左りカンチウシの南を廻り、ヲタウニの上ニシヘツ岳の北より來る。委數は山道の所に記す。

三日船渡シこへ陸道黄花山慈姑南芥菜黑卷丹多し。皆土人の喰料也。サンホツキ(番や、鮭有)魚懸棚と云義。東面クナシリに對して眺望よろし。イジヤヌ(川巾七八間、番や、板藏八、人家五軒、制札、いなり)名義は鮭が卵を置と云義也。少し小石濱

メナシ第五の川、小字多し。源はチセネ岳と云。家の如き山より來る。過てカエハイ浪音高に依て号く。フチヤシナイ(小川)旱天にも水の增減無故号く。チシネ(赤崩)過て、チウルイ(番や、藏四棟)また北岸に(番や一、藏五棟、人家七軒)も有。

メナシ第四の川、小字多く、源は舍利のヲンネ岳より來る。魚類多し。其譯汐急の義也。當所にゲンヂロと云乙名有けるが、此曾祖父セントキ者、寛政亂の時山より何知らず歸り來るや、和人に出逢、此亂を聞驚き己の家の網の中に包ミ隱し置家内の者に計略を言含め、一端徒黨の者に組し、密に厚岸に到り、ヲツキニ婆イコトイ等と談し、追討使の下りを待て叛賊を平らげ、後其和人を歸國せしめし事領主江聞へ、若干の褒賜ありし家なりと。過てトコロ(赤平)マルウシ(同)名義、傳はらず。コタ


炮台
鎮守
勤番所

ヌカ(川、番屋、藏一棟、いなり社)村所と云義、此所昔し人家有しが今サキムイへ引取てなし。漁事はコイトイ土人を連來り遣ふ。

メナシ第七の川也。南岸字多し。源はヲンネ岳より來る、上に大なる瀑布有。并てモウセウシ(小川)、蕁麻多が故也。シルトウシ(平)上に谷地有、其水平江通濁る故に号く。コロクニウシ(平)欵冬多き義也。過て(三十三丁)クンネヘツ(番や、藏六棟、制札、いなり)に到る。暗川と云義。上に人家(九軒)有。又川筋にも有。

メナシ第三の川也。源は大(ヲンネノボリ)岳より來る。其南岸所々等に温泉(セセカ)有。魚類多し。過てホンコタン(小川)ホロコタンケシ(小川)

廻りムイ（小澗）平の下通り（一り三丁）サキムイ（小川、番屋、蔵六棟、いなり、制札、人家五軒）灣の義也。此所川無れ共人家有る故七ヶ所の内に入る也。イシヤマニヒラ（平）獺平と云儀、往古神が獺を取りしと云故事有。ヲニチウナイ（小川）雨大の時流木多き故号く。ホロヲニチウナイ（小川）ウエンヘツ（川有）昔し此所に人家有りしが、疫病流行してより今の所に引移りしと。依て悪川の名有るか。今は人家なし（一り八丁）。

メナシ第二の川、字多く、源は舎利ウエン岳より来る。冬春堅雪の頃是より舎利のウエンヘツ江山中一宿にて越ると也。魚類多し。

ヨコマフ（小川、番屋蔵六棟、辨天社、制札、人家十五軒）本名ヨヲロマフの山、何方よりも此所江来らざれば見へずと云義也。爰にて召連し乙名

(アイヨフキ)家にて宿す。上に鎮守社有。是に上ればクナシリ一目ニ見え鷗角鷗等其邊りに多く群飛ければ、其社の前に戯れ置ぬ。

　蝦夷の海羽うちきほひ越わしのたけき心ぞうらやまれける

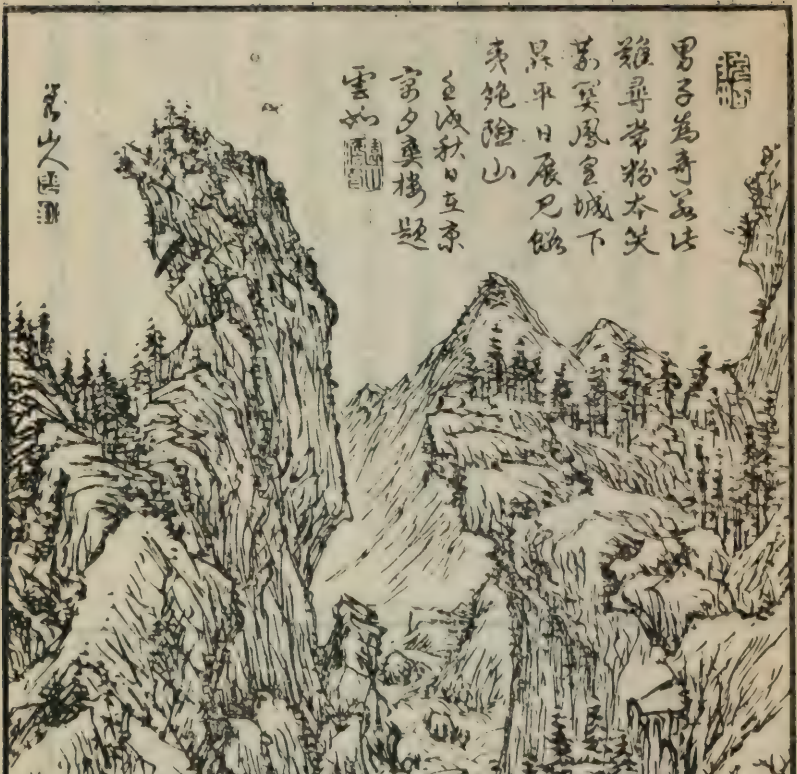
四日従レ是は海岸磊々たる大石にて歩行難く、依て船を備て發す。微風帆腹を孕し、海上拾余丁を逍るに山全形を現し、地勢を明にする事を得たり。平の上には廣野有て東南へ向、頗る土地宜く見へ、上は舎利岳、クテリンヘツ岳、チセネ岳、ウナヘツ、ヲンネヘツ、サリキウシ、イミキ岳、シヤマツケ岳、祖父岳、羅牛岳等風景目覺しき事也。并てルウクシナイ(小川)川筋字多し。左エキシヤラシ岳、右祖父岳、其間を舎利領へ往昔は越しと。依て此名有といへり。モルウクシヘツ(小川)是よりも越に宜し。此邊海岸懸絶嶮、チヌ、シ(岩窟)神靈在が故皆木幣を奉て過。是を神家とも云。并てチヤシウシナイ(小川)城跡有澤の儀。其所より土器、矢根石、雷斧等出ると。ソウランヘツ(小瀧)瀧落川と譯す。リイホコマナイ(小川)高石落澤との義。ホロムイ(大灣)ケトンチヒラ(平)土人等鹿を取て繩に繋き乾たる所に依て号く。シユンカルコダン(小川)油取所と云義。ヲタツネフ(小川)樺多く有義也。タツカルウシ(番屋、藏貳、小川)樺多き義なり。此邊にて海鏡を多く見る、中にしやくま、ばんど海月等云て、只圖にて見たる斗成物を見たり。實ニ美麗なり。又鯟　其邊り一面に群をなして來るに、海上一面に色も異る斗にて、其洪大なること實に思ひやらる。ヤーネシユマ(大岩)根細く

末太く三丈斗の大岩有。是に依て号くると。（三り十八丁）。チニシペツ（番屋五棟、小川、ラウシ權現の社）本名チフニウシヘツ船材多との義。昔し神が船を作給ひし故なりと。マツノイ（小川）川上に何鳥にても巣が有るとの義也。ホンマツノイ（小川）ワタラ（岩岬）ソシケイ（平）此所雨後に石落崩るゝ故に号く。此邊へ來るや、風起濤立ける故に岸に船を寄來る。レフンシラ、（岩磯）沖に暗礁有故か。ホロムイ（大灣）フフウシ（小澤）樅多き譯也。是内地の樅にて、松前方言ド、、漢名溫杉、土杉、鳳尾松等の字有。岬を廻りラウシ（小川）昔し鹿熊（ユツクイシヨ）等取り必ず爰にて屠りし故に其臓腑骨等有しとの義也。上に羅牛岳と云神靈著しき岳有。麓に溫泉有よし。過てイコヌシマイ（大岩）掌を合せし如き岩有と。マカウシ（小川）蕗薹（マカヨ）多き義也。船を（一り十八丁）午過ぎトラエ（小川、番屋、藏二棟）に入。風波荒きが故上陸す。此所番やは崩たる故、上に大なる岩の有に入て宿す。其岩には岩菅（クスリムヤ）、濱薺、岩櫻草、紅白を接咲たり。今宵は夕節句のことなるにかるゝ異郷に寐ることぞと思ひ

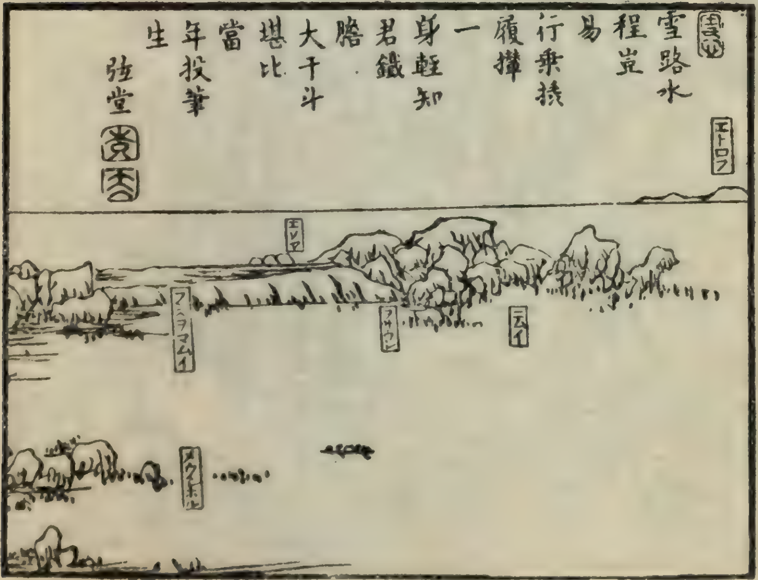
仮寐する窟におふる石小菅葺し菖浦と見てこそはねめ

等戯れ、岩壁に記し置ぬ。扨夜更るや我等が喰て捨置し魚骨等を熊出來りてバリ〳〵と喰ふ。其音にはいと物寂くぞ覺たり。

五日遲明發し舟、此方は納紗布（ノツシヤフ）より靄大に薄く、クナシリ島も手に取斗に見ゆ。崖に添行、チカフユエキウ



シ（大岬）鳥取の義、前にリイシユマ（柱石）高岩凡五丈斗、鳥糞にて白く成たり。其中に見馴ぬ水鳥多く、寫照も致度思へども、洪濤に揺れける故空く過ける。シユマチセ（岩窟）此所に大岩窟三ツ有。ハシコエペツ（小川）此川筋に屈曲たる何とも知れ難き異木有る故に号ると。恨くは其木を見ざるをや。并てトヘニウシ（小川）松前にて云イタヤにて常繁楓、また野鶏楓等の種にし漢名椒櫚に當るかと思はる。サシルイ（小川）砥石有る故に号く。エンルン（岬）トノヌカルウシ（岬）誰も此所にて日和を見て行故に号く。ヲチカバケ（川有）両岸峨々たる高嵓の所の川口に螺の如き黒岩有る故に号く。チエツフンヘツ（小川）魚多き義也。チエツフシヤクヘツ（小川）魚無故号く。モウセカルヘツ（小川）蕁麻取川の義。クアマナ



イ（小川）弓置澤との義。キ、リヘツ（小川）蚊多き川の義。大岩岬廻り（三里）ルシヤ（小川、大岬是よりシレトコまで一灣ニ成る）本名ルシヤニとは縣道下るとの義也。又ルは路、シヤはシヤクにて無なり。是より先懸斷巖絶壁にて一歩をも進難き故号く。又是より西地のルシヤヱ雪路越るに宂し。フフウシ（小川）ランコウシ（小川）松前にて云かつらの木多き故号く。此木何に當るや、和名抄に因て桂（一名擭、計復二音、和名女加都羅）と有は肉桂に混じ、又楓（一名欇、風攝字音、和名乎加豆良）其外古事記に湯津楓とし、山王耀天記に檮梲、また天書（卷一、藤原濱成著）に大杜樹等訓たり。何れか是ならん。過てヲショロマウ（岩磯）往古義經卿此所に鯨の流寄りしを切て蓬の串に刺て燒居られし時、其串

折れて火の中に倒しや、公驚き給ひ、尻餅突給ひしと云故事有。并てトカリムイ（小灣）水豹灣なり。チヤラセナイ（小川）カモイヲ、ヘツ（小川）熊が居川なり。リイウエンシリ（小島）ウエナキ（平磯）昔し厚岸土人來り櫂を揆て倒れし昔話有、依て号く。モエレウシ（平磯）ヘケレノツ（小岬）明き岬と云義也。メウシホル（岩洞）日陰の洞の義。クチヤコタン（崖）大なる奇岩重たり。ニカルウシ（小川）木伐に多き義也。爰に瀑布二條并びて落、其風景頗る妙也。シネシユンエト（小岬）樺を燃て魚取る由にて号く。キナウシ（平磯）此上屏風の如き岩有、下に二十疊敷とも云岩礒有、上にホル（大岩）とて石門有り。過て（五り）イシヤウヤ（平磯）上にネモロ舍利の境柱有。（從ネモロ會所四十一り貳十七丁四十間、從舍利運上屋十八り三十一丁）是より土地嶮岨、岩ます／＼奇なり。ヘケレホロ（石門）とは其奥深けれ共、上に穴あり、明き故に号く。フンベヲマムイ（岩灣）汐路の加減にてか、北海より氷に打斃され流來る鯨、皆此灣による故に号く。土人の傳へに、此所の神は鯨が御好故に寄ると云傳ふとかや。シヘツより此邊鷹多く又巣も多し。ニヲイ（平磯）上は大岩壁に成、其所へ流木打揚たり、故に号く。并てヌサウシ（第一岬）則此所を稱してシレトコと云なり。磯には鷲・海猿、水豹多くキヤア／＼と唱、其聲喧く、物寂敷もの也。岩には姫栂一面に漫延し、其間に岩薺（蛇ニンジンの種）小櫻草、陸には獨蘭、米蘭、紫蘭等咲たり。土人は此紫蘭の根を以て漆器磁器の破れを繼ぐに能く附もの也。イマキコトクとは喰に齒に附と云義也。廻りてムイ（岩灣）此所の中央にカモイシユマ（立岩）と云て大なる立岩有て、神靈著き由にて、何鳥も留らざるも奇也。并て

イタシペイショ（平岩）海猪岩の義。是海猪多きに依て号く。此説種々有れ共何に當るや否、海濱（本草綱目）葦鹿（和名鈔）ウミカムロ（紀州）海驢（釋日本紀）美智（古事紀）惣て同物異名か。今松前箱館にて海馬の字有は其否を知らず。灣中今日は波静にして長閑なれば数多浮寐しけるに、一首の蜂腰を戯ける

浪枕うきともしらず浮寐して世渡るみちぞ心やすかる

此邊雛脚茶岸を赤しと思ふ迄打上げ、實に目覺敷ぞ見へたり。夕方に成り金鳥の落かたクナシリ、エトロフの山々に輝き、手に取斗に見へければ、一首を又戯れ、小使カラリケ（此所土人二軒）の家ニ入宿を乞ひ泊りぬ。

ながむれば手に取る斗見へにけり衣ぬぎ捨て飛わたらばや

六日犂明微雨、是より根諸の四人を歸し、案内に小使を頼み、近午より發し舟、岬を廻るや、メナシタアンムイ（小灣）岩洞二ツ有、其奥深し。カムイチセと云。是に打入る浪の音恰も梭尾螺を吹如し。タカシヤラニ（岩平）イヌロウシ（出岬）水中に差出る義也。并てシユンタムイ（小灣）西灣との義也。タンネシラリ（岩磯）長岩と譯す。ヲンネハシクロホル（岩洞）大なる鳥の洞の義。此中に渡り鳥とてエトロフより渡來に鳥多く窠成たり。其鳴聲キヤアくと鳴て、内地の物と異り。過てウエンヒロタウシ（岩岬）岸に岩洞多し。クシヤラキウレ（石門）ワツカエワタラ（岩礒）水滴崖の義、此邊暗礁多し。一櫂を過たば其岩角に打砕れん事をカモイエバ（大岩）怪岩蝮蛇の頭の如く海に差出、爰に一ツの昔話有、辮躄の妹なる者此所

水豹（アサラシ）トーカリと称す

其子ら年しとくるもことカラをぬぐ　鼈甲皮

第一ノ年　第二ルヨ　第三アムレベ

第四ホキリ　カリと云　第五ヘカトロマウシ

又ヘケレと云　又レタレと云　是より次よりシレプイ

ケレヨー　ウファイツカリと云除

極寒の場所に住む極その

寄るを知らず皆手に脈あり又

名をも知らぬ依て記すその多し私註

南華逸人

ヘカトロマウン
ルヲヽ
レトカラ

に住けるに、其を呑んと大蛇が來りしを、辨慶踏潰したるが化して岩と成しと。其時傍に五柱の神が立て居給ふと見へしが、則此五本の岩也とて、今アシキネシユマ（五岩）とて有なり。ヲラウシヲハエト（岩岬）キヤルマイ（石門）辨慶妹大蛇に追はれ逃來り、此穴より覗居たりしと。其上をヲフイ岳また知床岳とも云り。義經様此上にて軍勢を集め給ふ時、烽火を立給ひしと。ヲフイは燒と云事也。ホロムイ（大灣）上にホロムイ岳、其下にホロソウ（大瀧）并てイマニツウレ（立岩）串多を云譯也。此所柱石重れり。昔し義經魚を串に刺て燒、其殘を捨置れしが石に化しと言傳ふ也。アフンテエンルシ（岩岬）下に大岩洞、其奧を知る者なし。大なる蝙蝠住て物寂し。最上常矩は樺明を燈し五六間入りしに、蝙蝠其火を消て入難き

を、樺火多く燈し十余間入るや、蝙蝠も無成り、火も一時に消しと。其時最上氏の言れしは、此洞には畏き（ヤエカクノ）神（カモイヲケイス）在る故、誰も入べからずと誡め置れしと。恐らくは是陰氣の爲に蝙蝠も住む事能はず、火も燈らざるや、其を神が在る故入難きと言て禁し置れしか。惣て古屋、古井等へ入りて死る者有、是陰氣に犯るゝ物也と。其を試るに、火の燈る所は犯さるゝ事なしと。尤溪縣龍門山高聳千餘丈、有二洞口一僅四尺、深邃莫レ測、石竇滴水如レ雨、有二蝙蝠一大如レ鴟撲二人面一不レ可レ入（八閩全誌）とする物か。廻りてホンアフンルイ（岩岬）ヲンネアフンルイ（岩岬）灣の奥に砂濱有、漁に來し時止宿する故号く。此岩洞には石燕（ペトンノフラ）多く、また石鐘乳一面に垂たり。ホンムイ（小灣）シレトコより此所まで岩皆黒く、是より西の方惣て赭色

を帶び、山岳も五鬣松多く甚優美也。ホロエンルシ（大岬）カルマイクシ（岩平）古昔ヲキナと云大魚を神か釣給ひしに依て号ると。前にトシユマ（柱石）二岩と云儀也。イタシベワタラ（岩岬）俵を積重たる如き石也。爰に一條の瀧あり恰も糸を亂たる如く、數十仞の岩壁に掛れり。又爰ニ掌を立たる如き岩壁有、上は皆赤兀山纔きに青氈を敷たる如く五鬣松匍匐し、谷間〱未だ雪に埋もれ、眺望いわん方なし。ウチセ（岩岬）前に一ツの岩礒有、モシリソウ（岩島）と云。チセワタラ（大窟）家岩と云義、フウレソウ（小瀧）赤瀧と云義、ホンソウ（小瀧）ヲキツシユマ（出岬）此所高十丈斗にて、上太く根細く松茸の如く立たる岩有て、風波巖敷時は搖くよし、依て号く。是を廻りフプウシシレエト（岬）椴多岬鼻と譯す。アツトヒラウシヘツ（小川）海面に有川と云義、ワシロ（小瀧）シヨウランヘツ（大平）瀧落川の義、此三ツ何れも瀧ニ成、海中に落入る也。プイ（岩洞）此所岩壁に種々の形なしたる洞有。カハラヲハタラ（岩岬）ハシユニ（岩岬）等名義知れず。チヤラセホロ（洞）大なり、岩洞の前に瀑布懸り、渇水の時は洞中に入に宜しと、是ぞ孫呉空が住る華果山の水簾洞も如此と思はるべきの勝地也。其奥深して見へ難ければ、暫く船を停て眺望するや、石燕瀧水に濡漫りて幾若干となく飛出ぬ。ホロソウ（大瀧）是瀧、上は一條にして下は三四條に成て海に入たり。其中段岩角に折て水烟を飛しけるが、暫時に我等の衣服に浸しぬ。又此所をカモイコタンと云よし、其洞には神靈有て、二ツの穴有、一ツは寒風を噴き、一ツは暖風を生ず。按るに一ツは淺く、一ツは深きか。其深きより夏は冷風、冬は暖風を噴出すかと思はる。頭を擧れば、其源はチヤラセホロ岳と云高山

也。ホロワタラ（大岩）ホロシユマエンルン（岩岬）ウエンヘシコケウエウシ（岩平）往昔龍神が此所にて鯨を追寄せ來りしと云故事有。ウハシムイ（小灣）此淵には四時とも雪有る故号く。ホンエヲロシ（岩岬）ホロエヲロウシ（岩岬）掌を立し如き岩海中に突出す。チヤラセヲイ（瀧）ヘケレ（砂濱）明き所と云義、チヤカハ、イ（平濱）トントルハウシ（平）此所昔し義經公網を干置れしと云故事有、上は峨々たる山也。チヤカヲハニ（小川）子供が喧嘩を致たる故事有。レツパンヘツ（大岬）此岬シレトコより第三番目故此名有と。廻るや未申にヲシヨンクシエトを始て見る。此邊汐路甚急にして舟捗取らず、一揆／＼の間に流戻る故、一同出精して漸々遣るに（從シレトコ三り半）ルシヤ（二十余丁、平磯、シレトコより此所迄舟の寄せ所なし）此所ネモロのルシヤと背向すと、上をルシヤ岳と云、并て西南にチヤ／＼岳（大山）祖父と云義也。此邊第一の高山なれば此名を冠らしむ。是またクナシリにも有。それも島中第一の高岳なればなり。シヨシヨ（小石）ブンカラウシ（小川）輪に作る木有る故号く、是獼猴桃と言て松前にてコクワと云木有故号く。土人渴する時、此枝を切其水を吸ふ、甚甘味有。實また甘く、能く永睡を治す。方言諸國にて甚多き物也。

是續斷藤山行渴則斷取汁飲之號曰東風菜（太平寰宇記廣州信安縣條）また含水藤（本艸綱目）涼口藤（廣東新語）諸藤（齋民要術）水藤（同）同物か。木に筋通し切口を吹に數丈の先に息通す。土人此枝の、水に晒たるを以て火を附るに用ゆ（久摺日誌に出ス）。并てトマヲマヘツ（小川）延胡索有川の義也。ホンペツ

（小川）シラリヤ（平磯）シユフンヘツ（小川）桃花魚多きが故か。フフウシノツ（小岬）シルトカン（平磯）マウウシナイ（小川）玫瑰(ハマナス)ある川の義、ホンユワヲヘツ（小川）ユワヲヘツ（瀧）硫黃川の儀、此三筋皆硫黃岳(イワヲノホリ)より落故に号く。此邊の岩石皆硫黃の氣に染て白く成、また赤く染む。仰向(アフガ)ば山腹に硫黃燃出、黒烟中天に漲り、百萬の雷一時に轟が如く、山岳鳴動危崩と欲し、實に物寂く思はる。又是より岩皓傳ひ行、ルウサンペツ（小瀧）路下る川と云義、岩平に溫泉の瀧有。昔しネモロ土人路に迷ひ、此所へ下りしと云傳ふ。并て溫泉の瀧二筋有、是をトヌウヘツ（瀧二）と云。ヨウコウシヘツホ（岩磯）此邊水豹多く、土人等爰にて括槍(オソ)持て待受る所也と。并てヨウコウシノツ（小岬）ヨウコウシヘツ（小瀧）上は一筋三段と成て

落る。タツコフサキ（小岬）小山岬と云儀、タツコフソウ（小瀧）カモイワツカ（清水）峨々たる岩壁に溫泉の瀧有。幷てエヤラムイ（小灣）イタシベウニ（小岬）海猪多きが故号く。テシレト（小岬）汐急なる岬との義、是第四番の岬也。爰に石門有傍に岩洞多し、其中にカウリ、と言る鳥有、水に泛ぶ事小鴨の如く、此洞中に巢あり。此所三四丁のゝに群飛し、其他一疋も見る事なし。是は昔よりの事か、夷諺俗話（寛政四年串原正峯著）にも書載せたり。此鳥を土人は血道の藥也と云傳へしが出府の後、秋畊老人（岡本萠之丞）に語しかば、此鳥九州に一ヶ所有と、其餘有る事を聞かざる由話されたり。過てブクシヤウシタツコプ（小山）茖葱多き小山と云義、フクシヤウシノツ（小岬）イワヲヘツ（巾五六間）水源硫黃岳より來

る故至て酸し。此川筋を上り右ヲンネ岳、左り祖父岳、其間より根諸(ネモロ)のラウシに越と。其半腹迄惣て三四尺の五鬣松匍匐し、其上凡八丁斗の間一面硫黄山にて燃出たりと。當三月堅雪の上を道澤某上り數塊を取來りしが頗る上品也。同人の話に一谷皆硫黄にて埋り、百人二百人の人扶を入る共五年拾年に盡る可にあらず、和人の上りしは我が始也と。土人は時々取に來り、樺を以て餤穂とす。其傍に又大なる洞有、爰にて宿す。此邊り長七八寸位にて二股三股に成し石沕卒(トツイオヤ)多く打上たり。又一種すほや(チタムニ)（津輕方言）と云物有、是は他にて見ざる物也。余津輕にて見たりしが、皮を剝去り、腸を喰し。其肉皮の水晶の如く透明する所を味噌に漬け置て是を琥珀漬と云、又其を鹽藏して三四年を過て用ゆるに宜し。今津輕南部にて石沕卒(ホヤ)をして梅干と書、恐らくは是拇干の當字が梅干に誤りしかと思はる。近比是を味噌漬にして上に生梅干(スホヤミソ)味噌漬と書て江戸邸に贈る。邸より其何物たるを知らず、梅干と心得て或寺に贈る、和尙その美味を賞して再び其邸に乞しと言る話し有しが、實に可笑事ならずや。

山にふし海に浮寐のうき旅も馴れば馴れて心やすけれ

七日快晴イワヲナイノツ（大岬）大岩洞二ツ有、是に舟を挨入るや、石燕多し。北夷考證に輟耕錄を引て燕の窠有所には鷹が居ざる由書載せありしと覺へし故、其事を小使に穿に、いかにも此シレトコ岬の北面には岩洞多けれ共、燕多が故鷹の窠なし。南面には燕無して鷹の窠多しといへり。如何なる故か解難し。ホロヒナイ（小川）大石澤と譯す。ホロシユマエンルン（岩岬）イシカリムイ（小灣）行留り灣の義、過て岩壁百

イワヲ瀧音
秋水寫

余間、其岩面小穴多くありて溫泉涌出す、實に奇とすべし。掌に受れば餘程熱し。幷てチカホイ（岩平）爰にも平に穴有、フレペと云て赤き水滴る。是又掌に受るや、手の色染る也。按に石中雄黄に丹朱の氣有、加ふに鐵氣有かと思る。フウニ（岬）庫木と譯す。昔し此所に庫の如き木有りしと云。廻りて
ホロヘツ（川巾五六間、水源ネモロのチニシヘツと向背す。鱈鮄、番や、板くら有）前に岩礒二ツ三ツ有、此所より舎利の方は飛舸て可也に往來するに宜し。爰へ來るや、出風嚴敷成りしが故、船を内に入ウエンクシ（岩岬）惡有と云所也。廻りて（從イワヲヘツ凡三里）
ウトルチクシ（平礒、鱈鮄、番や、板くら有）と云に有、名義岩間を舟が越る義か。其邊岩の峨々突兀たる様頗る面白く、其上をヘケレ岳（高山）と云。麓の木立に水晶蘭（ナンバンキセロ、竹馬艸、銀龍草、ツユサエモン）を多く見たり。是濕陰の氣にて生る哉。去年石狩にて腊葉にせんと種々手入致せしが皆腐爛したり。如何にも水氣多き物也。又海岸に剪股、白蒿多し、士人是を腹痛の時煎じ用ゆ。惣て此地の物は内地の艾と異にして湯上て喰ふに香有甚妙也。又蕗臺も内地の物は苦味有、此地の物は苦味なし、其土地の異に依てか。白蒿生二荒野中一、苗高二三尺、葉如二細絲一似二初生松針色一、（救荒本艸）。周氏曰白蒿香美可レ食（本艸彙言）。とす。此地茵蔯の種類多し、余も七八種を腊葉とし歸る。夕方水豹一頭を捕獲たり、是を屠るに肺の臟六ツ有。士人の言に、水豹は六枚、狐は三枚也、と語る。士人は如斯事迄よく心附しが實に不思儀と云べし。

八日黎明發レ舟、風浮て恰も如レ砥、濛々たる曉霧中岩礒の間を行てエペルケ（并て）アハツテウシ（小岬）柱石疊て岬と作る所へ土人エナヲを立て拜す、其名義釣多との譯也。上は緑樹陰森たる所故、其陰に魚多く寄る故釣多と云しか、チエトイウシ（小澤）喰土が有るの義、前に言土人草根を喰する時、此土を少し入るゝや、草根の毒に當らざる由、　是を探には鳥獸の喰て居るを見て其を試として取る也。　別て鹿は好て喰よし也。是有レ涯土色黄色・群鳥飛來啄咀所レ食（常陸風土記）とする物也。ヘケレ（小岬）明しとの義、チヤシコツエト（城跡岬）フンペヲマペツ（小川）鯨有川と云義、コエシヨモイ（小灣）ウカウフ（平濱）此所黒白の小石美しく接り敷たる故号く。并てエシヨマヲマナイ（小瀧）義經公野宿し給ひし時に席（キナ ムシロ）を投捨給ひし故事有。ヲシユンクシエト（兀岬）是第五岬也。（漁小や有、鰊跳場）チフシケヲロ（岩礒）此所にて義經公の船破れしと、依て号く。チヤラセナイ（瀧）ヲヘケフ（小川）爰にて義經公の船え垢多く入、沈まんとせしを、漸々汲捨助り給ひしと、其垢取に入れて持上り給ひし水の跡、今川に成たり。并てサンクシ（小川）上に沼有、芦多しと譯す。フレチウシ（岩礒）此邊秋過より海荒る時フレチと云圖の如き物打上るよし、依て号くとかや。土人は是を乾し置て腎藥に用ゆ。フレは赤くチは腸にて赤き腸の儀也。其形魚腸に似たれば也。余是を諸君子に帑に

武州羽田邊の漁人探りて比目魚を釣る餌とす、方言非といふ。和名抄　七簑食繹を引て蝙蝠其貌似蚓而大者也。和名烏（イ）、俗用蝛蛜（イイ）二字是也。予酢を以て食ふ味美にして毒なし。

阿部喜任識

無目無口。无骨无藏不飲黄泉
不食槁壤。隨沙蠕動。類螾而
長。一種海味。諡曰龍腸。
案閩書、沙蠶生沙海沙
中如蚯蚓泉人美諡
曰龍腸、
平安榕室山本錫夫

尾張小春女史寫

多氣志樓主人蝦夷產フレチト稱ス、乾腊ノ品ヲ余ニ贈レリ、然ドモソノ生活ノ形狀ヲ詳ニセザレバ和產充ツベキ物有ヤ未ダ之ヲ精定スルコト能ハズ。恐クハウミミヽズ(海蚓)ノ屬ナルベシ。又ハヲリヒモ(羽織紐)ト呼ブ品有、亦此一種ナリ。又井或ハユ又ハアカユト稱スルモノハ充ルニ妥ナラズ（中畧）

又洋說ヲ按ズルニ、此類ヲ蚯蚓(アールトウヲルム)ノ次ニ擧テ「ゼーウヲルム」（海蚯蚓ノ義）又「ゼーサントウヲルム」（海砂蚯蚓ノ義）ト云。ソノ形蚯蚓ヨリ大ナリ。海濱砂中ニ產ス。漁師之ヲ捕テ魚ヲ釣ル餌トス。蚯蚓ノ如ク砂上ニソノ糞アルヲ見テソノ居穴ヲ察シ、鐵ノ扠子ヲ以テ掘出シ貯ヘ用ユ。又砂中ヨリ甚ダ引出シ難キコトアリ、是ソノ體ノ管ノ內ニ在テ大ニ膨脹スレバナリ。體ノ形圓長ニシテ太サ一指、長サ一尺、甚ダ粘滑ニシテ雜腹蘭(サフラン)黃色ノ液ヲ泄出ス。此蟲沙ヲ去テ扁桃油ニ浸シ藥用トナセバ關節痛耳痛ヲ止ム。此類ニ數種アリト云。是亦「フレチ」ノ種ナルベシ。

文久壬戌冬日　　錦窠伊藤圭介識於市谷邸舍

余乾腊の物を病者に試に其能著し。ヲンネヘツ（川巾五六間、人家六軒）急流なり。川筋字多し、其源右ヲンネ岳、左ヘケレ岳、此所より根諸(ネモロ)のトシヘツに出る。是より轉太濱（二十二三丁）ホロナイ（小川）過て砂濱になる故一同上陸して見行、海面平にして面白し。マクヲイ（小川）此所昔し判官樣が合戰なされし時、幕を張給ひしと。其跡土疊の形に成しと言傳ふ。過てヲクルニシ（小川）ヲシヨマヲマフ（小川）川上兩岸納漿の所有と、依て号く。ヲタムイ（砂灣）ヲチカバ

男ぬハえうこ生けり
よめぬハ八つふくろう
はらかしてはりえ
さうりれえてうに汝そ
こうふさますめかるゝハ
しせうらふよろなび
就中ほハ我栄とり
くこむかなをハ様ふ
俵へ跳ろて八山へそ
分て事振てそおりも
てくゝ又むハつうふ世し
いれらつうくもいする
さゝまれ事の皆をに
ふむめハ歌をやしれ
こむるうそしも言
ろろむ我えのと合
見てりかさはしうり
つくつくふ八入ハもの
木ゝそでしれしト多
以前やさへつりこ
とれるへみもこてる
うきむて遊しうき
入れるめやもうれ
こにまゝたるをまい
て協しれる　重淵

ケ（小川）上に沼有て毎年其沼にて鴨が巣を作り雛を育る故号るとかや。ヲライネコタン（小石原）ホロトマリ（灣、鯱、番や有）ノツカヲマ（小岬）岬有義也。シユマーカリペツ（小川）此所より舍利の方には石一ツも無との儀也と（人家二軒）、濱には種々見馴ざる小貝多し。上は廿丁余の原なり。此村には呑水無が故に七八丁も山手より汲來り用ゆ。カモイヲ、ヘツ（小川）神有川と云義也。沙濱しばし過てウナヘツ（川巾七八間、西岸人家五軒あり）此邊の海岸皆遠淺にして美し。

兩岸小字多く、源ウナヘツ岳より來る。水遲流にして魚類桃花魚のみ也。

汐愈干ける故舟は遙に海を遡り、我々上陸して來るに、砂の薄く塊まりて椀の如く、また板の如く、大湖石或は佛苻の像の如く成りし物を見たり。是テシホ濱のエキコマナイ邊にても見當りしが、是を土人に尋に、夷言ヲタイタンキと云、譯して砂椀也。是海底の埴土打上しが砂の上にて凍りし物也と、然るや。泥は乾て縮み、砂の所は縮ざる故に椀の如く成りし物也、と言しが、尤と思はる。色多く青黒し。扨干方に成る所の汐留りには鰈（シヤコンヘ）、小鰯（ホンセツフ）また七星鰯、フンペトツポと云鱶に似たる物、ホツキ貝等多し。打上けるを腰の二重にもなる斗の爺婆や、見る影もなく破れて只肩に懸る斗のアツシを着、如何にも菜色をなしける病人等杖に助りセカチ（男子）、カナチ（女子）等大勢其汐干にあさりけるが、我等を見て皆寄來りし故其譯を聞に、舍利、アハシリ兩所にては女は最早十六七にもなり、夫を持べき時に至ればクナシリ島へ遣られ、諸國より入來る漁者船方の爲に身を自由に取扱はれ、男子は娶る比に成ば遣られて晝夜の差別なく責遣はれ、其年盛を百里外の離

島にて過ず事故終に生涯無妻にて暮す者多く、男女共に種々の病にて身を生れ附ぬ病者となりては働稼のなる間は五年十年の間も故郷に歸る事成難く、又夫婦にて彼地へ遣らるゝ時は、其夫は遠き漁場へ遣し、妻は會所また番屋等へ置て、番人稼人（皆和人也）の慰み者としられ、何時迄も隔置れ、それをいなめば辛き目に逢ふが故只泣々日を送る事也。如此無道の遣ひ方に逢ふが故に、人別も寛政中ハ貳千餘（文政五壬午改三百十六軒千三百貳十六人、安政五戊午改百七十三軒七百十三人）有しが今は漸々半に成しぞうたてけり。此儘にては今廿年も過れば土人の種も如何と案じける由等話、其故爰には丈夫の者なき故、獵漁等出來難く、其日〱の烟も立難きが故、毎日此汐の干を待ては小貝を拾ひ、汐滿來れば野山に入て草の根等掘て辛き命を繋ぐ事とぞ。聞に其憐さましければ、我等が貯への糧米を聊かづゝ分ち與へ、來るや、タンネウシ（沙地）此所長き沙地なれば号く。過てバナ（人家十五軒）の岬を廻りて川に入るに（巾三十余間）しばしにて舍利運上屋へぞ着し、一同鎭守社に至りエナヲ削りて山海の神を祭り、途中の安を賀し、車座に一樽を開き結合宮崎氏へ濱にて聞し由を委に話しけるに、此一事は同人も深く心を用ひ居らるゝ由にて懇にうけがひ呉られけるも嬉し。余も今はかゝる事までも彼等の言の譯る迄に其國言に通ぜしぞ嬉しければ、取敢ず一首の腰折を其壁にしるし置ものなり。

日數へし程もしられて蝦夷人の言も聞わくまでに成けり

知床日誌終

書知牀日誌後

北蝦夷自我而拓之則可以鳩集夷民包括海陸為恢復舊疆之基真千萬年無窮之利也怠忽不理為露人所奪則後來大禍有不可勝言者蠶食狼呑必及内地在上君子不可不深長思慮經営措置新露人之衝也伊勢松浦子重屢經行蝦夷跋渉探歷窮谷險崖莫所

不至須習見訪予叩北蝦夷事則亹亹談論明晰詳備絕島荒涼景象恍在目中蓋蹠實地者与懸空論説不同予甚感其用心焉適其所著知床日誌刻成求跋尾因題數言道北方防備不可一日忽懈也

文久三年七月沙書

松岡豐田亮

昭和四年四月二十日印刷
昭和四年四月廿五日發行

日本古典全集　第三期（非賣品）

多氣志樓
蝦夷日誌集　第二

編纂者　正宗敦夫

發行者　東京府北豐島郡長崎町一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長島東一

印刷所　深川區西六間堀町十六番地
不二製版印刷所

印刷者　柳井隆雄

發行所　東京府北豐島郡長崎町一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇六二

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03076 3932

DS
895
H6M38
v.2